

万国のプロレタリアート・被抑圧民族団結せよノ

解放通信

創 刊 号

1972.9.16.

☆ 旧ML同盟の総括の一視点にかえて ☆

☆ 大衆路線を実行し、プロレタリア的思想方法・工作方法を実践的に体得し、左翼総体の整風を遂行し、プロレタリア世界観を打ち鍛え、真の革命党を創立しようノ

☆ 米帝追撃・日帝打倒・ソ帝包囲の戦略・戦術を遂行しようノ

☆ 帝国主義の恩恵を主要に受けていない階級を基礎とし、社会主義労働同盟を闘いとうろノ

解放委員会政治理論機関誌

解放通信

解放委員会政治理論機関誌

創刊号 1972. 9. 16.

目次

卷頭言	2
通信・感想欄	3
論文	我ら不死鳥の如くはばたこうノ 戦闘宣言にかえて	
序	5
第一章	67年10・8闘争以降の階級闘争の諸結果と展望	
	総括の導きとして	7
第二章	思想方法・工作方法の統一に基づく党建設	
	人民に奉仕する党建設にむけて	7
第三章	日本革命の性質を解明するにあたって	
	その覚え書第一稿にかえて	9
第四章	我々の敵はだれで、友はだれであり、同志はだれなのか。	
	日本社会各階級の分析をこころみるにあたっての	
	覚え書	10
第五章	我々は何をなすべきなのか、何からはじめるべきなのか	
	組織方針にかえて	10
闘争報告・方針		
1	学生運動の進むべき道	99
2	農業—農民問題を戦略的に組織せよノ	110
3	釜ヶ崎 夏期合宿報告	115

理想とはなにか。革命をやりぬくことこそが理想だ。前途とはなにか。革命事業こそが前途だ。幸福とはなにか。人民に奉仕することこそが幸福だ。

(「王杰の日記」より)

- インドシナ三国—中国—朝鮮人民の闘いに学び、反帝国主義をさらにうちかためようノ
- 三里塚・沖繩・部落人民の闘いに学び、連帯し、さらなる米帝追撃・日帝打倒闘争を遂行しようノ
- 8・25インドシナ革命戦争支援集会—9・16三里塚機動隊殲滅一周年集会を打ちぬき、革命的潮流として今秋期闘争を主導的に闘いぬこうノ
- 相模原M48戦車搬出入阻止闘争を闘いぬき、10・21—11月沖繩自衛隊派兵阻止闘争を断固貫徹しようノ
- 日帝の農業切り捨て政策と対決し、社会主義労働同盟実現のため、農業—農民問題を社会主義と結合すべく、農民工作を着実に準備しようノ
- 社会主義と労働運動を結合し、帝国主義的労働運動を粉碎し、帝国主義の恩恵を拒否する階級的な労働運動を創出しようノ
- 全共闘運動の成果を正しく継承し、人民に奉仕する学生運動を創出し、プロレタリア階級と固く団結しようノ

解放委員会として組織活動を開始するにあたり、きわめて不十分なものでありますが、我々の基本的な総括視点及び方針を提起し、多くの革命的な人民と共に階級闘争の一翼を担うべく、ここに我々の政治理論機関誌『解放通信』を創刊することにしました。

すでに我々解放委員会は、8/25インドシナ革命戦争支援集会で公然とその姿を登場せしめ、多くの諸団体、友人、同志諸君と共に八〇〇名近くの結集をもってその集會を勝ちとり、ひきつづいて相模原・9/16三里塚機動隊撤滅一周年集會に参加し、10/21・11月自衛隊沖繩派兵阻止闘争を最善を尽くして闘いぬく決意で、今日の組織活動を展開しています。

現在、解放委員会に関係している少くない同志が過去、日本マルクス・レーニン主義者同盟（以下、ML同盟と略す）に関係しており、不十分なながらも、我々の今日は旧ML同盟の活動の総括のなから存在していると考えます。

七〇年六月決戦後、ML同盟は革命的左翼総体に整風運動を提起しつつも、自ら七〇年代の厳しい階級闘争の地平にたてまされず、多くの矛盾を内包しつつ自己崩壊し、明確な総括らしきものを何ら人民に提起することさえできず、不信と虚無観を残してその短い生命を終えました。

我々の多くは、その崩壊を獄中でしか対応しきれず、仮出獄後一年有余の活動の中でようやく多くの革命的な友人諸君と共同の闘い

ができてきたところまで至ったという状況です。我々は、過去、ML同盟の闘いを支援して下さった多くの人々、友人、同志諸君に対して、文字通り、解放委員会の組織的実践活動を通じてその責任を明らかにしていきたい、諸々の矛盾を階級戦士として共に闘うなから解決していきたいと強く願うものであります。

仮出獄以来これまで、一年有余の活動を重ねてくる過程において、我々は現在の左翼諸戦線の混乱と分裂がいったい何に基づくものなのか、我々は誰のために、何のために革命を志しているのか、日本共産主義運動はいったい何なる方向に止揚されるべきなのか等、活動すればする程、党建設を掲げることの、革命を遂行することの重大さをこれまで以上の厳しさをともなって痛感する次第です。それ故、尚一層我々は、たとえ小さなことであっても、たとえ現在の主体が微力であるとしても、最後まで階級戦士としての自覚と責任を放棄することなく、人民に奉仕する、革命観で一切を統率し闘い続けていく決意であります。

我々は、未だ微力ではありますが、我々はそれに憶することなく謙虚に自己に課せられた階級の使命をかみしめ、同志諸君と共に団結し、全力を尽くして遂行し、真の革命党建設に向けた闘いの一端をになうべく奮闘努力しています。あせらず、着実に、一歩二歩前進していくものであり、多くの人々から御支援を願うものであります。最後に、ML同盟員であり、不幸にも七〇年二月日大右翼との闘いでその若き革命戦士としての生命をたった故中村克己同志の霊に、旧ML同盟の部分として、今一度階級闘争の前面にたつたことを報告し、巻頭言を終えたいと思います。

一九七二年九月一六日

解放委員会

取り取り線

◎ 我々、解放委員会は、六〇年代階級闘争（とりわけ六七・七八以降）の根底的総括の上に、真の革命党建設に向けた闘いの一翼として、現在の日本左翼運動の混乱・分裂を整風運動をもって相互止揚すべく活動を開始しています。

◎ 我々は、全国各地で、我々と共通の問題意識をもって闘いを組織している人々が多数存在していることを確信しています。我々は、これらの諸君と団結し、批判し、大団結に基づいて連絡・交流を行うことを通じ、ともに日本左翼戦線を、分裂の歴史から団結の歴史へ、更なる闘いの前進をはかっていきたいと思ひます。

◎ 同様に、我々はかつて旧ML同盟又は労学高解放戦線に何らかの関係のあった同志、友人諸君よりの連絡・交流を強く願うものであります。

この欄はそのための一助として活用して下さい。

〔宛先〕

東京都豊島区北大塚二一十一一十 パワー大塚二〇五号

紅灯社気付 解放委員会

× × × 通信・感想欄 × × × ×

氏名	住所	職業	所属団体	備考

（通信・感想については裏面を利用して下さい。）

我ら不死鳥の如く はばたこう！

— 戦闘宣言にかえて —

《 序 》

この論文は、日本革命—世界革命へむけての階級闘争の実践のためであり、この理論はひとえに実践に奉仕するものであり、不断の実践の中ですみやかに解体・止揚されながら深化されていくものとしてある。我々は、自らを「不死鳥」と位置づけ、いかなる苦しみ、困難に直面しようとも、その苦しみを自己の階級形成の一環となし、必ず、人民に奉仕する「プロレタリア思想を会得し、自己を不断にプロレタリア階級の戦士へと解体・止揚しつづける青年となさせしめることを追求する。

我々の合い言葉は次のようなものである。

「理想とはなにか。革命をやりぬくことが理想だ。前途とはなにか。革命事業こそが前途だ。幸福とはなにか。人民に奉仕することが幸福だ。」

1. 我々は何から学び、何を再出発の原点とするのか

(一)、ベトナム—中国—朝鮮人民に代表される不断の革命闘争から学び、必ず日本革命を実現し世界革命の一翼をになう。プロレタリア国際主義を必ず遵守・発揚する。

(二)、三里塚闘争に代表される「帝国主義的土地取り上げ政策粉砕闘争」、反基地闘争、「反独占闘争」等々から学び、共に闘い、共同の敵である日米帝国主義（同盟）を打倒し、日本革命の実現を共同の事業とするべく闘いの準備をする。とりわけ日帝の「農業切り捨て政策」と闘っている「勤労農民」と必ず結合し社会主義労働同盟

を創出する。

(三) 沖縄人民の反日米帝闘争に学び沖縄人民との連帯を闘いとる。
(四) 部落解放同盟の闘いに学びつつ、自らをあらゆる差別と闘う革命主体へと形成する。

(五) 我々は(三)(四)に代表される闘いに学び、未だきわめて不十分である主体を明確に認識したうえで再出発をする。

「共通の革命の目標を実現するためには、同志と団結し、人民と団結しなければならぬ。その団結の仕方及び色々な困難な問題の解決の仕方に対しては、色々な方法があるが、しかし一番重要なものは、態度の問題であり、これをなくして、つまり「正しい態度」なくして正しい方法はない。」

我々は「謙虚」と言う二字を我々の再出発の原点とする。「注一」

2. 我々は何を反面教師として教訓化し、何を打倒するのか

(一) 米日帝国主義を頭目とする帝国主義者を反面教師とし打倒する。
(二) 口で社会主義を唱え、行動で帝国主義を発動する社会帝国主義者を反面教師とし、彼らの反動性・欺瞞性を日米帝国主義を打倒する中で徹底的に暴露し粉砕する。

(三) 議会主義政党である社会共産党に代表されるブルジョア民主主義の内実を暴露し、彼らを反面教師としつつ自らの体内に浸透している小ブルジョア主義思想と闘い、必ず日米帝国主義(同盟)を打倒しプロレタリア独裁を樹立する。

(四) 我々は、連合赤軍内における同志殺し事件を他人事のように考えられない。この「同志殺し」を総括したと称して、単なる路線

第一章 六七年・十・八闘争以降の階級闘争の

諸結果と展望 — 総括の導きとして —

I、新左翼運動の到達点

ここでは、

(1) 謙虚な態度、思想方法・工作方法の根本的態度について。

(2) 革命は暴力でおこなうプロレタリア独裁樹立のマルクス・レーニン主義の本質について。

(3) 党に人民に奉仕する党建設とは何かについて。党とは、唯物弁証法というプロレタリア哲学に基づいた思想方法・工作方法という求心力を会得し、諸々の階級実践の中で発展せしめ、綱領を創出し、人民の軍隊、革命的統一戦線を軸に、人民を団結せしめる磁石という吸引力を実践的に作り出すことであるということについて。

以上三点を論じる。

II 国際情勢と日本革命的左翼に問われている任務、

— 世界階級闘争の現段階の分析にかえて —

ここでは、

(1) 正しい情勢分析について↓権力実体と正しく結合した分析の方法について。

(2) 帝国主義本国の革命をどう実現するのか↓日本革命的左翼に問われている任務。

以上二点にわたって分析する。

III 国内情勢と革命的左翼の闘いの総括及び方向性について

— 我々の今後の具体的任務の解明にかえて —

ここでは、

方針上の誤りとしてとらえたり、極左冒険主義の破産、はたまたスターリン主義のもたらす必然的帰結であるとかで終わらすことには反対する。我々は、この「同志殺し」としての結果の中に日本左翼運動の本質的かつ致命的欠陥をのぞき見ることができると確信する。我々は、この共通の基盤に立ちえる同志たちと共に必ず「同志殺し」に至った思想的欠陥を克服し、多くの死者を永眠させたい。

我々の再出発は彼らと共にあり、死者の霊と共にある。

3. 全文の構成内容と構成主旨について

この論文は我々自身が分析した新左翼運動の総括であり、同時に我々の多くの同志が所属していた日本マルクス・レーニン主義者同盟の総括の部分をも内包するものである。我々は多くの異なった道程を辿りつつも現時点で共通の位置にある多くの同志、友人諸君と固く手をとり合い、「団結—批判—大団結」の原則の基で相互止揚・切磋琢磨しつつ再出発を志すものである。我々の総括とは、とりもなおさず、不毛な分裂の歴史から団結の歴史へ転化する。ための作業である。この闘いの中を通じて、文字通り実践的な総括(現時点から色々解釈したり、次はこれだとかいう闘争形態を論じるようなものではなく)をなすことができるのであり、我々はこのようなものとしての総括を現に進行する階級闘争の渦中に必ず実現する。

(1) 支配者階級・小ブルジョア階級・プロレタリア階級(革命的左翼)の動向を各々分析し、

(2) 全共闘運動・三里塚闘争・沖縄闘争・労働運動・入管闘争・軍事等々の諸戦線、諸課題についての総括・方向性について分析する。

第二章 思想方法・工作方法の統一に基づく

党建設↑人民に奉仕する党建設に向けて、

— 正しい思想方法・工作方法を

どのようにして会得するのか —

この章から五章までわたって、我々にとって根本的に欠落していたと把握される内容を論じ、それをどう克服しようとしているのかを明らかにしていきたい。我々は過去の左翼運動を色々見るとつけ、「いったい、我々は本質的に過去を総括してきたのだろうか?」「我々は日本共産党を本質的に総括しているのだろうか?」等々の疑問を提起せざるをえない。

我々は、資本主義社会から社会主義社会へと日本を変革しようとしていて。だとするならば革命主体たる我々は、日常生活、即階級闘争の中から、新たな社会建設をなせる「人間」を創出しなければならぬ。

我々は、すでに日本共産党建設から五十年を数える時代に存在している。いったい日本におけるマルクス主義者は、本当に革命主体が持つにふさわしい思想を創出し得ているのだろうか?。一般的回答として、否といえよう。我々は、この点に関して、色々とりつくりうのではなく、まず、率直にこのことを認めることから出発す

るべきである。それを認めることができるだけの実践を積み上げてきたのだ。日本人民の革命闘争は、常に支配者階級によって、歴史的に切断され続けてきた。我々は新左翼運動が切り拓いた多くの教訓をはっきりと受けつぎ、不十分性を着実に克服し、日本革命に勝利する持久戦を展開しなければならぬ。持久戦を展開するには、階級闘争の諸実践が、革命主体によってかならず運動と組織に、思想化―血肉化、されなければならず、またそうしなければ持久戦は発展しない。

この間の日本左翼運動を歴史的に見ると、常に、階級闘争の激動期が一定頂点に達し、一つの転換期に入ると、必ず痛苦な総括や自己批判等々が世に出るものである。ある人はこう言う。「日本の左翼の限界は、やはり民衆の生活感情から思想が形成されていなかっただことによると思う」。又ある人は「新左翼運動は、学生・小ブル運動だった。労働者と結合しなければならぬ」と。まったくその通りである。だがこの回答は、何も言っていないのに等しいほどの内容において、正解なのだ。

我々は総括と称して、現時点から過去を評論することに反対する。我々は、総括と称して情勢対応型的に、又は闘争形態をのみ論じ乗りうつりの、又エ的にふるまうことに反対する。我々は総括と称して、プロレタリアートの階級利害に責任を持つのでなく、即ち階級基盤といかに関連しているのかという観点を抜きにした、小ブルジョアの責任論、自己批判論に反対するとともに、言辞をあれこれねくりまわす観念論に反対する。我々は、総括と称して新左翼運動の欠陥を戦術一般の不十分性と論じることにも反対する。我々は次のような総括視点を持っている。思想方法、すなわちプロレタリア

する」作風であり、思想（方法）なのである。我々は、烈火の如き階級闘争の中で必ずこのことを会得せしめるであろう。たとえ何年の歳月が要されようとも！
中国人民にできたことが、中国人民にできないことはない。人民は永遠にして不滅なのだ。

第三章

日本革命の性質を説明するにあたって

—その党宣言第一稿にかえて—

我々が第三章を論じるのは、次のような総括に基づいている。我々はいったい本当に日本革命を遂行する準備があったのだろうか？ たしかに、現時点であれこれと評論（一九六七―七〇年のたとえ小ブル学生運動でさえ満足に実践できなかった評論家達によって）されているが、当時においては、文字通り全存在をかけて真剣に闘いぬいてきたことはまぎれもない事実である。しかし、当時の一定の激動期においてさえ、この闘争が日本革命の全戦略の中のどこに位置するのかについては、一切具体的に明らかにされておらず、ただ「この一戦をやりぬこう。戦いの位置の明確化はそれからだ」という領域を一步も出ていなかったのである。それゆえに、主観的には闘いつつも、実際には多くの人々を決起させることができず持続的な活動と蜂起にむげた周到な（計画的かつ系統的な）準備がなされず、文字通り「一寸さきはやみだ」の状態であったことも紛れもない事実であり、現在においてはとりわけ後者の事実を率直に認めることから出発しなければならぬと考える。

我々は、革命党派（旧ML同盟）として、即ち再出発を志す闘いの経緯者として、ともかくも闘った。したがって勝利だ、式の六九年

哲学（唯物弁証法）、その具体化としての工作方法・指導方法・作風等等々は、一朝一夕に培われるのではなく、革命主体の長期にわたる持続的な粘り強い努力によって一步一步培われ、築かれるのであるということを見ている。

今必要なのは次のことである。すなわち、自覚的に、全組織的に、たとえ小さなこと、たとえ幼児的なことであっても、思想闘争を展開することである。常に、あらゆる場所において、その段階に応じて、プロレタリア思想とブルジョア思想を闘わせることである。当然ながら、現実の路線・階級実践の中でやり、工作をめぐってなされなければならないことはいうまでもない。旧ML同盟も思想方法・工作方法に基づく党建設を提唱した。がしかし、提唱したのみにとどまり、実現化されるための道程を持っていなかった。つまり、毛沢東の文献上の言辞を通じて世の中を解釈したのであって、毛沢東思想（哲学）を持ってどう社会（同盟内においても）を変革するか、そのために何をまず始めるべきなのかということは一切考慮されなかったし、努力もなされなかったのである。我々がこの章で論じることは、決して新しいことではない。新しいことではないが、次の、新しいことを創出する、ために、新しいことではない、ことをただ実践してみようということなのである。

毛沢東思想（哲学）は実践を第一とする。そうプロレタリア思想は実践を第一とする。実践を第一とするということは何を意味するのか？ すなわち、実践されたことが思想化（革命闘争、新たな社会建設のために何がプラスであり、何がマイナスなのか。更なる発展にむかってどのような欠陥が克服されるべきなのか）される道程を持っているということである。その道程とは「経験を正しく総括

11月決戦・七〇年六月決戦の総括とそれを生みだした思想の中に革命党派としての「甘さ」、腐敗さ、があったことを率直に自己批判する。その総括の第一歩としてこの章もあるのである。即ち「ある場合は、戦術が『階級関係の全体性』の中から決定されないので、単に『左翼』陣営内の『党派性』として決定される戦術左翼的性格であったり、又ある場合は、党建設、党活動が系統性のない、即ち『革命的戦術』（レーニン）―蜂起・労働者権力樹立へ向けた『計画された戦術』として理解されないで、自然成長的、運動至上主義内性格であったりする傾向がそれである。これらの傾向は日本の革命的左翼が、最近の三年間の烈火の階級闘争の試練をくりぬけ、それを教訓化し、六〇年代の左翼反対派的衣裳を脱ぎ捨て、真の革命主体へと、飛躍する為に、極めて大きな阻害要因なのだ。

例えば、戦術が『階級関係の全体性』の中で決定されない『戦術左翼』的傾向は、階級闘争が、デモの様な比較的未成熟な段階ではさして危険な傾向ではないが、六十九年春から秋にかけての様に、闘いが非和解的になればなるほど、本格的な武装闘争を要求すればする程、最も危険な傾向として作用するのは明らかだろう。』

（『プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚書』。レーニン研究会政治機関誌「ボルシェヴィズム通信」第五号より）という

したがって、我々は「階級関係の全体性」の中の戦術「『系統性のある戦術』を日本階級闘争にしっかりと打ち立てるために、まず我々の主張する日本革命とはどういう内容であり、それを打倒し、だれが革命主体になりうるのか、革命の権力の性格はどういうものかを分析し、明らかにすることを始めたのである。すなわち、戦術

一戦術に位置付けられた系統的な、首尾一貫した活動形態を創り出すためにこの分析があり、今後我々は実践の中でこれをさらに検証し、さらに具体化していくとともに、最小限綱領・最大限綱領を、一般的空論的なものでなく、階級実践に即して必ず創出するものである。

我々は中国革命において、毛沢東が分析し、明らかにした、即ち『中国革命と中国共産党』『新民主主義論』『連合政府について』等々のものを日本革命の烈火の実践の中で革命の発展段階に応じて確立する。旧M.L同盟も綱領を準備した。が、その内容は今日のM.L同盟を見れば明らかである。我々は『五一年綱領』に対してどう総括するのか。『五一年綱領』とは、日本共産党が武装闘争路線を提示したものであり、その限りに対して注目に値する。だが、我々は現実の階級闘争、現実の諸階級の分析をなしに、即ち「プロレタリアートの隊列をどう打ち鍛えてゆくのか」の具体性をなしに一般的抽象的武装を唱えたり、革命的言辭を並列したりして「綱領」と称することに反対する。

第四章

我々の敵はだれで、友はだれであり、

同志はだれなのか。

一 日本社会各階級の分析を

一 ところみるにあたっての覚え書

第四章も第三章の主旨にふまえて論じられている。我々のこの間の闘いで何がいったい欠落していたのか。即ちそれは「敵がだれで、友はだれであり、同志はだれなのか。」という革命の本質的問題に關してあまりに無自覚であり、あまりに抽象的にしかわかっていなかった所にある。

我々は、帝国主義が全面的に崩壊にむかい、社会主義が全世界的に勝利する時代にあつて、マルクス・レーニン・毛沢東主義の普遍的真理を継承し、世界有数の帝国主義本国日本におけるその国情の特殊性にふまえ、社会各階級の分析を、必ず実践的なしとげる。

第四章はその小さな試みの一つである。中国革命の過程において、毛沢東が、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国の特殊性とを結合し、『中国社会各階級の分析』を生みだしたように、我々も日本の階級分析を今後の階級実践の中で必ずなしとげるものである。

第五章

我々は何をなすべきなのか

↑ ↓ 何からはじめるべきなのか

一 組織方針にかえて

第五章では、(一)解放委員会について、(二)協議会について、(三)独自の党建設について。の三点について主旨のみをあきらかにするが、それ以外は省略する。

*

以上が本論文の構成内容と構成主旨である。本論においてはこの主旨に基づいて論じているので、その上で分析してもらいたい。我々は本論文を、今後の実践の中でさらに検討し、さらに階級実践の烈火にたえうる内容にしていくことを明記し、以上「A序」にかえたいと考える。

〔注〕

○ 共産主義者は、成果と欠点・真理と誤りの二分法と言うマルクス主義の弁証法の思想を必ず備えるべきだと思ふ。「自己満足は損をし、謙虚は得をする」

○ 事実自分を高く評価すればするほど、得る結果は悪くなる。「分数のようなものである」

○ 謙虚、それは一人一人の革命の工作者がみな備えなければならぬ美徳である。

○ 謙虚と自己卑下は同義語ではなく、謙虚は自分を軽べつすることと同じではない。なぜなら謙虚は本来事実にもとづいて真理

第一章 六十七年十・八闘争以降の階級闘争の諸結果と展望

一 総括の導きとして

I 新左翼運動の到達点

一九五八年日本共産党を離れ、学生を中心とした若きラジカル集団として第一次ブントが誕生し、一九五九年から六〇年安保闘争に突入した。だが、彼らの出発は、現実の階級闘争の総括から日本共産党とたもとをわけたのではなく、日共中央の合法的・修正主義的変質、すなわち非革命的な不純物化から、自己の純粋性を保持せんがために、マルクス・レーニンの言辭をもって対置したのである。したがってそのかぎりにおいては、(日共中央の変色に対して)きわめて意義があり、たとえ安保国民会議内における最左派としてしか位置しなかったとしても、全学連主流派をささえ闘争に貢献したものである。

しかし、安保ブントは同時に大きな限界をも有していた。(たとえ六〇年安保後の分争や中ソ論争に一切本質的に係りきれなかった等々の現象を見ても理解されるように)それは、現実の世界階級闘争の発展に対して余りに無自覚であり、とりわけ世界階級闘争の

を求める態度で、客観的現実を正視する進歩的精神の表現であるが、自己卑下は一種の事実にもとづき真理を求めない、自信欠乏の困難にたいして萎縮してしまうこととの表現だからである。

(「相互の学習を強化し、足ぶみ状態、おごり、自己満足を克服することについての中央の指示(一九六三年十二月十三日)」の抜粋。筆者。)

先導者たる芽を当時すでに実践的に保持していた中国↓ベトナム又はキューバ革命に対して、正しく扱えきれず、逆にトロツキズム的、反スタ主義で否定してきた傾向そのものの中に本質的欠陥があることとして考えられる。

当時、世界においては、資本主義国家内における各国共産党が加度的に変色していく傾向にあり、それに対していわゆる新左翼の潮流の芽が各国に存在していた。彼等(日本では安保ブント)の闘いは、マルクス・レーニンの原典というフィルターを通ずることによって、既成共産党の、マルクス・レーニン主義の現実的發展という美名のもとにおける修正主義的・合法主義的変質に対して対決したのであり、既成共産党の非革命的な不純性から自らを隔離することを実践的にもやりぬき、その限りに対してはきわめて革命的であった。

だが、「マルクス・レーニンの原典というフィルター」は、マル

クス・レーニンの思想を正しく継承する内実を持っておらず、その内実は、マルクス・レーニンの生きた思想としての言葉ではなく、ひからびた活字を数条化するという観念論的傾向を色濃く持っている。そうであるがゆえに、現実の階級闘争の本質を正しく把握することができず、理論はますます観念化し、現実の階級実践はますます理論とかけはなれるという現象が生じてきたのである。安保ブンドもやはりこの領域を脱することができず、安保闘争においては現実の階級関係を分析しえず、現実と未来に対する方針を出しきれないまま盲目的なラジカルの行動に追随するしかなかったのである。従って、安保闘争の終了と共に個々に分散してしまい、六〇年安保闘争を實質的に継承しきれないで終ってしまったと考えられる。

〔注一〕

六〇年安保後四分五裂した戦線は日韓闘争を媒介にし、一九六七十年・八闘争へと登りつめ、全共闘運動の大衆的爆発、そして三里塚、沖縄闘争と結合し、ベトナム革命戦争絶対支持の立場を結節環としつつ、日本階級闘争の中に不滅の大きな潮流を創り出すに至った〔注二〕。この潮流はたとえ未分解とは言え、すでに六〇年代前半のマルクス・レーニンの言葉による解釈とか、いわゆる学生の先駆論に基づく闘いではなく、現実の社会矛盾（大学当局・右翼・公団・日帝等々で表現される）の重圧をもっとも鮮明に感じる部分が決起したものである。そうであるが故に、政治党派が指導しようとも指導しなくても、たとえ一つの闘いが権力によって暴力的に粉砕されようとも、多くの活動家が存在し、その周囲に広汎な人々が結集するのである。今日言うまでもなく、日帝の反動政策に対して人民はあらゆる形でこの階級矛盾と対決しており、社共にも裏切られよ

うとも、すでに人民は闘いを放棄するのではなく、更に権力と闘いを続けている時代であり、明らかに階級闘争は発展しており、闘いの条件はあらゆる所に存在している〔注三〕。このことは次のことを意味していると考える。多くの人々が、もっと強固な組織、もっと広い革命的活動、もっと強力な指導集団を、もっと強固な中央集権的な自分の全生活を革命に献げることのできる組織の必要性を要求しており望んでいることを意味しているのである。

一九六九年十一月決戦後、多くの党派が「党建設」を唱えた。旧ML同盟も然りである。しかし現実には主観と反して進行している。多くの闘う集団が生まれ結合が要求されつつも、客観的には混乱と分解が深まり、系統的に位置付けられてはいないが戦線は更に多様化してきているのである。

この現象形態は何を意味するのであるか？。内容はどうあれ主観的には団結し全体を指導する党建設を考えており、客観的には分裂をくり返し内ゲバをくり返していると言うことは、白で団結を唱え、行動で不毛なセクト主義を張っていると言うことである。だとするならば問われていることはより本質的であり、より原則的なことであろう。我々の革命観そのものが問われ、階級闘争に対する態度そのものが問われていることなのである。

このようなかでいま日本革命的左翼に問われていることとはいったい何なのであるか。

第一に、今我々にとっても必要なのは、まずもって「大衆の闘いに謙虚に学ぶ」態度と能力をどう創り出すのである。このことは政治路線の総括と密接不可分なのである。小ブルジョアの路線から被抑圧民族の革命戦争に学び、プロレタリアートに依拠し、党建設は不可能である。

一、我々はベトナム革命戦争を見るにつけ、そして一九六七年以降の我々の闘いの中で、初步的に会得した命題「革命は暴力でおこる。プロレタリア独裁の真理。」を一步も後退せしめてはならない。二、今我々に問われていることは、あらゆる多様な闘争形態を認め、それを正しく重層的に武装闘争に結合することである。そのこととよりもなおさず人民戦争である。

我々は過去において、原則において、あまいで戦術において画一的な、きわめて不明確な、見通しを持たない路線であったことを認める必要がある。我々は、そう認めるがゆえに、それが敵であり、だれが友であり、だれが同志であるかを明確にしなければならぬ。我々の今後の基本的姿勢は「原則において忠実で、戦術において柔軟な、きわめて明確な見通しをもった路線」の基で、かならず人民戦争を準備し、展開するものである。

第三に、したがって党建設とは、第一と第二の思想のもとで持久的に人民と共に階級闘争の中で闘い取るものであり、互行にともたりにして綱領と称するこむずかしい言葉を併列することではないというところがわかった。そのことは同時に新左翼的闘争形態を同心円的に拡大（拡大ではなく現実はどうも縮小の方向にも考えられるが……MLは縮小でなく減だ。）、純粋培養などで党ができてくると考えるのは幻想であろう。最左翼の（党派を現実的に名づけていようとそうでなからうと大きな差はない）党的相互提携が階級闘争の諸実践の中で意識的になされる必要があるということと同時に認

する革命路線へと転化するには、謙虚、というプロレタリア的態度を会得しなければならぬのである。この総括抜きに、即ち左翼総体とりわけ党派の人々は過去の自分が、主観主義、自己論理の絶対化、超主観的押しつけ主義、又はその裏返しとしての大衆追随主義であったことを卒直に認めるべきである。このことを抜きにして総括を理論又は綱領一般に決って流してはならない。まず必要なのは現実に対して卒直に見れる目を持つことである。非は非として認め、正は正と主張する態度である。「謙虚」の二字を知らないや党建設は不可能である〔注四〕。

我々は以上のことを前提として次のことを確認するものである。

一味方を敵とよび、革命を反革命と規定してはならない。基本的には次のようにとらえるべきである。実践的検証による批判と自己批判。権力との闘争の勝利のためには、単一の前衛党でなければならぬが、現実にはそれをめざす諸党派・分派が存在しているという現実の承認から出発し、その間の闘争を通じての、大衆の政治生活の参加をもつてする党派闘争・実践的検証を堅守し、この闘争形態を厳密に統御し、党的相互提携のために権力との闘争が要求するプロレタリア的規律を確立すること。党派闘争は成長の泉である。だが小ブルジョアの自然成長性は反対物に転化した。成長の泉たりうる形態——原則性を回復しなければならぬ。〔「帝国主義を攻囲せよ」佐野茂樹氏。傍点、筆者。〕

第二に、我々にとって必要なものは、革命は暴力でおこる、即ち「プロレタリア革命にかんするマルクス・レーニン主義の学説は」とどのつまり、革命の暴力で国家権力を奪取するという学説であり、人民戦争で反人民戦争にたちむかうという学説である。〔「人民戦

め、強く主張するものである。

我々は以上のことを前提として次のことに同意するものである。「鉄と磁石は成分は同じ鉄であるが、原子の並びにちよつと変化がおきただけで、磁石という、不思議な力、発揮する。党も軍も人も、成分は同じだが、人民があつちを向き、こつちを向きてバラバラでは、力を発揮できず、党は団結ということ、不思議な力、を發揮し、軍、人民を引きつけてゆかねばならない。ベトナム人民があれだけ強いのはマルクスの『万国の労働者団結せよ』、レーニンの労働者階級の武器は組織である。ホーチミンの『団結、団結、大団結』に忠実だからである。鉄のように原子が内ゲバしていれば力が無いが、団結して磁石になれば、不思議な力、を發揮する。」

(長征 1・上野勝輝)

党とは、唯物弁証法というプロレタリア哲学に基づいた思想方法・工作方法という求心力を会得し、諸々の階級実践の中で發展せしめ、綱領を創出し、人民の軍隊、革命的統一戦線を軸に、人民を団結せしめる磁石という吸引力を實踐的に創り出すことである。

従って、我々は、不毛な分裂・内ゲバの歴史から団結の歴史へと闘いの歩を進めなければならず、必らずやりとげる。「原子の並びにチョット変化を加えれば」と言うようにはいかぬかもしれないが地道に持久戦の中で努力する。我々の任務は現在の混乱を自然成長性に任せたり、無政府主義的に美化したりするのではなく、どうこれを目的意識的に止揚することができるのか、この階級実践の烈火の中で自己の小ブルジョア主義を實踐的に払拭し、党建設を開始する。

以上我々にとってはこの五年間の実践の中で到達したことはこの三点である。この三点の到達点をしっかりと守り抜き、それを發展

II 国際情勢と日本革命的左翼に問われている任務

1 世界階級闘争の現段階の分析にかえて

我々は中国共産党が九大で分析した四つの基本矛盾、即ち「世界大戦の問題について、二つの可能性しかない。一つは戦争が革命をひきおこすことであり、一つは戦争が戦争を押しとどめることである。なぜなら、現代の世界には、被抑圧民族と帝国主義との間の矛盾、資本主義国、修正主義国内部のプロレタリア階級とブルジョア階級との間の矛盾、帝国主義と社会帝国主義との間及び各帝国主義国との間の矛盾、社会主義国と帝国主義、社会帝国主義との間の矛盾という四つの大きな矛盾が存在しているからである。これら矛盾の存在と發展は、必然的に革命をひきおこすのである。第一次、第二次の世界大戦の歴史的経験に基づいて、次のように断定することができる。もし帝国主義、修正主義、各国反動派が第三次世界大戦を世界人民に押し付けるならば、これらの矛盾の發展を大いにはやめ、全世界の人民が革命に立ちあがるように促し、すべての帝国主義、修正主義、各国反動派が残らず葬り去られるだけである。」の分析に同意するものである。なぜなら「社民党の綱領の中で中心点となるのはまさに諸民族を抑圧民族と被抑圧民族に分けることでなければならぬ。この区分は帝国主義の本質をなすもの(『革命的プロレタリアートと民族自決権』レーニン)であり、『帝国主義が全面的崩壊にむかい、社会主義全世界的勝利にむかう』時代の矛盾の分析であるからである。以上を前提として被抑圧民族の民族解放運動の動向、社会主義国(中国、朝鮮、ベトナム、アルバニア等々)の動向、帝国主義の動向、社会帝国主義国の動向を分析して見よう。

させて行く以外に何の前進の道も我々にはない。我々はこの五年間ML同盟をつくり、同盟をつぶした。権力との熾烈な闘いで多くの死傷者を出した。ML同盟においても七〇年二月の中村克巳同志を失った。我々はこの目で見てきた。多くの同志が戦線から離れて行くのを見てきた。人民に対して革命を唱え決起を呼びかけることがどんなに責任あることなのかがよく判ってきたような気がする。「人民に奉仕する」という言葉の重さがよく判ってきたような気が卒直な所である。

我々は三点の地平(謙虚、革命は暴力でおこる、党とは磁石なり)を守り一歩も後退させず、發展させ、必らず思想方法、工作方法の統一に基づく党↑人民に奉仕する党を着実に建設してゆく。

(注一) 現実の階級闘争から出発するのでなくマルクス等々の古典文献からひきうつして世界を解釈する人々が未だ日本には多く存在する。哲学的にはトロツキズム的の反スターリン主義者の集団である。又日本共産党のように各国の特殊性という美名のもとに自主独立路線と称し、一切のマルクス・レーニン・毛沢東主義を否定し、現実の階級闘争の發展に敵対している集団もある。

(注二) 日韓闘争の総括及び社会学同ML(ML同盟の前身)が毛沢東主義を掲げる時の総括等については第二章で論じる予定である。

(注三) この旧来の運動と六八年以降の全共闘運動後の闘いの質の違いは感性的であれ党派対ノンセクトの対立として現在なお正しく止揚されず続いている。

(注四) 「謙虚」を態度に基づく活動方法とは第二章の所で論じることの實踐である。

(一) 民族解放闘争の動向

第一次大戦後、アジア、アフリカに火の手のごとく広まった民族解放運動には、二つの潮流が未分解ながら存在していた。一つは中国↓ベトナム(朝鮮)↓インドシナ三国へ現在の結合している潮流、即ちいかなれば民族解放運動はプロレタリア社会主義革命の一部と規定し多大な貧農層に依拠し、民族解放社会主義革命と規定し闘いぬいた部分であり、それはとりもなおさず持久戦でついに六〇年代後半から七〇年代において世界プロレタリア革命へ登りつめる英雄的闘いを画し、帝国主義本国人民と結合し、世界革命の主体を担う部分と成長した一大潮流であり、帝国主義の包围を突破した流れである。今一つは、エジプト↓ナセル体制・インド↓ネール体制・インジ体制・インドネシア↓スカルノ体制に代表される潮流、いかなれば、ブルジョア的(小ブルジョア的)民族独立運動の過渡期性に規定された一変種であり、その依拠した基盤は、インテリゲンチヤ・官吏・軍隊の将校グループ・民族資本家等であり、指導者は大地主、富農か官吏の息子で植民地時代、植民地本国において大学等に留学できる身分の人々であった。

従って前者の潮流に比べて政権が安定せず、政策に一貫性がなく、インドネシア、コンゴ(カンシャサ)等に見られるようにクーデターによって親帝・反共国家へと転換する例が多くある。いかなれば小ブルジョアの基盤が基礎であった潮流である。

この潮流が民族解放運動ではたす進歩的役割は六〇年代前半で終了しており、一九六五年インドネシア九・三〇事件のスカルノ体制崩壊はまさに、小ブルジョア又は民族ブルジョア左派が民族解放運動ではたす歴史上における進歩的役割が終わり、その指導は貧

農と結合したプロレタリアート、すなわち前者の潮流にはつきり移行しなければ勝利しないことを示すものであった。だがしかし、まだ最後の決着はついておらず、世界革命の問題と密接不可分となりつつ、革命の指導権をめぐって、プロレタリアートと小ブルジョアジーとの闘いは更に激しくなろう。社会帝国主義が後者の潮流の後だてとなり、彼らを援助し彼らに従属させつつ世界戦略の一方を展開していることを知っておかねばならない。(インド・エジプト・パングラ等を見よ、中国と明確に異なる)。(注一)

(二)、社会主義国(朝鮮・中国・ベトナムを軸とする)の動向

我々は、朝鮮・中国・ベトナムこそ、世界プロレタリアート・被抑圧民族を代表している国家であり、マルクス・レーニン主義を発展的に継承したものであると考える。中国革命の成功をもって世界革命はより具体的に人民自身の事業となったのである。なぜなら世界の大半はいわゆる「第三世界」と称せられる資本主義の発展してない国家であり、農村であり、農民その他の非工場労働者部分だからである。毛沢東主義はまさにレーニンが未だロシア革命で成功しえなかつた共産党(プロレタリアート)と農民(貧農)との内的結合に成功したのである。

農民、被抑圧民族を「解放してやる」という思想があるかぎり世界革命も本物ではないのだ。

中国革命は小所有者として存在する農民をどのように革命主体へと改造するのか文字通り、実践的に要求された。これに答えることがトロッキズムや資本主義国家内の合法主義、修正主義者共に対する実践的批判であり、それはとりもなおさずロシア革命の一つの重要な総括であり、一九三〇年代から帝国主義の反革命的干渉に

打ち勝ち持久戦を展開できた所の本質である。

今や中国共産党は、一九六〇年の中ソ論争を一つの結飾環とし、自から世界革命の主体とならせしめていたのである。プロレタリア文化大革命は中国七億人民を世界プロレタリアの指導者たらしめる闘いであり、革命であった。それは文字通り中国革命を一国内的民族革命の枠にとどめるのか、それとも世界革命の道につくのか、ソ連修正主義の道か、プロレタリア革命の道かの大きな闘いであり、ブルジョア実権派とプロレタリア革命派との死闘であったのである。

その点においてまさに九全大会は勝利・団結の闘いであった。中国共産党は世界人民に宣言した。「我々はすでに偉大な勝利をかちとった。しかし敗北した階級はなおあがきつつけるものである。これらの連中はまだ生きており、この階級はまだ存在している。だから我々は最終的勝利を口にしてはならない。数十年間この言葉を口にしてはならない。警戒心をなくしてはならない。レーニン主義の観点に従えば、一つの社会主義国の最終的勝利は、自国のプロレタリアート階級と広範な人民大衆の努力が必要であるばかりでなく、世界革命の勝利にかかっており、人が人を搾取する制度が地球から消滅されて、全人類が解放されることにかかっている。したがって、わが国の革命の最終的勝利を軽々しく口にするのは間違いであり、レーニン主義に反しており、事実にも合致していない。」(一九六八年一〇月の毛沢東談話、九全大会政治報告五より)このことは、まさにもなく世界革命への道を、全世界のプロレタリア階級と被抑圧人民、被抑圧民族と団結し、その闘いの先頭に立つことを明らかにしたものであり、この事は同時にスターリン主義の誤りを実践的にも理論的にも止揚し、克服したことの証明の何ものでもないと確信す

る。九全大会以降のあらゆる中国の動向は一切この観点からなされる。

中国はまず朝鮮・ベトナム(インドシナ三国)を軸とする反帝統一戦線を結成し、国連加盟に成功し、米日帝国主義を孤立化し、米日の帝国主義矛盾を効果的に活用しつつ、日帝(反軍国主義批判)を攻撃し、自民党反動派(保守本流)を孤立させ、財界を周回原則でゆさぶりつつ、蒋介石一派(台湾)を国連から追放し、米帝を内部の反戦運動とベトナムの敗退で追いこみ、ニクソンをして、中国訪問の途につかせたのである(注二)。中国の世界戦略は、七〇年代に入って、六〇年代までの被抑圧民族解放闘争一本やりから、民族解放闘争を軸におきつつも、帝国主義本國(米・日人民)の階級闘争をどう発展させ、ベトナムを中心とする革命戦争にどう結合させるのかという課題を急速に追求している。文字どおり世界革命を考えている実践的証拠である(未だ日本の革命的集団の中においてさえ、事物を歴史的・現実的・実践的に系統的に分析しえず、小ブル・小児病的に物事の現象、即ちブルジョアマスコミ以下のしかとらえきれずスターリン主義の裏切りといっている諸君が存在する事に対して残念である。そういう諸君はせめて『北京周報』とはいわなから『中国画報』の中国人民のハツラツとした顔でもみて一八〇度頭をかえてもらいたいと考える)中国は社会帝国主義

(ソ連)との戦術的に妥協又は協定して当面の反米攻勢をやるのでなく、長期的持久的な世界戦略即ち朝鮮・中国・ベトナムに代表される反帝統一戦線を更に強固に発展させ、帝国主義本國人民とりわけ米国民の階級闘争の発展を更に期待しその推進を持って帝国主義を追撃し、社会帝国主義を包囲し、ゆさぶる戦略の中で世界革命を考えていると考えられる(注三)。

以上を要約すると次のようになる。

- (一) 朝鮮・中国・ベトナムを軸とするインドシナ三国・アルバニアの結合を更に強化する。
- (二) あらゆる民族解放闘争を支持し連帯する。
- (三) あらゆる国の米日帝国主義、社会帝国主義に対する反対、反抗闘争を支持し帝国主義、社会帝国主義を包囲する。
- (四) 平和五原則又は周回原則的な政治、経済原則を持って外交攻勢をかけ帝国主義、社会帝国主義を孤立させる。
- (五) 友好国、発展途上国に可能なかぎり経済援助を平等の立場で提供する。

〔注一〕 パレスチナの事に具体的に論及してないが、アラブにおいてはゲリラに代表されるプロレタリア側とヨルダン国王フセイン・エジプトサダトに代表されるブルジョア民族主義又は小ブルとの指導権争いである。

〔注二〕 中国共産党内において具体的戦略をめぐって即ちニクソン訪中を媒介としつつ二つの意見が存在しており、毛・周路線がその結果としてある事はまちがいないものと考えられる。

〔注三〕 中国はソ連に対して「口先での社会主義、実際の帝国主義であり、日和見主義が成長して帝国主義になったものである。」の見解を持っており、一九七〇年の『レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか?』の論文において中国の考えは明らかである。中国・朝鮮・ベトナムにおいては、未だソ連・日帝等々の分析・規定をめぐって内部に矛盾があり、反米帝ということでは完全に一致している。朝鮮労働党はきわめて中国共産党と考えが近いものと考えられる。

(三) 帝国主義国の動向

(イ) 被抑圧民族・社会主義国の攻勢に敗退し、さらに追いこまれ、あらゆる形で気遣ひみた反革命・弾圧・侵略体制をしいている。
(エ) ベトナムにおいて決定的に敗退しつつも、さらに気遣ひみた無差別爆破・殺人兵器の使用を見よ。

(ロ) 社会帝国主義との大国支配・平和共存路線も、中国―朝鮮―ベトナムの英雄的闘いによって、手をおしをよぎなくされており、より一層世界支配をめぐって矛盾が激化していた。

(ハ) 他方では、帝国主義の不均等発展で戦後体制そのものの基盤が大きくゆれうごいており、帝国主義間相互の矛盾はより激化している。IMF体制は崩壊(ドル↓金体制)し、インフレーションは進行し、米帝にいたっては、失業率は高まる一方である。だがブルジョアジーは内部矛盾を深めつつも、過去のようにブロック化経済に向うこともできず、IMF体制にかわる新たな経済管理体制を作る力はなく、もっぱら当面の矛盾の爆発をさけ、通価調整(十ヶ国蔵相会議等)をはかり、米帝を軸とする国際反革命同盟を維持するために、各国、とりわけ日帝は、自国の利害を少しさし引いても米帝に協力せざるをえない所にまできている。(円切り上げ等を見よ)

即ち、日米を軸とする国際反革命同盟は、世界的上部構造として存在しており、したがってより一層、一国的上部構造と相互に規定しあっており、米帝の危機は同時に各国帝国主義に反映する。我々は各国帝国主義―ブルジョアジーが個別利害をこえてまで国際反革命同盟をより一層強化し、矛盾を爆発させず、調整するのは彼らの強さではなく、プロレタリアートが革命戦争を持って「帝国主義を

包囲」する時代におけるブルジョアジーの延命の道でしかないことを明確にしなくては必要がある。(中国の四つの基本矛盾の展開はまったく正しいのである。)

ブルジョアジーは(イ)(ロ)の対外矛盾の歪みを国内プロレタリアート・被抑圧人民に転化し、一切のしわよせを、プロレタリアート・勤労人民においかぶせている。そうであるがゆえに、ブルジョアジーは、一方では国際協調(自己の階級の延命のため国際反革命同盟を強化する目的)を唱え、一方では、より一層排外主義・愛国主義政策(ベトナムを始めとする革命戦争と自国人民との結合をおそれ、より一層侵略反革命体制を国内的に作り上げるため)を唱え、急速度に行っている。

帝国主義国本国におけるブルジョアジーとプロレタリアート・被抑圧人民の矛盾はより一層激化しており、より人民の闘いは広範に存在している。帝国主義本国人民は、一切の矛盾がプロレタリアートとブルジョアジーとの階級矛盾の反映であることを知っておかねばならず、そうであるがゆえに、自国帝国主義打倒の闘いにおいて、自らも抑圧民族であることを明確に知り、(イ)(ロ)の帝国主義政策から生じる対外矛盾のプロレタリアートへの転化と対決せねばならない。矛盾の解決も一切がプロレタリアート・国際主義に貫らぬかれた自国帝国主義打倒の闘いへと結合しなければならぬ。そのこととはとりもなわず、被抑圧民族のあらゆる反帝闘争を支持し、帝国主義本国のあらゆる民族的見地(独立・自主・愛国・中立・○奪還等)に断固反対し、階級的見地を対置し被抑圧民族と結合し、自国帝国主義を打倒しなければならぬのである。

(四) 社会帝国主義の動向

我々はソ連を、口先の社会主義・実際の帝国主義であると考える。我々は次のように総括し、ソ連を規定する。

「ソ修裏切り者集団も修正主義から社会帝国主義になったものである。異なったところといえば第二インターの社会帝国主義者、カウツキーの如き輩は、まだ国家権力をにぎっておらず、ただ自国の帝国主義に奉仕し、他国の人民から収奪した超過利潤の中からいくらか甘い汁を吸っていただけであるが、ソ修社会帝国主義は彼らが乗った国家権力にたよって、直接他国の人民を収奪し、奴隷化しているという点である。歴史の経験は、一つの社会主義国が、その国家権力を一旦修正主義集団に乗ると、ソ連のように社会帝国主義となるか、またはチェコスロバキアやモンゴルのように従属国や植民地になりさがるかということである」(『レーニン主義か、それとも社会帝国主義なのか』。ソ修社会帝国主義の階級的基盤は次のものである。「ソ修裏切り者集団がソ連の党と国家の大権を乗ったあと、ソ連のブルジョア特権階級は、自己の政治的権力を大いに拡大し、党、政府、軍隊と経済文化の領域で支配的地位を占め、またこの特権階級から国家機構の全部を握り社会の富全体を支配する官僚独占ブルジョア階級、すなわち新しい型の大ブルジョア階級が形成された。この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は彼らの手にある国家権力を利用して社会主義所有制を走資派所有制に変え、社会主義経済を資本主義経済と国家独占資本主義経済に変えた。……中略……この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は復活の行動に変えたブルジョア階級である。……中略……国際帝国主義の世界分割の列に加わって凶悪きわまりない社会帝国主義政策を

押しすすめるものである。この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、ソ修社会帝国主義の階級的基盤である。いまこの階級の総代表はブルジネフなのである。」(前記論文より)

以上のようにソ連社会帝国主義は、あくまで革命後の過程で生じたものであり、その階級基盤は「新しい型の官僚独占ブルジョア階級」である。この階級が発生した主要な要因は、未だ最初のプロレタリア革命であったロシア革命をいかにして帝国主義干渉戦から守り、プロレタリア独裁をかため、資本主義の復活をいかに阻止するかという問題について経験がまだ乏しかった所の過渡期性にある。

次に「この新しい型の官僚独占ブルジョア階級」の性格、政治領域を分析して見よう。

(1) 帝国主義ブルジョアジーに対する反対勢力である。

我々は帝国主義に反対する勢力である点においては多いに戦術的に利用させてもらうが、同時に次のことを銘記している。「ソ連と米帝との間になんらかの妥協が常に存在すること、なぜなら相互に本質は同じである。つまり常に強盗の間の一時的な取引が存在すること」。我々は当面ブルジョアジーとの闘争を軸としつつ、社会帝国主義には首尾一貫して原則的かつ柔軟な闘争を堅持するものである。(注一)

(2) プロレタリアート前進運動に対して不十分にしかできずプロレタリアートが徹底的に運動を展開する局面になると敵対勢力に転化する。彼らの民族解放運動に対する姿勢を見ればその通りになっている。従ってエジプト・インド等と同盟関係が存在でき、中国と本質的な違いがある。

(3) 諸国家の関係は、盟主↓従属国関係にある。その論理はいわ

ゆるブレジネフ・ドクトリンにある。「注三」 社会帝国主義は当然ながらプロレタリアートのように世界的な団結を生み出すことができないうためにブレジネフ・ドクトリンというマルクス・レーニンの名のもとにおける帝国主義政策を必要とし、従って諸国家の支配者階級の相互利益のためにのみ国家間の相互関係が存在しており、強大な国家に從属する形になるのは当然である。東欧諸国とソ帝との関係をみるとそうになっている、又ソ帝が中国のように人民外交を展開できない所を見よ。

(4)、経済制度も資本主義制度の否定から出発するが、その徹底した推進がないが故に客観的には共産主義社会への発展を否定することになり、従って当然ながら資本主義制度の復活一変種となる。

(5)、この階級、即ち社会帝国主義が発生するのは、プロレタリアートとブルジョアジーとの均衡関係の時代においてであり、この階級の打倒はプロレタリアートの徹底した革命戦争の遂行、とりわけ帝国主義本国の革命闘争の発展を持ってしか遂行されず、共産主義社会の実現を通じてしか打倒されえない。

以上が性格と政治領域であり、この点に合致する国とは同盟関係を結び反帝（反米）反中国（プロレタリアートの代表）の環を作り最近反中国包囲網を強化している。

最後にソ連、東欧諸国におけるこの、新しい型の官僚独占ブルジョア階級、即ち社会帝国主義者に対しての階級闘争を見ておこう。ソ連国内はもちろん東欧諸国においてもその内幕が詳しく報道されず分析する資料も乏しいのであるが次の二つの傾向があることを論じるにとどめておく。

(1)、プロレタリアートの自然発生的な経済主義的闘争。

米帝国主義打倒の闘いの中で社会帝国主義を戦略的に包囲し、社会帝国主義的思想にある修正主義者、社会民主主義者を人民から孤立させ、包囲し、粉碎する闘いが、我々の任務であり、かつ歴史的に緊急にかせられた任務である。

米帝追撃・日帝打倒・ソ帝包囲の戦略・戦術である。具体的任務は自国帝国主義打倒である。日帝打倒を

Ⅲ 国内情勢と革命的左翼の闘いの総括、方向性について

Ⅰ 我々の今後の具体的任務の解明にかえて

(1) 支配者階級 — 独占ブルジョアジーの動向

日帝は現在の(イ)ベトナム革命戦争をはじめとする被抑圧民族、とりわけアジア人民から攻勢をかけられ、(ロ)中国・朝鮮を始めとする社会主義国家よりゆさぶられ、(ハ)一方、米帝を始めとする、帝国主義間矛盾がさらに激化しており、以上の三つの対外矛盾に本質的にゆさぶられている。

日帝は、三つの対外矛盾の解決方法として日米帝国主義間矛盾を調整しつつ、自衛隊強化、四次防、沖繩派兵に見られるがごとく、より反革命軍事体制を強化し、被抑圧民族・社会主義国家に対応しようとしており、したがって、その反革命体制強化のために、三つの対外矛盾の「しわ寄せ」を日本人民に転化している。農業切りすて、ドルショック等による中小企業の破壊、物価の急上昇、合理化と称する労働者つかいすて等々は当然のごとく、はたまた独占ブルジョア私害（いわゆる公害）をまきちらし環境破壊までやっている。日本人民に反革命侵略体制をおしつけるために、帝国主義民族として再教育を準備し、着々と進めている。日帝の一切の政策は、反革命

(ロ)、小ブルジョアの官僚支配からの解放、即ち自由の要求闘争、民族的要求もふくめた所の自主独立の闘争である。

この(イ)(ロ)が未分解になって闘われているのが、ポーランド・チェコスロ連国内等々の諸事件として報道される所の内幕であると考えられる。どちらにしろ、世界的なプロレタリアートの闘争の発展と共に社会帝国主義内における階級闘争も、日に日に激化して行くであろう。

「注一」 中国も社会帝国主義との闘争においては、一切原則は曲げないが、戦術は柔軟である。例えば、ベトナムへのソ帝からの軍事援助の陸送は、要望されずならず実行している。それはまさに、一切の価値判断が被抑圧民族の解放闘争の利益を第一とする所からきているからだ。

「注二」 ブレジネフ・ドクトリンは、次の内容から成っている。①有限主権論。②国際独裁論。③社会主義家庭論。④国際分業論。⑤利益関係論（『レーニン主義か、それとも社会帝国主義なのか』より）

「注三」 社会帝国主義の分析には、『プロレタリア革命党建設と、我々の緊要の任務（上）』（八木健彦著）を参考にさせてもらったことを付記する。

以上の分称を認めるとするならば、我々日本革命派の任務は次のようになるだろう。

ベトナム人民をはじめとする被抑圧民族の革命戦争を断固支持し、中国・朝鮮人民の争いに学び、米帝をさらに追撃し、プロレタリア国際主義の具体的闘いとして日帝と対決し、追いつめ、打倒し、日

侵略体制強化のための人民収奪の政策に他ならない。以上が日帝の基本動向であり、帝国主義を推進し、協力している階級、即ち独占ブルジョアジーの動きであり、その階級の政治代理人としてある自由民主党の政策の本質である。「注一」

したがって政治形態は、より一層国家権力を前面に出し、より直接的に、より反動と暴力性を強めて行く政治形態になる。なぜなら、三つの対外矛盾のしわ寄せは同時に日本人民にかけられ、そのしわ寄せ政治に反対する人民の闘争に対しては暴力的弾圧以外に与えるものが存在しないからである。

(2) 小ブルジョア階級 — 議会制民主主義の幻想から

だ覚めない階級
六〇年代後半からの革命派の闘いを媒介しなから明確に一つのブロックとして作り出され、同時にその無力性・非革命性が明らかにされた階級である。六〇年安保闘争までは戦後民主主義勢力革新派として小ブルジョアジーもプロレタリアートも未分解で統一され、その革新派の中において左翼か穏健派（右派）かの区別であり、その歴史的現象形態は「安保国民会議」において明らかである。その階級基盤は都市農村の中小ブルジョアジーであり市民主義の上・中層サラリーマンである。これらは一つには、日帝の反帝の反動化に対する危機と他方では革命派の暴力、闘いの徹底化に対する不安・不信から一つに結合したブロックであり、必らず分解する。

我々は主要には左からの分解の収約が秩序と民主主義の名の下において支配者側に圧倒的に有利に展開されていることを知っておくことが今日においては必要であろう。しかし一方では、すでに社共に対して一切の幻想を持っていない部分が広範に存在することも事

実で社共に投票する諸君でさえ信頼して投票する人はいないと考えられる。

この階級の登場と凋落は日共内官本修正主義一派の伸びと社会党の凋落で象徴的に表現していると考えられる。日共内官本修正主義一派の成長は主に一貫した革命派の暴力に対する反暴力キャンペーンで伸びており、社会党の凋落は政策に一貫性がなく、この激動期を耐えうるだけの党組織がない所に原因する。つまりこのブロックの登場を組織したのが日共内官本修正主義一派で、このブロックの無力性、凋落を表現したのが社会党であろう。その主要な原因は党組織（政策を含めて）を持っていったのか、否かである。日帝と革命派の対決は、とりも直さずどちらがこのブロックを主導的に分解するのかの決戦であり、ここに勝利の鍵がある。「注二」

我々の態度はプロレタリアート・被抑圧人民にしっかりと依拠し、小ブルジョア階級と左から団結する闘いを組み、絶対に安易な右翼的な戦術はとらない。我々はこのブロックと団結しなければ革命に成功しないことを知っていると同時に、このブロックに依拠しては共産主義社会に到る不断革命に勝利しないことも知っている。原則に忠実で戦術においては柔軟な方式をとり、必ず彼らを変革させ団結せしめるであろう。

(3) プロレタリアート（革命的左翼）の動向

——日本革命に向けて闘っている潮流の動き

六〇年安保闘争以降、曲節しつつも、とりわけこの五年間の闘いの中からプロレタリアート・被抑圧人民を率いで進むべき革命主体は徐々でありながらも進んでいる。「注三」

問題は戦線がバラバラであり、混乱しており、確固たる統率者が

国帝主義打倒へ転化せよ等々の鮮明な態度を持って闘い、粉碎する我々の政治を確立すること。

帝国主義的しわよせを人民に転化するしわよせ政治（物価値上・生活破壊・ブルジョア私害・合理化・農業切りすて等）を粉碎する我々の政治を確立すること。

「反革命侵略体制・しわよせ政治」を粉碎する我々の政治とはとりも直さずブルジョア暴力（機動隊・自衛隊・右翼）に対してプロレタリア暴力をもって粉碎することであり、系統的に「人民解放軍」を創出する闘いへと結合しなければならぬし、結合する闘いである。

これが革命派の任務であり、我々にかせられた使命である。

「注一」 独占ブルジョア階級の中には、今般基本方針を正面突破の戦術か、迂回戦術か、それとも独自性強化の戦術かについて未分解であり、内部矛盾が存在しているが、本質的には大差はなく、革命派の闘いを持ってしか、内部矛盾を利用することも深めることもできないのである。我々にとって左翼が今日にあって日中問題にさえ何ら有効な運動が展開できない主体の弱さ、イビツ性について自己批判的に自らに問い直す必要があると考える。くわしい階級分析は等四章とする予定。

「注二・注三」 それぞれのくわしい階級分析は等四章で論述する予定。

次に各戦線・諸課題の総括及び方針について

- (イ) 街頭闘争（ベトナム反戦闘争）↓全共闘運動↓多様な戦線への分化

この流れは、この五年間の闘いの一つの大きな流れであり、全戦

できてない所にある。その解決の一方向としてこの全章も書かれており、我々の活動もあると考えている。

以上が国内の各階級の動向であろう。

あらゆる矛盾は激化しており、激しい対立が存在し、全階級がそれを意識しつつも、極めて行動においてはゆるやかである。あれだけストが統発し、人民に対するしわよせ政治は強くなっているにもかかわらず、議会内においては自民党も野党も今のところ打つ手を打ち合わせていない。とりわけ野党は一切の政治行為の不可能性を暴露している。自民党——独占ブルジョアジーにも抜本的政策はないが、しかし着々と野党の不可能性をいいことにして勝手気ままに人民を強姦し続けている。

（佐藤のこの半年の言語録を見よ。沖繩返還式の天皇陛下万才を頂点にし、報道規制の発言等は朝飯前のようにだ。）

確かに表層においてはテンポは緩やかだが深層においては激しいテンポで動いている。次に来る大振動は、反革命の最後の準備なのか、それとも革命を準備する大振動にするのか？

我々は準備しなければならぬ。革命の準備・闘いの決起をさせる必要はない。だがしかし一刻たりとも無駄な時を浪費してはならない。

すでに我々の任務はより鮮明になっている。反革命侵略体制（安保・沖繩・自衛隊・四次防・入管・愛国主義教育・差別支配政治）と一國主義・抑圧民族主義（反米愛国・〇〇奪還・自主独立・中立等）として闘うのでなく、万国のプロレタリアート・被抑圧民族団結せよ、のプロレタリア国際主義（帝国主義的領土併合反対・阻止・民族主義的要求を階級的要求に転化せよ、反米闘争を日米打倒・自

線に影響を与えた流れである。そしてこの流れの主体は全共闘派といわれる学生であり、闘争形態はゲバとヘルメットに象徴されるように、革命の暴力を主張し、武装闘争の形態を取り、共通の政治主張は戦後民主主義・ポツダム民主主義の左からの解体であり、ブルジョア民主主義の内実の暴露であり、ポツダム民主主義の革命的止揚であった。打倒対象は学内秩序派・日本共産党民青・国家権力機動隊であり、具体的政治・組織方針は安保・沖繩闘争にいかにか部隊を作り上げるのかと言うことであり、全共闘派、又はいわゆるハ派内における各自の党派性は、もっぱらヘルメット（部隊数）がいくらあるか、そしていかに他派より戦闘性があるかを競うことにあった。

即ち、一言でいうならば社共の合法カンパニアスケジュール主義に対して戦術的に武装を対置し、社共を越える集会が打てるのか、否かが総括のわかれめであり、基本的に遂行できれば勝利という総括を提起し、次の政治課題に乗り移り準備を始めるといふ闘いであった。全共闘派内において多種多様な意見があったが本質的には同じ基盤であったと考える。

（次にこの潮流が切り拓いた局面、即ち今後も断固継承・発展させる内実について）

(一) ベトナム革命戦争を始めとする被抑圧民族の解放闘争を断固支持し、人民に帝国主義の反革命性を具体的に暴露し、彼らの革命闘争に対して率直に学び、日本人民の中に実体的にその革命性を合流せしめること。

（被抑圧民族の闘いを宣伝・煽動する意義は高まれど、低まるこ

とはなり)

(一)、全共闘運動のごとく、大衆闘争と武装闘争を結合せしめさらに発展させること。あらゆる小さな民主主義的要求であろうともかならず大衆闘争を媒介に武装闘争と結合せしめなければならぬ。

(暴力闘争とは大衆闘争に対する説得の放棄としての自己充足ではなく、組織された大衆闘争の確固たる権力に対する防衛力・貫徹力以外ではありえないからである。日大全共闘の創出期を見よ。五項目要求と武装行動隊とは結合しており、全共闘の暴力を主張し行動隊に在る諸君は、何よりも学生大衆に五項目要求の意義を唱え、大衆運動を重視し、日常の地道な活動をもっとも真剣にやりぬいた。

この地道な活動が下降すると同時併行的に、全共闘の隊列はくずれた。我々は軍事をかたり、労働者との結合を語るが、地道な、まったく小さな民主主義的要求の声に耳をかさない諸君に反対する。

(三)この五年間の闘いで示した、学生革命派の闘いの英雄性、自己犠牲、勇気に対して断固ようごし、この英雄性を、あれこれの評論で、断じて汚してはならない。

今要求されていることは、この英雄性を一步も下げるのではなく、さらに打ち固め、発展せしめるために、プロレタリアートと結合し、小ブルジョア主義を克服せしめ、一貫した、系統的な闘いが展開できるよう学生革命派を高めることである。

(次にこの潮流が本質的な欠陥として持つていた内実について

即ち克服すべき内実について)

第一章五章に至るまで、あらゆる方面から、我々の欠陥を克服するべく論じられており、すでに、等一章(1)新左翼運動の到達点の中で、基本的考えは論じており、この段階では、これを前提として

项目的に論じることにする。

(一)、政治過程闘争について。

全共闘派の政治・組織方針が究極的には、安保・沖繩闘争であり、しかも、安保・沖繩を生ぜしめる日帝の実体的暴露を人民大衆に訴え、組織せしめるだけでなく、〇〇決戦に、どれだけ部隊を集めざるのか戦略・戦術であり、戦略なき戦術、戦術なき戦略(日帝をどう打倒し、そのための準備をどうするのかなく、決戦が存在し、日帝を打倒することはわかったが、それに至る戦術はどうか)の一切ないこと)に本質問題があるのである。

このことは同時に、具体的獲得目標がないことにもなる。思えば、六七年一〇・八↓佐世保闘争においては、急速度に多くの市民をもまきこんでの影響があったではないか。それはなぜかというところが、当時の我々には、ベトナム革命戦争断固支持、米帝と共にある佐藤反動政府反対、機動隊と撃突、そのものがきわめて前進であり、具体性を持つていたからである。そうであるがゆえに、市民の共感をまきおこすのである。

我々は政治過程闘争そのものが悪いのではなく、旧いものでもないのであり、問題なのは、戦略・戦術がすべて、〇月〇日の決戦のためにのみある人集めの政策・その内容に規定されている所にあると考える。我々の過去の政治闘争はレーニンのいう意味での政治闘争ではなく、人民に対して、一つの日帝の政治暴露の手段にしか他ならない。いふならば、高次の経済闘争、又は、低次の政治闘争と称す。レーニンのいう経済闘争を政治闘争に転化すると、とりもなおさず、個別改良闘争を、権力即ちプロレタリア革命闘争へと転化させることであり、多くの人民大衆が強固に階級形成され、銃を

持ち、家庭から街頭へ、工場占拠へとつき進むことであり、その準備の基本的完了がつまり、経済闘争が政治闘争に転化、したことの内容なのである。

我々は、街頭闘争と全共闘運動対置し、これに政治過程闘争をつぎきしたような総括、すなわち、闘争形態(時間・場所等々)を比較して、次は工場占拠闘争などという諸君に対しては今一度一九六八年に帰ってもらい、今一度再学習することを進めるものである。

政治暴露はより一層必要になる。より一層街頭に多くの人民大衆が登場すべきだ。

問われている本質は、権力奪取(革命)に向け、どう系統的な闘いを首尾一貫してやりぬき、準備するのか、そのためには、我々はどうした態度で階級闘争にのぞむのかである。「注一」

(一)、官僚主義の発生原因について。

官僚主義の発生原因について、一つは、階級闘争に対する態度・作風上の問題がある。

もう一つは路線と密接不可分である。(態度・作風等についてはすでにのべており、又第二章でも論じて略す。)ML同盟を総括して見ると、路線が正しい時には、官僚主義は、はびこらず、路線が誤っている時、ジグザグの時には、官僚主義が生じること。党内が団結し、謙虚心がある時は、路線は正しく、したがって官僚主義も発生せず、党派も伸びる。

党内におごりたかぶりが発生すると、団結はくずれ、路線も正しくなく、したがって官僚主義が発生し、党派も伸びず逆に人民から反発をくらう。これがML同の一つの総括である。官僚主義は政策

路線を遂行する過程で生じるものである。正しい路線を遂行する時には十分人民大衆も党员も納得し、進んで工作するが、正しい路線でない時は、人民大衆及び党员も進んで工作する気が起らないから、従って路線遂行のため激励するが正しい路線でないために成果はない。従って官僚主義・命令主義がはびこり茶坊主が生じるのである。我々は官僚主義の問題を個人・作風一般に流す傾向に反対し必ず政治路線と結合してみなければならぬ。

我々は新左翼運動とりわけ党派運動において、ML魅、中核魅、

等々の言語がなぜ存在するのかに対して、官僚主義を支える「根性主義」にしか他ならないと考える。「注二」

我々は全共闘派総体の路線がすでに論述しているように〇月〇日の〇〇決戦に決起せよの政治過程・スケジュール主義の一本であったが故に即ち一切の活動はそのために存在するという工作スタイルであったが故に、必然として八派会議を主催する、すなわち闘争スケジュールの決定機関に近いものほどが全ての実権を握り、決起した闘争スケジュールを遂行するために官僚化してゆくのは必然であったと考える。

今、問われているのは八派会議が悪いのではなく政治過程戦略論と全体の階級闘争の発展のために戦術を考へ闘争を設定するという分析ではなく、専ら自派のためにのみ、それも自派を誇示するためだけに戦術を考へ闘争を決定するという思想そのものが問われているのである。我々はこの総括抜きに八派会議をあれこれ論評し小児病的な反発をすることに反対する。

我々の今後の一切の行動は、全体の階級闘争の利益を第一とし一切の戦術を決定し、そのためにのみ統一戦線を準備するものである。

(三) 闘争形態に対して画一的であり、多様な闘争形態を承認できず常に闘争形態をめぐる論争がなされてきた。この思想的欠陥は、一方で学生界の突出の闘いを絶対的に美化したり固定化する傾向が生じ、現実の階級関係にまったく無縁な戦術が、はたまた階級矛盾を見ずに観念的な「戦士の条件」などを論じる小ブルジョア主義の左右の誤りを生み出した。こうした傾向に対して我々の考えは原則に思案で柔軟な戦術をあらゆる領域において実践してゆくものである。

〔注一〕 すでに我々は闘争形態をめぐって、あれこれと不毛な水かけ論争や闘争形態のみの乗り移りを総括と称する集団の思想そのものを問題にしなければならぬ。

〔注二〕 M.L.同盟の六月決戦後いよいよ整風の中で官僚主義に対して、どんな不毛な批判と自己批判が存在したかわからない。根性主義は官僚主義の裏返しであり代行主義を生み、奴隸主義を生むのである。活動を「根性」でやるのでなくプロレタリア思想を会得しつつやらねばならない。

併せて、つけ加えるとするならばM.L.同の崩壊は端的にいつて十一月決戦勝利の総括の提起と共に開始されたと考える。当時時代々として必要であったのは、全国全共闘の隊列に結集した諸君がなぜ離れていったのかを謙虚にとら返す必要があったのだ。十一月決戦後我々は品川公会堂で夷敷二千三百余の友人を集めて政治集会を持った。我々は、すでにその時多くの革命的左翼が何を期待していたのか謙虚に自己総括すべきであったのだ。我々は今から一つ一つ実践の中でこれに答えてゆく。

七〇年六月決戦も「階級関係の全体性」の中で決定されないことぶる主観の方針で闘い抜かれた。

ず、左翼反対派を一步も突破できなかったのである。すでに問われていることは全共闘運動を固定的に美化するのではなく、提起した思想を継承しつつ、あれだけ大衆的にあれだけ勇敢に「注一」闘いつつ、なぜ隊列から離れ、資本制社会にもどってしまったのか？ このことを率直に自己総括することが問われていたのである。

即ちすでに我々に問われていることは、今後の一切の闘い、総括は厳格にプロレタリア階級の立場、もっと具体的にいえばベトナム人民を始めとする革命戦争を闘いぬいでいる、世界最下層(もっとも帝国主義から抑圧されており、日本民族も積極的に抑圧に加担しているのだ)人民の立場より規定し、分析する力を持つことである。我々は次のように総括する。全共闘運動は日本階級闘争史上大きな一步をふみ出した。しかしそれは、学生運動を未だ一步も「出ること」はできなかった。それは学園内、外における抑圧者と被抑圧者の闘いで終り、一時的であれ学園内では革命派が勝利した。しかし、勝利と同時に(日大の九・三〇大衆団交・東大の六八年末・六九年の一月初旬の闘い)日帝の全面的干渉戦が始まった。パリケード死守

徹底抗戦が闘いぬかれた。全面的に敗北した。学内の秩序は敵の手にわたった。学生は散り、内にこもった。我々は持久戦を準備し、展開できる力と方法を未だ会得してなかったのである。全共闘運動は、学問・自由・自治を学生、即ち革命派に取りかえず闘いであり、そのかぎりにおいて、ブルジョア民主主義・ブルジョア政治を具体的に暴露したがそれ以上でなかった。全階級を含み込んだブルジョア民主主義の内実を暴露したがそれ以上ではなかった。帝大解体・二重権力に代表される当時のスローガンの中には、

まさにそれはアジア人民、日帝のすこぶる一般的分析の結果として実践されたものであり、何一つ革命派内部の分析はないものでもあり、いわゆる安保破棄、佐藤内閣打倒の大統一戦線は絵に書いたモチでしかない。一切の戦術は主観的にはどうあれ客観的には対革共同を軸として立てられているに他ならないものであった。

〔全共闘運動の具体的総括と分化について〕
全共闘運動は、過去の学生運動と質的に異なっている。それは一言でいえばマルクス・レーニンがあつて闘争に決起したのでもなく、先駆性理論で決起したのでもない。まさに学生大衆が抑圧され、弾圧されていた日常性の怒りが、具体的敵に対して爆発したものであった。(日大の古田・右翼打倒闘争を見よ) そうであるがゆえに、多くの市民をまきこんでまでの波及力があった。

思想的に分析するならば、世界最下層人民に位置するベトナム革命戦争と合い通じるものがあり、何よりも毛沢東思想が波及したのであった。このように過去の学生運動と質的に異なりがあるがゆえに、全共闘運動を媒介点としながら、過去の残像を色濃く保持している党派と全共闘活動家との亀裂が生じ、十一月決戦後さらに深まったのである。

M.L.同内においても、未分解であつたがこの対立は穩然として存在し、七〇年六月決戦後の整風に入る一つの重要な要因は党派と全共闘活動家(日大全共闘運動の中からM.L.に入った諸君に代表されるように)のちがいであった。問題なのはこの異なりが未分解であり、あまりに整風派と称される部分の党派・系統的活動の未熟性であった。即ち、単に全共闘運動と党派運動(政治過程闘争批判)を対置、日常的生活領域からの闘い、非日常性決戦主義としてしか総括しえ

二つの傾向が未分解のまま存在しており、一つは小ブルジョア観念論であり、もう一つは自己の小ブルジョア性をこの闘いを通じてどう克服し、革命主体へと止揚するのかがであった。すでに前述したごとく、このスローガン総体としては小ブルジョアの・ロマン的意識から提起されていると考える。現在の学生戦線の混乱の主要な原因はここにありと考える。

次にでは全共闘運動はどのような思想潮流に分化したのか見て見よう。
○小ブルジョアの観念論の潮流↓現実の階級関係をぬきにした、共同体・コミュニティ的傾向、自己の階級的基盤に無自覚であり、全体の階級闘争の発展を考えない安易な自己批判・告発運動に流れる傾向、すでに労働者階級と結合する時代であると称して、学生運動の革命的役割を認めず、現実の闘いを放棄する傾向、全体の階級関係を分析せず、階級矛盾を差別一般に流し、反前衛主義、戦術のミス・カレートのみに興味をおぼえ、観念的な戦士の条件を論じる傾向である。

総じてプロレタリアートに対しての不信、現実の階級関係を分析せず何から始めるべきなのかの問いを提起しない傾向である。
○自己の小ブルジョアの不十分性をどう克服するかと努力している潮流↓六〇年代後半の全共闘活動家の中から、持久的な活動をどう創り出し、現実の闘いの中で、どう革命主体として自己を成長せしめるのかの問題意識の中で、広範な、新しい革命的な労働者フランク地区フランクが作られ、準備している部分、再度、全共闘運動の総括の中から、学生運動を創出しようとしている部分である。総じてこの部分は、現実から出発し、持久的系統的な活動を考へており、

党的結合をどう新たに創出するのか、大衆闘争をどう構築するのかを考えている。

〔今後の学生運動の基本的方向性について〕

(1) 一切の活動を小ブルジョア主義の克服、自己を革命主体として成長させることに位置すること。

〔まずそのために、若い活動家に全共闘の総括を提起せよ〕

(2) 階級闘争の発展過程における学生の役割、又は、闘争形態を美化したり、固定化するのではなく、持久的な階級闘争にたえうる主体形成、すなわち自己を共産主義者と高めあげる系統的な闘い、能力を準備し、組織的に実行すること。

(3) プロレタリアートを信頼し、プロレタリアートと結合することを目指す、同時に現実の階級関係を分析するならば、きわめて学生革命派の任務が重いことを自覚しなければならぬ。

(4) 学生大衆のあらゆる場所(サークル・クラス等々)に入り、政治教育をしなければならず、地道な活動を保障し、大衆闘争と武装闘争を結合しなければならぬ。

(5) 学生に対する政治活動はあらゆる条件を利用し、徹底化させなければならぬ。なぜなら、現実の階級矛盾、抑圧を具体的に教育する一番よい方法だからだ。

(6) 学生を学園におしとどめてはならない。なぜなら学園そのものの中には、直接的な階級矛盾は反映しにくいからであり、又自己の階級性そのものに対して無自覚に陥るからである。

〔注一〕 一九六八年十一月日大芸術学部右翼との攻防戦を筆頭に文字通り、勇敢そのものであったと考える。

との結合が大きな要因を創り出したのもたしかであると考ええる。

〔注一〕

我々は、ここに全共闘運動の提起した思想が、一つの階級の中で実践的に深化され、具体的に示されている現実を見ることが出来る。

さらに我々は、一九七一年九月十六日の東峰闘争において、我々がつきあっている武装闘争に対する解決の糸口を与えてくれたことを確認する。「敵消滅・味方保存」の真理と、人民と結合した闘争はかならず武装闘争にも正しく反映されるのだということを証明してくれた。〔注二〕

我々は、三里塚農民を見て次のことを知った。

「プロレタリアートは勤労農民と所有者としての農民とを、働き手としての農民と小商人としての農民とを——働く農民と役職者としての農民とを——区別し、区分しなければならぬ。この区分のうちには社会主義の全核心がある。」

〔レーニン「プロレタリアート独裁の時期における経済と政治」〕すでに多くの農民は、日帝の農業切り棄て政策の犠牲となり、労働手段そのものの土地のみならず生活そのものを破壊され、農業では「メン」がくえなくされている。

一部の富農を除いて、日帝は農民の敵となっている。したがって、我々はかならず貧・中農と結合し、社会主義労働同盟を実現し、日本社会主義革命を実現する。したがってそのために次の目的を持って農民戦線を戦略的に準備し、多くの同志と共に共同の任務とした。

- 〔注二〕
- (1) 労働者・農民が社会主義革命にむけて同盟をくめること。
 - (2) 農業は国家の基礎であり、社会主義革命後において自力更生を

〔口〕 三里塚闘争↓全国のあらゆる帝国主義的土地

取り上げ粉砕闘争へ

我々は、農民運動、農民の持久的な革命的闘争に対してあまりに無自覚であった。あまりに本当の農民の姿に対して無知でありすぎた。我々はまず無知でありすぎたことに対して率直に自己批判しなければならぬ。多くのことを論じることはできないが、否、今にあっては論じるより、農民とかならず結合するという決意を提起すること自体が、我々にとって進歩であると考える。以下はそのためにのみ論述する内容である。

三里塚闘争は、まさに持久的に闘いぬかれ、日本階級闘争史上金字塔を創り上げたことについて、だれひとりと言えども、否定はできまい。とりわけ、一九六九年十一月決戦以後、大きな戦略的拠点として闘いぬかれたものである。我々は、三里塚闘争が中農を中心とする土地防衛・不売闘争としてあったものが、七〇年に入り、とりわけ七一年第一次強制収用粉砕闘争を結節環としつつ、土地所有者としての自己を解体・止揚し、革命主体として闘いが展開されていることを見ることが出来る。(現象的には、共同経営・少年行動隊の登場・青年行動隊が闘争の全面にでる等々。)この地平こそ、戦後すべての基地闘争、土地防衛闘争即ち「平和と民主主義」闘争が遂に突破できず、帝国主義者に屈服してきた歴史を突破したのである。それは土地所有者としての保守性、即ち「守るべき物を持つ」人々の保守性が、革命的に転化したのである。転化の主要な原因は、農民の持久的な闘いであり、そうであったがゆえに、生活領域・考え方そのものを変革することが主観的にも客観的にも要求され、それに答えたのである。たしかに一つの条件として学生革命派

確立すること。

(3) 都市下層労働者と結合することは即農民問題と不可分である。

(農村出身の下層労働、社外工・季節工が多いからである。)

(4) 権力の私兵(自衛隊・機動隊等)はえてして、貧・中農出身が多く、彼らを解体し、中立化し、革命派に工作することは農民問題と不可分である。

(5) 新全国総合開発計画に代表される日帝の攻撃に対して闘いを組むのは農民との結合ぬきには不可能であり、反「公害」闘争もしかりである。

(6) 農民との結合を媒介にしつつ漁民(半漁半農が多い)との結合を考えること。

(7) 全日本農民組合の下部の活動家と学びながら結合しつつ社会党を下から解体止揚すること。

(8) 地方自治にも農民工作の中がかかわっていくこと。

以上の実現のために、まずは調査分析、農民感情をすることを目標におき、農民活動家と結合してゆくと同時に、農村出身者を戦略的に配置するために帰農工作も着実にやってくつりである。また、三里塚青年行動隊をはじめとする人々と戦略的結合を追求し、少しずつ準備していくつもりである。

日本においての農民の敵は、ロシア革命・中国革命における農民の敵とちがうことを明記しておかねばならない。即ち中国革命においては農民の敵は主に地主階級であり、地主階級を助ける帝国主義であった。日本においてはすでに農民の主要な敵は地主階級ではなく(戦後の農地解放前は地主が前面にあったが)独占ブルジョア階級なのである。主要な敵がかわれば矛盾の解決方法がかわるので

あり、主体がかわるのも当然である。唯物弁証法の分析はこのようにしなければならぬのである。

〔注一〕 日本共産党のように、土地所有者としての農民に追随し、拝跪し、民主勢力として固定化し選挙の票としてしか見ないのとまったく本質的なちがいである。

〔注二〕 武装闘争・軍事問題に対してはこの章の最後へのべる予定である。

〔注三〕 農民のくわしい階級分析等については第四章で展開する予定である。

（ハ）、沖繩闘争について

六〇年代後半の闘争の一つの軸として沖繩闘争が存在していたことは万人が認める所である。しかし一方においては、この沖繩闘争で日本人が持っていた抑圧民族としての無実覚性をも決定的に明らかにしたのである。我々は、次の沖繩青年同盟が発している言葉の中に沖繩闘争の総括をかいまみることが出来る。

「それは自己の内にある反大和意識を徹底的に深化させ、それを反帝闘争へとおしあげる闘いである」「我々が日本の労働者階級人民に期待することは、我々への同情や、沖繩を解放（奪還）してやるうという傲慢さではなく、我々と共に闘いぬこうということである。今こそ最も核心的問題が問われている。沖繩闘争とは何なのか？ 我々にとって沖繩闘争とは沖繩人の解放以外のものではありえない。沖繩人抜きに沖繩闘争とは無意味であり、空虚である。……

……中略……我々は自分の力で組織を作り、闘いの展望を示し、闘いを遂行していく。沖繩解放の理論と闘いを発展させるのは沖繩人

勝ち取るのだという沖繩人民の、沖繩解放、闘争を闘いぬく宣言であり、沖繩人民としての、主体思想、を作り出さんとする宣言であると考える。

我々はこの間の、沖繩闘争の結果として、次の二点を率直に認めべきだと考える。

（一）、沖繩は日米帝国主義間において取引され、日帝に返還されたこと。沖繩人民は日帝の手によって、帝国主義的に再編されようとしていたこと。

（二）、この間の沖繩闘争によって、日本・沖繩のプロレタリアート・被抑圧人民は強固な結合を創り出しえず、逆に沖繩人民に不信を生み出したこと。

沖繩闘争において我々は帝国主義に敗北した。敗北そのものに決して問題があるのではない。常に敗北するか、勝利するかはきわめて現実的な力関係によって決定されるものであり、常に我々と帝国主義者との闘いは、敗北・敗北・またしても敗北、最後に勝利の法則通りである。問題なのはなぜ（二）が生じたのか？ なぜ沖繩人民の不信が生じたのか？ である。なぜなら、我々はとりわけて闘争をサボったわけではなく。

では闘争形態がまずかったのか？ あまりに過激すぎたのか？ 一軒一軒戸別訪問をして沖繩闘争を訴えることがよいのだろうか？ たしかにそれは必要だ。だがそうしたからといって、沖繩人民の不信をつぐなえたのであろうか？ 否である。

我々に問われていることは、そうした表層的なことではなく、帝国主義本国におけるプロレタリアート・被抑圧人民が、帝国主義的領土併合、被抑圧民族に対してどういう態度をつらぬくのか、というき

である。」（『沖繩解放への道』）又、小さな沖繩青年の集まりである琉球歴史問題研究会の『沖繩解放論序説』においては次のように主張している。

「我々はここで一つレーニンの言葉を引用しよう『ブルジョワジーは、いつでも自らの民族的諸要求を真正面にかかせる。ブルジョワジーはそれを無条件にかかせる。プロレタリアートにとっては、民族的要求は階級闘争の利害に従属する』（民族自決権について）この言葉によって如実に証明される様に、日本ブルジョワジーは日本民族としての利益を織維、円の為替差損まで犠牲（もちろん、その帰結が中小企業、無組織弱小労働者であったことはいふ迄もないが）にして強引に米帝との連携プレーを成しつつある。また、沖繩買弁ブルジョワジーにとって為替差損を補償してもらえれば、琉球人民の本質的要求など別にどうでもいい事であった。一方、日本プロレタリアート（なかんずく既成左翼）が、当初即時無条件全面返還を掲げていたスローガンを急遽完全復帰というスローガンに塗り変え同時に、いわゆる民族の怒り（即ち、沖繩日本人として分離状態をさげすむ）から、「本土」の沖繩化阻止という戦術論に切り換えたことは、どうみても腐朽化したプロレタリアートのエゴでしかない。沖繩は日本階級闘争の利害に従属する兵士でしかなかった。ここに於いて、我々沖繩は我々が防衛し我々が建設するという革命的スローガンを高く掲げてゆくしか我々に残された道は無いことを知った。」

以上のことは何をいいあらわしているのだろうか？ 第一に、それは日本人民に対する不信であり。第二に、この間の沖繩闘争に対する絶望的な気持の沖繩人民の中から、新たな自らの解放を自ら

わめて本質的・原則的な問題なのである。

旧M.I同盟においても、この極めて、厳格な原則を基に戦術を規定することができず、沖繩闘争を軸としつつ、自らを系統的に解体止揚することはできなかった。他党派に比較して旧M.I同盟は、民族植民地問題、に対して極めて重視していたが、しかし実際は、口では、民族植民地問題、のレーニンのテーゼを唱え、行動においては、抑圧民族の本質的行動を取る、域を出ていなかったと考える。

〔注一〕 我々はこの間の総括の中から次の内容を基にし、闘いを実行してゆきたいと考える。

我々は沖繩問題を論じる前提として次のことを知っておかねばならない。沖繩は等二次大戦以前、日本の属領とされていた。すなわち「沖繩は、明治政府がはじめて近代的な統一国家として海外派兵を行った時期に琉球処分（一八七〇年代）を通じて日本の版図のなかに組みこまれた。それ以前、琉球王国は、日本（薩摩藩）と清との両国に使者を出して盟約を誓い、いわば両国に帰属していたものである。それを、明治政府が征台事件（台湾派兵）に際して、強権的に琉球王国を解体し、属領化したものにほかならない。このため、沖繩は「富国強兵」をとる日本帝国主義の建設の犠牲とされ、植民地的収奪差別支配の対象とされた。例えば国内移民として九州の炭鉱地帯に働きに出た沖繩住民にたいする「内地人」の排外主義的差別、奴隷的雇用などにも如実に表われている。第二次大戦に際し、政府軍部は沖繩を南方略の軍事要塞と化し、住民を砲火の楯とし弾よけとした。この戦争の中で、日本軍十万人、米軍一万二千人が斃れたのだが、一方、沖繩の一般民間人が十五万人も犠牲とな

ったという事を取りあげてみても、政府・軍部の沖縄に対する圧政がはつきりする。生殺与奪の苛酷な状態がこれほどまでに形成されたのは、日本の植民地圏を除いてはなかった。「敗戦の結果、沖縄はアメリカ帝国主義の支配のもとに移された。米軍政下の沖縄人民を待ちうけていたのは、日帝による戦前の植民地的収奪・差別支配を一層強化拡大したものであった。……中略……実に百年の長きにわたって、植民地的収奪・差別支配に服従させられてきた歴史的经验は、丁度、朝鮮人民がかつてそうであったような『忍従の歴史』に類似したものである。それゆえに、沖縄の帰属権とそれをめぐる闘争の問題には沖縄人民がいかなる国家のもとに帰属するののかという問題をなかに越えて、帝国主義の支配をいかに排撃し、いかなる社会を創り上げるのかという点に、その点に焦約される根本的な底流があることを我々は見抜いておかねばならない。」『赤光』第九二号)

七〇年に入って沖縄人民の戦いは「祖国復帰」「反戦復帰」「沖縄解放」の三つの潮流が隠然として存在し、七二年五月返還までは屋良知事に代表されるものであったが、すでに返還され、実は日帝への属領化が明確になるにつれ、日米帝国主義をたたきだすのか、それとも、日米とりわけ日帝に従うのか。即ち、沖縄をアジア侵略のために日帝の前線基地化する路線に協力するのか、それとも沖縄解放への道を、自らの主体思想を確立する中で準備し、実現するかのいう二つの潮流に分化してゆくのが明らかになってきた。

我々の態度は沖縄人民のあらゆる反日米帝闘争を断固支持し、沖縄人民の沖縄解放に向けたあらゆる闘争を断固支持し、連帯するものである。

領土的要求(沖縄返還・奪還等)を提起したりするのはなく、沖縄人民に対する帝国主義の支配と干渉と闘い、(自衛隊沖縄派兵阻止闘争・天皇の沖縄訪問阻止等々)日帝打倒闘争をやりぬくことである。

すなわちあらゆる日帝(米帝)の沖縄人民に対する帝国主義的侵略阻止闘争を闘いぬくことなしに沖縄人民の自決権支持を主張することは、そのかぎりには他ならないのだ。

日本の共産主義者と沖縄の共産主義者は、社会主義革命に向け、そして共産主義社会の究極的目標において統一することは可能であり、統一しなければならぬ。日本と沖縄の人民は共同の敵日米帝国主義(同盟)打倒に向け、共同の戦線を構築しなければならない。

我々は(三)の実現はとりもなおさず(一)・(二)の実現が帝国主義本国人民たる日本プロレタリアート・被抑圧人民に思想化され、闘いぬける中でのみ始めて実現されるものであり、そのために我々は闘いを準備し闘いぬくものである。

我々帝国主義本国人民たる日本人民の任務は鮮明である。

沖縄人民に対する帝国主義的侵略阻止闘争を断固闘いぬこうとあり、一切の沖縄に対する日帝の、国民統合、政策と対決することである。

〔注一〕 旧ML同盟が他党派に比較して、民族植民地問題、を口で重視しつつも、本質的にどうであったかを説明するのは多言を用いない。一九七〇年赤光八八号鈴木論文と赤光九二号河口論文を併読してもらいたい。鈴木論文は沖縄県民と称し、自決権を批判するものであり、河口論文は沖縄解放 革命政府樹立、

したがって、我々帝国主義本国人民の任務は、次の原則的規程の中から決定される。

(一) 沖縄問題をとり扱う日本人民と沖縄人民の戦術を厳格に区別しなければならぬ。

すなわち格言するならば、沖縄人民は自己の領土がどこに帰属するのか(どこを祖国として選ぶのか)の帰属権、又は帰属するのでなく自決(独立)するの自決権、そして又他国と統一する。

統一権に関して、一切沖縄人民の主権に属するものであり、沖縄プロレタリアート被抑圧人民が沖縄の階級闘争の発展のために、即ち、

「沖縄解放」のために一番よい方法、すなわち戦術をどればよいのである。しかもその戦術はブルジョア的に固定化されるものではない。すなわち「沖縄ブルジョアジーは、いつでも自分の民族的要求を中心にする。ブルジョアジーは、それを無条件にかかせる。沖縄プロレタリアートにとっては、民族的要求は、階級闘争の利害に

従属する」のである。

しかし、日本人民には沖縄の帰属、自決、統一の一切を決定する権利は何一つなく、まして沖縄が以前日本領土であったから、日本に帰属するのが当然だとする理論はさらさらないのである。

帝国主義本国人民たる日本プロレタリアート、被抑圧人民の領土併合問題に関する見解は一切の帝国主義的領土併合、拒否、反対の一貫した態度である。この態度がすなわち「日本ブルジョアジーは、いつでも自国の民族的要求を中心にする。ブルジョアジーは、それを無条件にかかせる。日本プロレタリアートにとっては、民族的要求、階級闘争の利害に従属する」ことなのである。〔注二〕

(二) 以上のようにしたがって日本人民がなすべき任務は、民族的・

人民の自治政府を主張するものであり、まったく相反する主張が「赤光」に載るといふ内容なのだ。

しかも一切党内論争は組織されえないという所に大きな問題が存在している。

旧ML同盟の総括としては、沖縄解放闘争勝利の「スローガン」そのものに一切の本質があったと確信する。すなわち、帝国主義本国人民たる我々が沖縄解放をいうことの本質が理解されてなかった所である。沖縄解放闘争に連帯する、支持するとはまさに本質的に異なるのだ。我々はいきわめて厳格にあらねばならない。

〔注二〕 「核ぬき返還」「真なる奪還」「プロレタリアートの手による奪還」等々の言葉が返還又は奪還の前につけて、破産した路線を急ぎよとりつくりたりすることが多々見られるが、返還(奪還)等の言葉は帰属権の問題であり、ねこもしゃくしも雑多にすることはきわめて犯罪的である。沖縄問題を取りあつかう時には沖縄人民と日本人民との戦術を厳格に区別しなければならぬ。「核に反対すること」「闘争をプロレタリアートのヘゲ

モニーで貫徹すること等々は沖縄・日本人民の共同の任務であるが、前述したように帰属権・自決権・統一権については沖縄人民が決定することなのである。

(二) 入管闘争について

(新左翼が実践したことを軸として論ずる)

七〇年七・七華青闘の日本左翼総体に対する告発を一つの結節点としつつ、入管問題が大きな本質的問題を内包するものとして我

我に問いかけられた。この問題は一九六七年以来の運動の総括と結

合しながら、新左翼総体に大きな混乱と分解をよぎなくした。なぜならば入管闘争はプロレタリア国際主義の実際化であり、革命路線におけるプロレタリア国際主義を貫くのか。それとも一国主義的自主独立路線、反帝反スタの観念論の路線なのかと大きな区分をよぎなくされるからである。したがって日本左翼総体の中で大きく三つに区分されていったのもしかたであろう。一つは日共・革マルのこの入管問題に対して一切かかわらず通りぬけた部分、一つは小ブルインテリの立場、即ち小ブルインテリ特有の「人間的苦痛」に対する人間的憤激の裏返しである人間的罪意識からする自己批判運動である。今一つはすでに安易な連帯等を求めたりする時代でなく、問われていることは根本的問題であり、安易な自己批判などですむ問題でないとして我々の思想そのものをより実践的に検証する道に着いた人々の三つの流れに分かれた。三つの流れは偶然生じたものではなく、すべてそれぞれの思想・路線の反映であることは申すまでもない。日共・革マル集団の現在の日本を固定化し、日帝の城内平和的政策（↓抑圧民族・帝国主義政策）に追従し、議会内の組合主義的政治路線においては、当然ながら、現在の世界革命の本流たる中国朝鮮ベトナム等の人民戦争路線にたいしてあらゆる方策（反中国キャンペーン、小ブル的反戦平和運動に曲節、自主独立反帝反スタ等）を持って日本人民との結合を妨害するのである。

（思想が、人民に奉仕する」という観点にないならば、かならず自己・自派の誤りを、直に認めず、あらゆる手を持ってまげ、誤りを拡大し、人民をダメし、客観的に帝国主義に奉仕することになるのである。謙虚にされる思想を）。小ブルインテリの流れは、この間の新左翼運動総体が未だこの域を脱していないがために当然な

二下にあるのか？なぜならば中国の代理人を作る日中友好ならばブルジョアの方が優秀であり、責任があるからだ。もし我々が本心に日本革命を考え、世界プロレタリアート・被抑圧民族と団結し、世界革命を考えるならば、代理人的告発・代理人になるための自己批判を止揚しなければならぬ。

入管問題とは、プロレタリア国際主義の問題であり、帝国主義本国民たる我々にとっては、レーニンの言う所の「民族植民地問題」に対する態度の問題であり、プロレタリア革命路線の問題である。

この本質をぬきにし、あいまいにして一部に唱えられたように「民族責任」などに決って流してはならずそこに落ちてはならない。もし我々がプロレタリアートの立場、中国ベトナム人民の立場に立つという考えがあるならば決って入管問題をブルジョア的、小ブル的な「民族責任」論などに落してはならず決って言うべき言葉ではない。すでにそこにブルジョアへの屈服があるのだ。我々の態度はあくまでプロレタリア国際主義、プロレタリア革命の路線の中から、いかに小ブルジョア、又はブルジョア左派の「民族的道義」「民族責任論」を、どう系統的に、プロレタリア革命のため位置するのかの態度でなければならぬ。我々はこの入管問題の中から新たな評論家群が発生した事実を知っている。この現象は端的に七〇年以降の入管闘争の内容を規定している。新左翼の顔をした形の変った小ブル評論家の出現であり、彼らの「民族的道義責任論」の内容にふり回され階級感情を抜きにした小ブル的告発運動へと転進した内容である。

我々は以上の総括の一つのまとめとして次のレーニンの言葉を引用する。

ら安易な自己批判、告発運動に転進したのも必然であったと考えられる。我々はこの間の運動が革共同中核派の諸君に代表されるように（旧MLももろかりであった。）資本主義体制に対する人間的苦痛―怒りをプロレタリア的に統合することができず、未だ急進的、小ブルインテリ的にしか純化できなかつたことを認める必要がある、いわゆる七〇年から始まった入管闘争に代表される自己批判、告発運動がプロレタリアートの階級的立場からなされるのでなく、小ブルジョアの心情からなされることを認めるべきである。なぜ全共運動が大きな共感を得たのか？それはとりもなおさずプロレタリアートの階級が過去の学生運動とは異なってそこに自分の共有しうる心情を見て取ったからである。なぜ三里塚、水俣が（これも資本主義に対する告発でもある）共感を得たのか？それは多くの人が闘争にかかわっているなどの量的な問題ではない。農民、水俣の人々の顔の中に、プロレタリアートと共有できる思想、心情があるからだ。そうであるがゆえに、小ブルジョア、インテリが闘争にかかわろうとも、彼々はけっして変色しないではないか。日共が彼等の闘争を支援するときは連帯するが、日共が裏切ると連帯はしない。七〇年以降の新左翼が手がけたとりわけ入管闘争がなぜプロレタリアートと共有できなかったのか？なぜあれほど多くの人民を告発した人々（入管闘争をやった人々）が、現在どこに居るのか？なぜ入管問題が華青争の告発という外的条件でしか焦点化されなかつたのか？沖繩があり路線の総括からでも提起できたはずだ？なぜ自らの主体から提起されなかつたのかを問ひをおさないかぎり、被抑圧民族内における代理人は可能でも、被抑圧民族と団結し、日本革命を担う主体はできない。なぜ日中友好がブルジョアザいのヘゲモ

「インテリゲンチヤ・プロレタリアート・農民という社会層や階級を同列におき、インテリゲンチヤにも労働者にも、農民にも、同時にまた同じ程度に立脚しようと望み、まさにそれによって不可避的に（日本の）プロレタリアートを（日本の）小ブルジョア民主主義に政治的にも思想的にも隷属させる結果を招く」『なぜ社会民主党は社会革命党に戦争を宣言しなければならぬのか』※引用中のカッコ内は筆者が入）

我々以上のこと前提としてレーニンの「民族植民地問題」に対する見解を整理しておこう。

レーニンは一九二〇年コミンテルン第二回大会で「民族問題と植民地問題」についてのテーゼ原案の(一)の中で次のように述べている。(一)ブルジョワ民主主義とたたかい、ブルジョワ民主主義の偽りと偽善を暴露するという自分の基本任務にしたがって共産党は、ブルジョアジーのくさびを打倒するためのプロレタリアートの闘争の自覚した代表者として、民族問題でも主眼としなければならぬのは抽象的な原則ではなく第一に歴史的、具体的を、なによりもまず経済的な情勢を正確に考慮することであり、第二に、抑圧されている階級、勤労者、搾取されているもの、利益を支配階級の利益を意味している国民的利益一般という一般概念と明確に区別することであり、第三にブルジョア民主主義の偽りとは反対に抑圧され、従属し平等の権利をもっていない民族と、抑圧し、搾取者の完全な権利をもっている民族を同じように明確に区別しなければならぬ。ブルジョア民主主義の偽りは、金融資本と帝国主義の時代に固有であるように、ごく少数の非常に富んだ先進資本主義国が、世界の人口の圧倒的な多数を植民地的にまた金融的に隷属させているのを

隠している」

レーニンは一九一四年の『民族自決権について』で次のように論じている。

「ブルジョアジーは、いつでも自分の民族的要求を中心にする。ブルジョアジーは、それを無条件にかかげる。プロレタリアートにとっては、民族的要求は階級闘争の利害に従属する。」

「ここからプロレタリアートを犠牲にして他民族のブルジョアジーと取引をしようとする不断の政策が生まれる。プロレタリアートにとって大切なことは、ブルジョアジーに対抗して自階級を強化することであり、一貫した民主主義と社会主義の精神で大衆を教育することである。」

「分離の権利を支持することによって君たちは被抑圧民族のブルジョア民族主義を支持しているのである……中略……これに対して我々は次のように答える。いな、この点でブルジョアジーに取ってこそ「実際の」解決が大切であるが、労働者にとっては、二つの傾向の原則的識別が大切である。被抑圧民族のブルジョアジーが抑圧民族と闘かう限り、その限りで我々はいつてもどんな場合にも、他のだれよりも断固として彼らを支持する。というのは、我々こそ抑圧に對するもっとも勇敢で、もっとも一貫した反対者だからである。被抑圧民族のブルジョアジーが自分らのブルジョア民族主義の味方をする限り、我々はそれに反対する。抑圧民族の特権や暴力に對して闘うとともに、我々は被抑圧民族が特権をもとめる志向を、決して大目に見ない。」

「すべての民族に對する分離権を承認すること、あらゆる不平等、

押しかけ闘争であった。

我々ML同盟としては何一つ実践的なきわめて長期的労働工作を系統的に配置することも、我々の路線を検証することもなしえずして旧ML同盟は政治同盟としての機能をマヒさせていったのである。我々は労働運動に對する総括として、多くの実践的な豊富な教訓をもちあわせてなす。

我々の過去のML同盟の総括として、帝国主義をささえている工場において、しかもさらに加速度化している帝国主義的労働運動に對して、いかに、系統的・系統的な工作をなすことができるのか、いかにしてブルジョア階級の政策に對して、工場で対決できえるのかを着実に創り出すことであると考へる。

残念ながら、我々是我々の思想・路線がいかに実践的なのか？どこまでやりきれぬのかを、これから工場において確かめるのであり、多くの同志と協同し、学びつつ戦略的拠点化政策を執行してゆきたいと考へてあり、それ以外に血肉化されたものを持ってないという所が率直な所であり、我々はそれを認めることから出発する。

以下、我々の分析しえる力量に基づいて、現在の労働戦線の動向を見てゆきたい。

現在の動向は、帝国主義的労働運動の確立に對した統一の動きと、今一方では、さらに戦闘化している下部労働者の動向と、すなわち一方では統一へ、今一方ではさらに戦闘化へと相矛盾する現象が各地で見られている。本年の春闘も、この情勢を反映した闘いであり、帝国主義的労働運動の確立に對した統一に對する闘いでもあったと考へられる。この多様な複雑な情勢を分析するために整理してゆきたい。

あらゆる特権、あらゆる排他性を除去する見地から、それぞれ具體的な分離問題を評価すること。」

以上のようにレーニンは決して、民族・植民地問題をあつかうとき、プロレタリア階級の階級性をあまいにしたりするのでなく、階級的観点で一切を分析しているのである。

我々は一部の諸君に見られるように、ブルジョア民主主義（民族自決権も含めて）を超歴史的、超階級的絶對的に見ることに反対し、一切を現実の階級関係の中で、見なければならぬのだ。

帝国主義本国人たる我々は、日帝の一切の排外主義・抑圧民族化政策を粉碎し、あらゆる被抑圧民族の反日米帝闘争を支持し、日帝の帝国主義侵略政策と対決し、日本帝国主義打倒を全世界プロレタリアート、被抑圧民族と連帯する中で実現することが、任務である。万国のプロレタリアート・被抑圧民族団結せよ。

(木) 帝国主義の恩恵を拒否し、帝国主義と対決する労働運動に向けて。

旧ML同盟を総括する時に、一つの重要な欠陥を見る。それは、持久的な労働運動が何一つないからであり、職場・工場における系統的な工作、ストライキを實踐しておらず、又職場工作の経験を教訓化してないという所である。

旧ML同盟の労働運動論といえは、学生全共闘運動の総括に基づいて（但、総括といつても当時の全共闘万才論的総括より）それを労働戦線に解積的に適用した「プロレタリア権力を創出する労働運動」(『赤光』七四号鈴木論文)であり、その実践的スローガンとして、労働者階級に全共闘運動をであり、その一つとしてNETに對する

(一) 帝国主義段階における右翼的潮流の発生原因について

資本主義が発展して帝国主義段階に入ると日和見主義、修正主義は以前にない、新しい経済的基盤を得る。それはレーニンをして以下のようにいわしめたことである。

「このような巨大な超過利潤(というものはそれは資本家が自国の労働者からしぼりとる利潤以上に得られるものだから)の一部で労働運動の指導者や上層の労働貴族を買収しうることは理の当然である。そして先進諸国の資本家達はこれらの上層の人達を幾千の直接及び間接の、公然の方法によって実際に買収している。」(『帝国主義論』序文) 実際に見ると次のようになる。大体、企業の売り上げや利益と企業の規模は比例して大きくなっているが、この利益の大きさに比例して組合が弱く、反比例して組合が戦闘的であるという現象が目につく。この現象はその企業の買収能力によって決定されるからである。

帝国主義は一方では今日米帝を見てもわかるように常に政治的危機を内包しており、この時代にブルジョアジーとプロレタリアートが正面から衝突したら、矛盾は激化し、帝国主義は危機にひんするのだ、すでに述べたように、超過利潤を持って労働者を買収し、労働貴族と労働官僚を作り出し、労働組合を労働者のブルジョア政治の場とするのである。(注一)

資本家は、買収力を背景として常に労働者の中に差別を持ちこみ、職制という代理人を工場に配置する。このブルジョア化した労働者の性格は文字通り、ブルジョア的世界観の宣伝家であり、ブルジョアジーの利益の代理人であり、ブルジョアジーの労働者内の番頭であり、下層労働者階級を支配し、労働者の利益に敵対する、ブルジ

ア化した労働者である。このような労働貴族と下層労働者が同じ労働組合を構成するとき、日和見主義的ダラ幹達は「統一と団結」のスローガン（ときにはマルクス・レーニンの名のもとに）を叫び、闘争を労働貴族の側即ブルジョアジーの側に有利に展開してゆくのである。

〔注一〕労働貴族と労働官僚との関係は前者が社会的、経済的基礎であり、後者がその政治的、思想的に代表し、労働運動において特に、目立った役割をはたす関係にある。

①、労働戦線の統一という、帝国主義的労働運動の再編が唱えられる本質について

統一を主張しているのは同盟、総評右派であり、主要単産は鉄鋼労連、自動車労連等の私企業大手の組合であり、これに対して総評左派、国労、動労等の官公労が反発しつつも統一に流されていく傾向にあること。即ち、民同左派に代表された総評を軸とする労働運動から、同盟を軸とする労働運動への傾向がいれば、統一の内容である。

即ち、総評左派（民同左派）の日和見主義者は、労働貴族と下層労働者を統一させようとして実質的には「統一と団結」の美名のもとに常に下層労働者の利益を裏切ってきたが、しかし下層労働者を一時的にもギマンするために戦闘的ポーズと、それなりの民主主義を保障してきたが、それに対して総評右派、同盟の潮流はブルジョアジーとベッタリとくっついており、きわめて反労働者的であり、公然たる労資協調、社会排外主義者であり、この日和見主義の完成された社会排外主義者に日本労働戦線の席を明けることが統一の内容

主義と戦争」のである。

統一とは日帝の帝国主義的利潤の増大に伴ない労働貴族が増大し、従って更に帝国主義政策を強化するための何ものでもなく、すでに社会排外主義者達はもはや公然とマルクス・レーニン主義を否定し、それに敵対しており労働貴族の利益と下層労働者の利益を統一させようという等のポーズをとらず露骨にブルジョアジーの代理人たる労働貴族の利益を守り、下層労働者の反撃に出会うとそれを統一と団結の名でごまかすのでなく徹底的に弾圧するのであり、彼らはすでに戦闘的ポーズをとる必要はなく露骨に労資協調の方針を貫徹するのであり、文字通り帝国主義的労働運動の完成に向けたものが統一に他ならないのである。

〔注一〕この転換には古い勢力と新しい勢力との対立という形をとった劇的な転換もあれば戦闘的ポーズをとっていた日和見主義者が公然たる労資協調主義に「変身」することによってなされることもある。総評左派がこの動きに対抗できないのは本質的に同じ土俵に在るからである。

②、社会排外主義・帝国主義労働運動に対する闘いはいかにあるべきか

⑴、第一に、はっきりせねばならないことは日和見主義や社会排外主義は労働者の敵なのか味方なのか、敵ならばどのような敵なのかということである。

「日和見主義は我々の主要な敵である。労働運動の上層の日和見主義はプロレタリア的ではない、ブルジョア的な社会主義である。労働運動内部の活動家で日和見主義的傾向に属する者はブルジョア自身よりも、すぐれたブルジョアジーの擁護者であるということ

なのである。ではなぜこの統一の社会的、経済的基礎が生じたのであろうか？ すでに論じているように日和見主義・修正主義の発生重要な社会的、経済的基礎は、帝国主義的超過利潤によって買収された労働貴族層の形成である。その日和見主義が完成された日和見主義、即ち社会排外主義、公然たる労資協調主義に転化するきっかけは、歴史的には資本主義の危機の深刻化、戦争であり、社会的、経済的裏づけは労働貴族層の肥大化である。即ち最近の日帝の膨大な黒字にあらわれているように超過利潤との関係を明らかにすることを通じてのみこの統一、即ち労働運動の動向を分析できるのである。

即ち一般的には、日和見主義と社会排外主義との潮流の交替は労働貴族層の労働者内における支配力の程度によって決定されるのである。労働貴族の支配力が弱ければ、ブルジョアジーはかくれた労資協調主義者（民同左派）日和見主義者に最大の援助を与え、期待をよせる。しかし労働貴族層の支配力が強くなると、日和見主義路線（民同路線）を社会排外主義路線（同盟路線）に転換することをブルジョアジーは労働貴族と共に強要する。（岩井の退陣、石川島はりま重工の全造船の脱退に見られるように）〔注一〕

以上見てきたように日和見主義と社会排外主義とは、いずれも労働運動のブルジョアの潮流であり、その社会的経済的基礎は本質的に同じであり、「すなわちごく少数の特権を与えられた労働者と小ブルジョアジーとの利益がそれであって、彼らは自分達の特権的地位を守り、また自分達の民族のブルジョアジーが他民族を略奪したり、その強国としての有利な地位を利用したりして手に入れる利潤のおこぼれに対する自分達の「権利」を主張している」（『社会

実践的に証明されている。彼らが労働者を指導することがなければブルジョアジーはもちこたえることができないうであろう。』（コミンテルン第二回大会）

日和見主義社会排外主義は労働運動内部の主要な敵である。

⑵、第二にいかなる階級・階層に依拠し、いかなる利益を代表して闘うのかということである。

「エンゲルスは、古い労働組合のブルジョアの労働者党、特権的な少数者と、下層の大衆、真の多数者とを区別し、ブルジョアの上品さに感染していないこの大衆に呼びかけている。これこそマルクス主義的戦術の核心である。（中略）だから我々が引続き社会主義者であり、できればもっと下層に、もっと深く真の大衆の所に入っていくことが我々の義務である。これこそ日和見主義との闘争の全意義であり、この闘争の全内容である。』（『帝国主義と社会主義の分裂』）

現在の労働組合は、下層の労働者の全体を必らずしも含みきれない。それに比較して上層は大体もれなく組織されている。そのみならず組織されている労働者の中の下層の労働者の利益にくらべ、少数者でしかない上層の労働者の利益が重視されている。このことは現実の労働組合が依拠している階級的な性格を反映しているものに他ならない。

我々は常に下層（臨時工・社外工・季節工も含み）労働者に依拠した労働組合運動を展開しなければならぬのである。

⑶、第三に、どのようにして闘うかということである。

「我々は日和見主義者と社会排外主義者が実際には大衆の利益を裏切り、売り渡していること、彼らが労働者の少数者の一時的な利益

を守っていること、彼らがブルジョア思想やブルジョア的影響の伝達者であること、彼らが実際にはブルジョアジーの同盟者であり、手先であることを暴露し、そうすることによって大衆に彼らの真の政治的利益を見分けること、帝国主義戦争と帝国主義的休戦とのあらゆる長い苦痛にみちた転変を通じて社会主義のために、革命のために闘うことを教える。

日和見主義との分裂が避けられず必要であるということを大衆に説明すること、日和見主義との容赦ない闘争によって、大衆を革命へ訓練すること、国権的な不自由主義的労働者政治のあらゆる醜行を隠蔽するためでなく、それを暴露するために、戦争の経験を利用すること―これが、世界の労働運動における唯一のマルクス主義的方針である。」「(『帝国主義と社会主義の分裂』)

全ゆる場所で、日和見主義、社会排外主義思想と闘いぬかねばならず、この潮流との闘いをぬきにして資本家との闘争は存在し得ない。なぜならこの潮流は労働者階級における資本家の代理人であり、敵である。我々はこの原則をけっしてわすれてはならず、この原則に貫ぬかれた多様な戦術を展開しつつ闘いぬかねばならない。一部の労働者の中に見られるようにダラ幹も、同じ元労働者であるとか、闘争中における幹部批判はまずいとの声があるが我々は明確に次のように宣言しなければならぬ。「今日の社会排外主義的指導連のうち個々の人間がプロレタリアートの側にかえってくるということはありうる。しかし社会排外主義的潮流、または同じことだが、日和見主義的潮流が消滅することはありえないし、それは革命的プロレタリアートの側にかえってくることはありえない。」「(『帝国主義と社会主義の分裂』)のたと。闘争中の幹部批判は文字通り、労働

(四) 戦闘的第一組合運動をいかにして帝国主義の恩恵を拒否し、帝国主義と対決する反帝労働運動の一環として再構築する
のか(組合運動総括の前提素材として)

一九六〇年三池闘争の敗北を一つの頂点とし、日帝は戦後民主主義的労働運動の使命を終えさせ大手私企業(基幹産業)中心としつつ、帝国主義的労働運動たる同盟を強化してきた。その帝国主義的再編成への過程で戦争的を第一組合として少数の人々が存続してきたのであるが、その敗北の総括は労働運動全体であまり重視されず、なしくずし的に各企業で敗北を重ねている状態である。なぜなら総評においては、すでに明らかにしたように、その本質を解明し対決することはできないのである。七〇年代に入っては石川島はりま重工に代表されるように、さらに攻撃的に組合まるごと体制内化している現実の中で、この第一組合をどう位置づけるかは我々にとってきわめて重要な問題であり、かならずその敗北の教訓を生かさねばならないものである。以下全造船石川島分会について見てみよう。

(注一) (資料は都労活、資料集三より)

3. 総括(成果)

- (イ) 全造船機械の丸ごと脱退に抗して三〇名の同志が決意し、旗を守ったことにより、資本の「全支配」が不能となった。
 - (ロ) 同盟路線という名の、事実上の労務管理機構の中で「当り前の組合」を残し、階級的運動の窓口を残したこと。
 - (ハ) 「採用即時自動加入」という戦後二十五年に渡る大衆団体としての企業別従業員組合そのものを、この機会に問い直したこと。
- (欠陥)
- (イ) 資本の合理化攻勢の実態を正しく把える努力を怠り、職場生産

者大衆の利益を守るためであるのであり、日和見主義者達は下部からの批判がないかぎり、より一層代理人としての役割をはたすだけなのである。

(二) 第四にどのように闘ってはならないのかということである。

- (1) 日本共産党―宮本修正主義一派のように闘ってはならないこと。彼らは常に統一と団結を主張し、日和見主義(自らもそうであるが)を直接助け、社会排外主義を間接的に助ける。彼々にはすでに一切のマルクス・レーニン主義の原則もなく、プロレタリアートと労働貴族(ブルジョア又は小ブルジョア)とを和解させ、両者を統一せようとしている。六〇年代までに民同左派について、民同路線を守ってきたが、すでに社会全体が帝国主義化する情勢にあっては社会排外主義(同盟)とも闘うことなしに和解しようとしているのが、七〇年代に入って日共内宮本修正主義一派の特色である。石川島はりま重工におけるように第一組合を脱会し、第二組合へ転進した内容は、まさに日共中央の社会排外主義路線と同様である。
- (2) 六〇年代後半に新左翼の一部で見られた組合解体のストーリーに見られるような小ブルジョアの闘い、工作はよくないこと。

一般的、観念的なスターリン主義批判に基づく、反日共及び単なる反幹部闘争をやってはならず、日和見主義、社会排外主義が生ずる本質を分析し、資本家の攻撃に対して十分戦略、戦術(味方の分析と敵の動向を持ってした)を具体的に大衆にわかるように組織し、闘争の方針をめぐって日和見主義、社会排外主義者を孤立化させること。

点の接点で、有効な反合同争を殆んど組織もせず、専ら一部活動家層において反同盟の宣伝程度しかやられていかなかったこと。

(ロ) 「統一と団結」の名によってたえず問題をぼかし、御用勢力との妥協を図ってきた。

(ハ) 全造船機械労組の傘下の組合でありながら、企業連の方針に事実上従属していたこと。

(ニ) 三人組、五人組などの「誓約者集団」の「団結核」形成を怠っていた。

(ホ) 経済的諸要求に対する不徹底な闘い。

(ヘ) 「組合民主主義」の名によって、労働者の権利を中央に集約し、(あるいは剝奪し)幹部請負闘争に終結。

以上の総括の中からも見られるように、七〇年代の分裂の特色は何かと言うと、労働運動の帝国主義化・再編に絶対的に組みしえな存在としてあり、その存在は決して単なる六〇年代前半の第一組合主義的思想では不可能である。(日共の没落を見よ)すなわち文字通り反帝労働運動を構築するという目的意識性につらぬかれなにかぎり、第一組合は存在してゆけないことである。

このことは次のことを労働者につきつけるものである。

- ① 資本の差別攻撃にさらされながらも組合選択に階級意識の必然的必要性・自動加入の否定。
- ② 即自的要求―労働条件等の差別攻撃の覚悟、物取り主義の否定。
- ③ 労働者個々人の職制への抵抗を通じて労働者の人間的解放の現在の解放の現在の実現に労働者の自力、幹部代行主義の否定。
- ④ 「多数決」「民主主義」「合法主義」等の階級的再把握とブル

ジョアの理解の否定。

⑤ 企業内左翼、または本工組合主義からの脱皮。

分裂少数組合が存在し、発展しようとする時、右の実現が必然的に要求される。「注二」即ち、すでに問われていることは五〇年代及び六〇年代前半の時のように「闘う労働組合」としての「戦闘性」と「統一と団結」が結合していた時代ではなく一切の原則そのものが問いなおされるのである。現在の労働運動の帝国主義的統合が、過去の原則即ち「統一と団結」及び民主主義の名のもとになされているのであり、我々はこれら一切の原則をプロレタリア階級の立場から問いなおすべき時にきているのである。その根本的なものは、本当に今までの労働組合はプロレタリアートに依拠していたのであるのか？ この問を常に念頭に置いておくことが必要とされているのだ。日本は帝国主義本国であり、労働組合は総体として帝国主義の影響下にあることを明記して、以上論じたことを具体的に実践化するものである。

〔注一〕 労働分裂の実態について、争議中の分裂（三池・ソニー・光学・ゼネ石等）

企業合併に供なり分裂（アリス・長崎造船等）

労働戦線統一下の分裂（石川島） 左翼分裂（九電等）

〔注二〕 資本と同盟幹部の一体による労働者支配の中で「少数労組」の多数化は困難だし、石川島の場合それを求めるのは現実的でない。従って少数労組の政策と運動が、多数派労働者の心をとらえるならば、少数派労組の政策と運動が多数派組合自身の手によって、間接的に表現される。この現象を「多数化」と呼ぶのであって、必ずしも組織人員の多数化だけをいうのではない。

我々に以上の単的なしかも常に言われている名言を实践的に、日本階級闘争の中でさし示してくれたのが三里塚九・十六東峰闘争であった。

その闘争の評価は次の内容である。農民という一つの階層が土地を守る（生活を守る）という条件の闘争を出発点としつつも、この長期的闘争の中で日帝に反対し、国家権力と対決するという明確な政治自覚を持って、権力と暴力的対決にどんだ人民大衆の闘争は、一八八四年の秩父農民の蜂起の他になく、ここにおいて農民の革命性が復権したことの象徴的表現が三里塚九・一六東峰闘争なのである。それはとりもなおさず、日帝の農民棄民政策と対決する農民の土着的革命闘争の宣言なのである。九・一六闘争は、この長期的三里塚闘争の中から作り出された人民の政治の中から創出されたものに他ならず、そうであるがゆえに、権力は三里塚農民が作り出した人民の政治、そのものを壊滅しようとする攻撃をしつようにかけてきているのだ。

〔四〕(イ)の確認は次のことを我々に指めてくれた。

「我々は、万人の目に一目瞭然と見てとれる労働者階級の政治的意識と革命的積極性との成長に結びついた。このような大衆運動だけが、真に革命的行為と呼ばれるに値いするものであり、ロシア革命のために戦っている人々を真に勇気づけることができる。我々の群衆の真の反撃この反撃の非組織性、無準備性、自然発生性は我々に自分達の革命的力を過大評価するのがどんなに愚かしいことであるのか、まさにこの我々の目のまえで真に戦っている群衆のなかへますます多くの組織性と準備をもちこむ任務を軽視することがどんなに犯罪的であるかを、思い起させる。射撃を手段として、人を

また活動資金の問題については、多数派の中に機関紙固定読者・固定カンパ集団・秘密組合員などの支持者による運営を図る。またその支持者によって、敵の動向をキャッチし、対応する。

(ハ) 武装闘争について

軍事問題に対する態度について

一九六七年一〇・八闘争以来の新左翼運動が大きな壁に突きあたり混乱を呼び起こしたものに「軍事」があった。この問題を新左翼運動の地平で純化し、追い求めた結果が連合赤軍事件なのである。我々が序文で「連合赤軍」事件を重視しているのは、この軍事問題と密接不可分であるからだ。

以下この問題について整理しておこう。

(イ) 71年九・一六東峰武装闘争は我々に何を提起してくれたのか？

(1) 政治の最高形態が戦争であり、軍事は政治の中から創出されること。

我々は日大全共闘に代表される大衆武装闘争は日大という学園の中における全共闘運動と称される政治領域から創出されたものであると確信している。我々は次のことをこの間の総括として確認しなければならぬ。軍事は政治の単的な象徴的表現であり、小ブルジョア階級に依拠した政治からは、小ブル的ロマン的軍事しか創出されないこと。ブルジョア軍隊は、ブルジョア階級に依拠しているがゆえに、ブルジョア政治の反映でしかないものであり、いかなる科学兵器を使用しようとも、その本質に変化はないのである。プロレタリア階級に依拠すれば、プロレタリア階級のための軍事を創出するのである。

興奮させる動機や煽動材料や政治的思考のための材料をつくり出すのではなく、ロシアの生活が十分すぎるほどに提供している材料を加工し、利用し、自分達の手に取りあげることや学ぶこと——これがこそが革命家にふさわしい唯一の任務である。「新しい事件と古い問題」

三里塚九・一六闘争はまさにこのようにして創り出されたのである。この原則を忘却した所には決して人民の政治は生み出せえず、ましてや武装闘争は作り出せないことを、我々は明記しなければならぬ。即ち武装闘争は大衆路線の中からのみ生じるのであり、人民の海は自然発生性、又は極左軍事行動の中から生みだされるものではない。労働者、人民なくしては軍事は無力なのである。我々は九・十六闘争を教訓化し、軍という魚の泳げる人民の海を組織しなければならぬのである。

(イ) 毛沢東は『持久戦について』の中で持久戦の三つの段階を次のように区分している「第一段階は、敵の戦略的進行、わが方の戦略的防御の時期である。第二段階は、敵の戦略的保持、わが方の反攻準備の時期である。第三段階は、わが方の戦略的反攻、敵の戦略的退却の時期である。」そして戦争の目的については「戦争の目的はほかでもなく「自己を保存し、敵を消滅する」（敵を消滅すること、敵のすべてを肉体的に消滅することではなくて、敵の武装を解除すること、つまり「敵の抵抗力をうばう」ことをいう）ことである。」とし、敵が戦略的外戦にたち、味方が戦略的内戦にある時には、陣地戦をおこなわず弾力的な運動戦を採用し、戦役上戦闘上の作戦では外線速決的な進攻戦を断固と採用するならばかならず、全体の形勢を変えることができると論じている。（外線とは進攻の

範囲をさし、速決とは進攻の時間をさすので外線の速決的な進攻戦とよぶのである。「これは持久戦の最良の方針であり、また運動戦というものの方針でもある。だがこの方針を執行するには主動性、弾力性、計画性をはなれることはできない。」(『持久戦について』)と分析している。

九・一六東峰闘争はこの「外線の速決的な進攻戦」の内容を十分持っていると考えられる。

即ち持久戦の第二段階戦略的防禦の段階にある日本階級闘争の中にあっては、「自己を保存し、敵を消滅する」の原則の中で味方の「周到な計画と充分な準備」の中で作られた作戦に敵を引き入れ、敵を攻撃し、速決戦をおこなうこと。武装闘争は現段階においては正面戦をさけ、非公然(党派ヘルメットをわざわざかぶって敵に証拠を与えるような遊びはやめて)に行ない、敵の弾圧を最小限にしようとめなければならぬ。「注一」

我々は「一六東峰闘争が実践的に「外線の速決的な進攻戦」を示してくれたと考えており、あらゆる意味において教訓の質は深いと考えている。すでに我々の今後の一切の武装闘争は九・一六東峰闘争の地平より、規定されなければならず、敵密を聞いてなければならぬ」と考える。

〔注一〕 他の闘争においてもしかしりであるが、九・一六闘争は一切の証拠が存在せず、今も続いている弾圧は一切が自供に伴うものと考えられる。我々は自供(↓敵に味方を売ること)をなくする思想・組織を作りあげねばならない。過去においては公然闘争の内容であったがゆえに、自供も決定的にならなかつたが、九・一六闘争に見られるように、非公然になれば、文字通り敵は

〔革命運動の大陥没と勝利への試練(八木健彦)と同じ見解を持っており、情況対应的にこの原因をあいまいにすることに反対すると同時に、この「同志殺し」の原因を党一般に召還させたり、はたまた反米愛国路線を堅持しなかつたから等々の政治路線一般に召還することに反対する。問われていることは、さらに本質的であり、我々の欠陥は深いのである。〕

連合赤軍諸君の「同志殺し」↓銃撃戦にいたる一切の行為で主観的には革命の発展のために実践したことは認めねばならない。「同志殺し」は、自己のブルジョア、小ブルジョア性を、どう克服するのか、即ちプロレタリア化する手法として総括と称する行為であったと考えられる。又、軍としての行動に伴う規律を守るためにも、総括と称される「同志殺し」があつたと考えられる。我々は「同志殺し」の問題についてプロレタリアの規律はどこから生まれ、どのようにして守られるのかという側面から論じて行きたいと考える。

レーニン『左翼小児病』の中で次のように論じている。「なによりも問題なのはプロレタリアートの革命党の規律はなにによって支えられ、なにによって点検され、なにによって補強されるかということである。第一に、プロレタリア前衛の自覚によってであり、革命に対する彼らの献身、彼らの忍耐、自己犠牲、英雄精神によってである。第二にもっとも広範な勤労大衆、なによりもまずプロレタリアの勤労大衆と、しかし、また非プロレタリアの勤労大衆とも、結びつきを保ち、彼らと接近し、そっくりいなければ、ある程度まで彼らと溶け合う能力によってである。第三に、この前衛の政治的指導の正しさによってであり、この前衛の政治上戦略と戦術の正しさによってである。ただしそれはもっとも広範な大衆が

自供を軸として弾圧をやるのであり、自供はまさに階級的裏切り何ものでもないのだ。

(二) 連合赤軍事件を生じせしめた原因について

(一) イロハは文字通り九・一六闘争の教訓であると同時に、連合赤軍を始めとする新左翼総体の本質的欠陥を指適したものに他ならぬのである。(二)で論じるところは(一)を前提としてさらに深く入ってゆくつもりである。(ここでは、連合赤軍の本質的欠陥を明らかに示した「同志殺し」を軸として論じる)まず最初にこの「同志殺し」に対する我々の態度を明らかにしておく。

「あくまでもこの事件を人民内部の問題として、人民自身の批判と糾弾の対象とすると共に、ブルジョアジーの荒れ狂う反革命攻撃の全て―連合赤軍自身に対する攻撃も含めて敵に対して一致共同して闘わねばならない。そのどれ一つとして、敵権力と唱和してはならず、曖昧な態度をとることはできず、ブルジョアジーの全ての攻撃の中に、級級対立の非和解性を明らかにし、闘わねばならない。今回の事件は確かにその客観点政治的性格において反動的・反革命的である。しかしそれは何よりもプロレタリア革命運動の断固たる前進の見地に立つもののみがそういうものである。だからこの事件の批判と糾弾は必ず、人民をプロレタリア革命運動の断固たる前進の見地へ、その闘いを赴かせていくものでなければならぬ。それはまた敵権力の一切の反革命弾圧攻撃―連赤に対するそれも含めて―敵と真に対決し、断固闘い、権力に唱和する部分を批判し抜くことと不可分一体である。我々はいつかなる時にもブルジョアジーとの闘争、その打倒こそ第一とするのだ。直ちに反撃を」

彼ら自身の経緯によって、この正しさを納得するということと条件とする。これらの条件がないとブルジョアジーを打倒して全社会を改造するべき先進的な階級の党の内実をそなえた革命党内の規律は実現できない。これらの条件がなければ規律をつくり出そうとする試みは必ずずまらぬもの、空文句、もったいぶった仕草になる。他方これらの条件は一度に生じるわけにいかない。それは長期にわたる労苦と苦しい経験によってはじめて作り上げられる。これらの条件を作り上げるのを容易にするものは正しい革命理論である。そして革命理論のほうは、教条ではなく、本当に大衆的な本当に革命的な運動の実践と緊密に結びついてはじめて最終的にでき上がるのである。」

以上見てわかるように(一)プロレタリア前衛の自覚、(二)広範な勤労大衆と結合する力、(三)前衛の政治路線の正しさによって始めてプロレタリアの規律は生じるものである。

新左翼運動、とりわけ連合赤軍の諸君はいわば革命に対する献身、自己犠牲の精神については過去のあらゆる闘争に類を見ないものを持っていたが、しかし(一)裏打ちされない英雄的精神は今回のように敵権力に追いつめられると、同志殺しに端的に表現されるように反革命的行為に転化するものであり、自供という通敵行為についても安易に転化するものである。なぜならプロレタリア階級、被抑圧人民と結合しない、又は結合すべく路線を持たない革命に対する献身性、自己犠牲は、小ブルジョア階級特有の思想であるロマン主義的傾向から生じるものであるからだ。小ブルジョア階級及びインテリ層が革命的であるのかどうかの判断は「プロレタリア階級と結合しているのか、否か」この一点によってのみ決定されるのである。

この間の学生革命派の姿を見て見よう。彼らがプロレタリアート・被抑圧人民の側に立って闘う時は革命的であり、戦闘を忘れた時は決して革命的でなく、しかも多くの活動家が原則的な首尾一貫した思想を持ってないのであり、常に動揺しているのである。「注一」このことは次のことを冷徹にも証明するものである。革命と反革命が増々激しく対決し、つばぜりあいを開始した今日においては、必然的にも人民内部の矛盾もきわめてするどく我々につきつけられるのであり、その矛盾に処理を誤ると、反革命に転化するものであり、しかも今後の「つばぜりあい」の激化の中にあつては決定的な反革命に転化する危険は、我々の近く、日常的に山積しているのである。なぜなら革命と反革命の境界線は固定したものではないからである。

〔注二〕

小ブルジョア階級、インテリ層には、歴史的にも、現在のにも、首尾一貫した思想が存在せず、常に動揺が決定的な時に生じるのであり。我々は常に革命的であろうとするならば、常に小ブルジョアのロマン主義的の革命観をプロレタリア革命へと止揚しようとするならば、常にいかにしてプロレタリア階級と結合するのか、いかにして「人民に奉仕する」革命観を身につけるのかを追求しなければならぬ。このことを考えないならば、即ち共産主義的政治に裏付けられない「規律」は必然として小ブルジョアのロマン主義に依拠しなければならず、それはまた必然として今回のような「同志殺し」否、それ以上の反革命行為を演じるのは歴史的事実である。我々は「同志殺し」に表現された思想傾向が学生革命派を中心とする多くの革命の人々が色濃く持っており、時には極左の形で、特に右の形で出現することを見ている。我々は過去の革命的英雄主義をさらに打

隊せんめつでも、七一年九月一六東峰闘争と他との差を見れば、あきらかである。このように暴力闘争は、きわめて厳格であるのである。

すなわち一切の闘争戦術は、敵を鮮明にし、敵に攻撃を集中し、敵を孤立させ、動揺させ、解体においこみ、味方を量質共に拡大せしめ、中間分子を動揺させ、味方に獲得するという現実的実効性

(九・一六闘争のように)で決定するものであり、政治目的を鮮明にするためという原則性の中で決定しなければならぬのである。我々は多くの爆弾闘争に対して次のような見解を持っている。あまりに政治目的と結合してはいないか？あまりに敵が不鮮明ではないか？あまりに大衆闘争と関係ない、不毛な爆弾が多いではないか？あまりに自供が多すぎるではないか？我々の見解は明解である。爆弾闘争も政治目的と明確に結合した場合は有効な戦術である。我々の武装闘争は大衆闘争と結合しなければならず、プロレタリアート・被抑圧人民と結合したものでなければならぬ。歴史的にも、実践の経験からでも、闘争の前進の時には、かならずそれぞれのレベルにおいて、大衆闘争と武装闘争は弁証法的に結合しているのである。「注一」

我々は自らの経験と九・一六 三里塚東峰闘争に代表される人民の血の教訓を継承し、次の新たな発展を追求し、厳格に設定された武装闘争を大衆的に創出するために闘いを準備するものである。

〔注一〕 新宿ツリー爆発はさえたる無思想・無原則性の端的な現象である。

以上を以って第一章を終えたい。

ちきたえるために、プロレタリア階級と結合し、正しい政治路線の中から、小ブルジョアの思想を克服し、プロレタリアの規律に打ち抜かれた党建設を追求するものである。

〔注一〕 小ブルジョア階級がいかに動揺し、首尾一貫した思想を持っていないのかについては、自供病の多いこと、昨日までの活動家が今日は、活動を否定し、ブルジョア社会に復帰する現象を見ることで十分を証明になると考えられる。

〔注二〕 ある意味では、今日の「内ゲバ殺し」もその一現象である。しかしこれは絶対に克服しなければならぬ。

〔三〕 爆弾闘争等々に対する原則的態度について

七〇年に入って大衆的武装闘争の限界を突破するために、単なる武器のエスカレートという現象が存在し、しかも思いつきの闘争の色彩を多く持ったものが存在している。即ち、戦術を全局の中から打ち出すのではなく、その場かぎりのものであり、その行為に対して自から最後まで責任を貫く主体思想もなく、逮捕されれば、権力の挑発的スパイまがいの自供をやり、権力のデッチ上げ、弾圧の口実を作り出すという行為である。

我々は一切の暴力闘争に対する考えを、思想的にも、実践的にも厳格にしなければならぬ。なぜなら「革命は暴力で誕生する」と名言がある通り暴力は階級闘争の発展と腐敗の分岐点だからである。すなわち階級闘争の新たな質を、生じせしめる暴力は革命的暴力であり、多くの人民が新鮮な共感を感じ、支持するのは、すでに我々は、一〇・八闘争・全共闘運動の中で知っている。しかし、新たな質を生じさせない、又は、その活力を持っていない暴力闘争には多くの人が結集せず、共感もしめさないことも知っている。同じ機動

第二章 思想方法・工作方法の統一に基づく党建設

——人民に奉仕する党建設にむけて——

この章は我々にとつては重要な軸である。現在少なくとも人が総括から、毛沢東思想の偉大さ・思想方法・工作方法・又は指導方法・作風の重要性を認め、中国革命・朝鮮・ベトナム革命へと結合してゆく、人民戦争路線を正しく評価し、いかに日本革命へと結合するのかを考えている。たしかに大きな飛躍であることにちがいはないし、そのかぎりにおいては正しいものである。しかし我々旧M.L.同盟に所属していた者にとつては、毛沢東思想の正しさは、社会学(M.L.)の時から知っていたし、思想方法・工作方法の特別決議(M.L.同結成時)や毛沢東思想から色々と社会を分析してきたのであり、中国・ベトナム・インドシナ革命戦争をいかに日本革命の中に結合せしめるかは「アジア革命に合流しよう」と唱えてきた。被抑圧民族との団結についても鮮明に出していたし、沖縄人民の自決権支持についても唱えてきた。だがしかし旧M.L.同盟は真夏の熱病のごとく燃えきり、崩壊し、人民に明らかにする不十分な総括さえも提起することもできなかったのである。いわばこの現実こそM.L.同盟の総括であり激戦の結果としての現実なのである。毛沢東主義を鮮明にかかげ、闘いぬいた政治同盟の現実である。我々は卒直に言つて、言うことと実践することの困難さについて身にしみて味わつた。マルクス・レーニン・毛沢東の言葉の窓から社会を解釈すること、マルクス・レーニン・毛沢東主義を実践化することのちが

いについて自覚せねばならないと考える。我々は以上のような経験から、多くの友人に対して総括が解釈なのか、それとも思想化された実践化されている総括なのか、即ち、本当にこの間の経験から生み出された生きた思想なのか、それとも本から(たとえばマルクス・レーニン・毛沢東)かりてきた社会を解釈するための理論なのかについて常に明確にすることを心がけるよう伝えたい。人間はえてし言葉にまどわされる。新しい言葉を使用することで前進したような鎖覚におちいる。一つの理論は理論として存在するがゆえにあるのではなく、実践されてのみ理論が理論として存在する価値があるのである。旧M.L.同盟においては多くの立派な理論(社会を解釈するための)が存在したが何一つ系統的に実践されたことはなく、したがって、経験を正しく総括する、作風は実践化されず、その結果として、思想化されないその場かぎりの断片的な活動に終つていく。毛沢東の言葉を盗用し、日本の情勢を解釈したのに他ならないのである。いわばM.L.同盟は頭(理論)と身体(実践)が別方向にある奇妙な動物であり、この動物を二年近くささえたのは、毛沢東の言辞で修飾された実践的能動性、即ち、機動隊との戦闘における勇敢さであつた。この動物が、戦闘性を発揮できない局面にくると必然として分解するのは当然であつたが問われていることが本質的であり、しかもすでに毛沢東の言辞でいくら社会を解釈しても、一向に

新しい方針をだれも考えないために、これまた奇妙な自己崩壊という形になつたと考えられる。(注一)

次に旧MLI同の前身たる社労同(ML)、社学同(ML)がどのようにして毛沢東主義を掲げたのかを見てみよう。『赤光』四十三号

(一九六八年四月一〇日)社学同第十回大会の政治報告によると、

二、「情勢の転換における指導の転換について」の中で日韓階級決戦論を提起した諸論文の批判の不徹底性をつきつ次のように論じている。「しかし問題の観点は正しくとも、その止場の方向は宇野理論と革命の実践過程との中においてみるのではなくて、宇野理論そのもの中に限界性を求めていつたことは、我々にとつて悲劇であつたと言わなければならない。(中略)宇野理論を乗り越えるのはまさに宇野理論自身が持つていて、その実践における認識に対する批判と理念を対置させる彼の根源的な方法論上の誤りを指摘するものでなければならぬ。毛沢東主義は明らかに実践と認識の問題の中においてその解答を我々に与えている。」

社労同第五回大会(『赤光』四十四号)では次のように言っている。「こうした同盟を救つたものはマルクス・レーニン主義、毛沢東思想であつた。(中略)それは革命理論における実践活動の能动性を説明するものであり、統一戦線論を豊富化し、不断革命論と革命発展段階論とその結合を明らかにし、人民戦争理論を創造した。同盟は、かかる毛沢東思想と多くの作風上のすばらしい教訓に導かれて、新たな革命理論(毛沢東思想の日本革命への応用)、革命組織建設に邁進する大道につくことができたのである。」

以上のことで明らかかなように毛沢東主義を掲げたのは、過去の本質的総括からというよりも、実践の能動性を鮮明に分析した、毛沢

たがつて組織は不断にこれと闘うことなしには、大衆と結合することができず、組織も生きのび成長することができないこと。

(四) (党)組織が大衆と結合しようとするとき、これを阻止する誤つた行動・思想(左・右の色々な形で存在する)は結局のところ小ブルジョア思想の侵入によつてなされるのであるから党建設の中心軸として思想方法・工作方法(指導方法)を重視し、党の中に相互批判・自己批判の正しい作風がないならその党は必然的に死滅すること。

(四) 整風の中において(入管の中でも)自己批判は粗成乱発されたが未だ自己批判した人がよくなつたとあまりきかない。なぜなら自己批判は、イ・徹底した分析・調査のもとでおこなわれねばならず、ロ・自己批判を実践的に検証すること、の二点がないかぎり、俗悪なものであり、本人も客体も相方のためにならない。二点がないかぎり自己批判・相互批判も美調で「なれあいか又は感情的なもの」で終り、得るものはないからだ。

(四) 自己批判の目的は階級闘争の発展のためであり、自己のプロレタリア化と結合しなければならない。自己批判を何か、一時的な経過的な事後処理と断じてみなくてはならない。自己批判はあくまで全体の教訓とせねばならず、自己改造の開始であり、そのためでなければならぬ。(注三)誤りは弁証法的なものであるがゆえに、ある種の成功や真理とわかちがたく結びついており、成功の中からも三分の誤りを見出し、教訓化するよう心がけねばならない。

以上五点の教訓から次の結論を引き出すのである。この敗北の教訓を正しく止揚するためには、一切の政治路線・一切の活動方法を

東哲学を適用し、毛沢東の言葉で社会を解釈してみるのに止まつていたと考えられる。このことは「毛沢東主義万才」「思想方法・工作方法の特別決議」の内容を見ると明らかである。即ち文字通り毛沢東の『実践論』『矛盾論』を説明したに停まつており、では具体的にどのようにして思想方法・工作方法を創り出すのか?どんなことに注意し、どんな判断基準に基いて活動をすれば、毛沢東思想を教訓化することができるのかについては明らかにされていず、又努力もされていないのである。確言するならば、毛沢東思想を認めたいという観点は正しかつたが、毛沢東思想を日本階級闘争の実践過程の中で生かすのではなく、毛沢東語録そのものの中に発展を見出そうとしたところに我々の悲劇が存在していたと言えよう。

我々はこの間の闘いの中で次のことを知つていくがゆえにとりわけ思想方法・工作方法を強調するのである。

(一) 革命組織であればいかなる権力の弾圧を受けようとも崩壊はしない。一番恐ろしくかつ致命的なのは自己崩壊でありMLもしかりであつた。(注一)自己崩壊とは組織の全面的頹廃であり墮落の結末である。

(二) 組織が拡大し、大衆に影響力が増大するにつれて(ある意味で大衆に接近すること)組織内部においても、又組織対大衆の関係においても、権力機構と自発性、民主と集中、規律と自由、党活動と大衆工作との対立が激化し、矛盾が強まり、その止場(解決)を誤れば官僚主義を生じさせ、命令主義がはびこり、二者択一(決戦か職場か)の活動方法になるか、又は追随主義・セクト主義等々を生じせしめるという現実が旧ML同盟であり、各新左翼党派の内実であつたと考えられる。し

マルクス・レーニン・毛沢東主義の一貫した思想方法・工作方法で実践することであり、プロレタリア革命観(唯物弁証法)を日常的活動の中で血肉化するよう意識的活動を展開することである。

同時に我々は、思想方法・工作方法に基づく党建設のために、過去の総括の中から、民主集中制を次の内容で実践するものである。

(一) 民主集中制は思想方法・工作方法に基づく党建設路線の重要な構成部分である。

党の建設とはなによりもまず思想建設、つまりマルクス・レーニン・毛沢東主義の革命路線で党員を教育し、党員を武装させ、広範な党員の思想を革命化させることである。「党員に民主生活とはどんなものであり、民主制と集中制の関係はどんなものか、また民主集中制をどのように実行するかを理解させる」「民族戦争における中国共産党の地位」ことこそ党の思想建設の重要な内容でありプロレタリア階級の民主制とプロレタリア階級の集中制との結合は真のマルクス・レーニン・毛沢東主義政党がその他のすべての政党と区別される重要な目じるしのひとつであり、党が強化・発展し、強固な戦闘力を持つていくことの現われである。

(二) 全党の積極性を發揮し団結を強めること。「偉大な革命を指導するには立派な党がなければならないし、多くのもつとも優秀な幹部が必要であり、この目的を達するには党内の民主が必要である。党に力をもたせるには、党の民主集中制の履行によつて全党の積極性を發揮させなければならない。全党の積極性の發揮によつて大量の幹部をきたえあげ、セクト的觀念の残り

かすを一掃し、全党をはがねのように固く団結させよう」

(「何千何百の大衆を抗日統一戦線に参加させよう」)

(イ) 正しい意見を集中し、誤った意見を批判し、思想闘争を展開すること。

正しい意見を集中統一し、誤った意見を批判することをしなければ、団結を強めることができず互に団結を弱めることになる。(矛盾をおおいかくし、闘争を解消しては団結は強化されない。)

(ニ) 党の一元化された指導を強めること。民主集中制を実行しないと、どうしても主観主義におちいり、少数の人だけに頼るか又はなるがままにまかせ、自己流に活動するのを見のがすことになり、これはみな党の路線・方針・政策の貢献に不利であり、思想方法・工作方法を点検し、指導をすることができなくなる。以上のことを前提として、思想方法・工作方法をどのように会得しようとしているのかを論じてゆきたい。

(一) 我々は何故に思想方法・工作方法に基く統一と団結を強調し、その会得に向けて努力するのか

なぜならば「人間の魂を改造する革命」を追求し、真に「救国済民」のための日本社会主義革命への道すじを切りひらき、永遠に変色しない不断革命を創出するべく、思想方法・工作方法に基いた組織と団結を創り出すためであり、我々が追求しているのは「一付の政治革命ではない。すでに歴史的には一九五四年スターリン以後開始されるスターリン批判・それに併行して行動されたハンガリヤ革

命、そしてフルシチョフの平和共存路線に対して中国共産党が主導的に展開した中ソ論争、以向いわゆるマルクス主義者に問われ続けているのは「革命」そのものではなく、「いかなる革命なのか?」「革命の内実は何なのか?そして内実を規定するところの革命に至る路線の過程はどのような道すじを歩むのか?」であった。すなわち共産主義の名のもとに、プロレタリアート・被抑圧人民を収奪する政治権力を革命と称し社会帝国主義をつくり出すのか、それとも「人間の魂を改造する革命」をやりぬくのかが問われているのである。

では我々は「人間の魂を改造する革命」の道程、または目安を得たのか否か?それは一九三〇年代のドイツ革命を始めとする資本主義国家内の革命の敗北にもめげず、持久戦の中で革命に勝利し、プロレタリア文化大革命に至る中国革命であり、今日の世界階級闘争を先導している、ベトナムを始めとするインドシナ革命戦争で見てきた。

とりわけプロレタリア革命は過渡期における階級闘争の理論・方法を作り出したものであり、それはまさにロシア革命の不十分性を総括し、レーニンを質的に発展継承せしめたものであり、世界プロレタリア革命の大きな前進であった。

ではこの質的前進は中国共産党の中でどのように準備されたのであろうか。

それは一九五三年から始まった第一次五年計画の終つた一九五七年からである。当時の状況は「所有制の面」の基本的勝利・反右派闘争における思想面での勝利で、多くの指導者(人民の多くも)は、もはや激烈な階級闘争はないと考え、あとに残されたものは

段階の勝利としてあつた九全大会の政治報告である。

総じてプロレタリア革命で明らかにしたことは、

(一) 階級は単なる経済的概念ではない。より重要なものは、それがやはり政治的概念だということである。搾取階級は数千年にわたる支配の過程で、経済面での支配的地位を占めてきたばかりでなく、また政治・思想・文化の面での支配的地位も占めてきた。階級闘争には政治闘争・経済闘争・思想闘争といったいくつかの形態が含まれており、しかも政治戦線と思想戦線での闘争よりもはるかに残酷である。

(二) 階級闘争にはなお反復があるであろう。我々は絶対に階級闘争を忘れてはならず絶対にプロレタリア独裁を忘れてはならない。

(三) 新しい社会の経済的基礎に照応して上部構造を改革する革命的事業がプロレタリア革命の形態をとり、また革命的大衆闘争の過程で実権派内部での思想上の誤りと路線上の誤りを区別でき、この革命は大衆が決起し、直接に権力を奪取し、掌握する闘争によつてのみ成功する。

四 プロレタリア独裁権力過渡期における政策は、敵一味方の区別と人民内部の矛盾という二種類の矛盾を正しく処理する問題である。

以上の四点が主要なものであつた。

ではなぜ中国革命は変色せずプロレタリア革命に発展できたのだろうか?それはとりもなおさず、中国革命の持久性である。一九二五年以後、まったく寸分の休みもなく革命が続き、解放区においてはもつとも

「社会主義」建設であり、生産力の拡大であると考えていた。(中共八全大会での劉少奇の政治報告をみよ)そこから社会全体に「政治を問わない傾向」「思想を問わない傾向」が出はじめ、各人が与えられた「場」での専門的知識・技術を会得することに専念するようになり、全体を考えず、個人・自由主義が必然的にはびこりはじめた。「紅と專」をめぐる論争を見よ!毛沢東はこの傾向に対して疑問を感じ「本当に階級闘争は終つたのだろうか?」「(「人民内部の問題を正しく処理する問題について」等々の文献を見よ!)という本質的問題を提起したのである。

その問いは次のようなことを内包しているのである。

(イ) 国際的階級闘争が消滅しないのに国内の階級闘争が消滅することができるか?

(ロ) 国家権力の交替(ある階級から他の階級へ)を含まない階級闘争がありうるか?

(ハ) 国家権力以外の権力をめぐつての階級闘争がありうるのか?
(ニ) 階級闘争の諸形態にはどういふものがあるか。文化思想戦線での階級闘争とはどういふことか?(過渡期における階級闘争の理論・方針・方法はいかなるものなのかということも含まれる。)

(ホ) 階級とは何か?それは何を指標として区分するのか。

(ヘ) 諸階級のうち敵階級はどれか?敵ではない諸階級はどのように区分されるのか?

(ト) 民族とは何か?共産主義社会において国境はなくなるのか?民族の異なりはなくなるのか?

(チ) を除いてすべてに解答または方向を示したのは、プロレタリア革命の

日常的な裁縫や耕作や教育がそのまま革命行動でもあるという現実。それも常に武装闘争を打ちぬくという現実が続く中で革命が日常化していったのである。

すなわち二重、三重に抑圧され搾取されている貧農をプロレタリアートへ改造してゆく闘いが即中国革命の闘いであり、資本主義的發展を経ないがために社会主義建設の主力となる工場労働者がきわめて少数であるがために数億の貧農を中心とし、社会主義国家建設者へと打ち鍛え、プロレタリアートへと思想改造することが即中国革命の過程であり、この道以外に中国革命は勝利することは不可能であつたのである。

そうであるがゆえに、毛沢東は、思想方法・工作方法・作風(規律)を一番重要視し、粘り強く、しかも系統的に準備された整風を実行する中で党内及び解放軍のプロレタリア化を大衆的にきわめて意識的に備へ、成功していったのである。(毛沢東の一連の著作を見よ！思想問題をいかに重視しているか明確である。)

中国にあつては、農民が主体であり、この現実を無視する革命路線は李立三的小ブルジョア主義か、又はトロツキズムの待期主義かそれとも、スターリンのブルジョア革命論でしかないのである。

革命後の国家建設においても、農業基礎・工業主尊という方針通り、あくまでも農業の社会主義化を軸に多数の農民をいかに革命主体へと改造するのが追求されている。ここにこそ今日中国がプロレタリア文化大革命をへて世界革命の主体者ならんとしていた姿へ前進したカギがあり、一方ロシア革命後変色した社会帝国主義国がなぜ発生したのかの岐路があると考えられる。

すなわち、ロシア・東欧では革命がブルジョアジーと地主を打倒

しないのである。

このことはとりもなおさず自らを「世界プロレタリアート」(ベトナム人民を始めとする被抑圧民族の革命戦争を支持し、ベトナム人民と同じ思想的地平に立てること)として改造しうる革命路線を實踐することであり、革命後においても、工業化されていない国々に「人民に奉仕する」思想のもとで全面的に協力できる革命主体へと自らを闘いとることができるといふことがすでに問われているといふことである。(注二)

我々は世界革命の中で問われている自らの任務に答えねばならない。支配者階級はあらゆる手で闘いを体制内化するであろう。我々の闘いは

- (A) 日常生活と切り離されず
- (B) プロレタリアート・被抑圧民族団結せよのスローガンの中で
- (C) 多くの勤労人民と団結し
- (D) 常に武装闘争を創出し
- (四) 持久的に着実に
- (四) 単なる政權交替でなく政治・思想・文化・経済のあらゆる方面の闘いを重層的に創出するよう闘いなければならず、日本革命は持久戦で展開されるものと考ええる。

我々は中国革命がそうであつたように、徹底的に思想方法・工作方法をブルジョア的、小ブルジョア的のものからプロレタリア革命闘いに打ち抜かれたものとしなければならない。

(注一) 整風の過程の論争が政治過程批判とか、地区が、全国中央政治闘争が、はたまた理論か実践かという形になつたのも、端的に毛沢東主義をどのレベルで認識していたのかを示

し、彼らを収奪するところで終り、そこから階級をなくす闘い、すなわちプロレタリア独裁強化へと前進せず、したがつて必然的に革命闘争は停滞し、農民の小所有意識や、小ブルジョアインテリの非プロレタリア思想と併合し、しだいにプロレタリア思想は空洞化され、ブルジョア権力の一変種たる社会帝国主義の発生要因を作り出すのである。

以上のことを認めるとするならば我々は断固として思想方法・工作方法を重視した党建設・革命路線を發展せしめねばならないことがわかる。日本の情勢を分析するならば、中国とは相反して、客観的な労働者は他のどの階級よりも量的に多数であるが、しかし自らを革命主体たるプロレタリアートとして自覚している労働者があまりに少ないという現実が横たわつており、今後さらに日帝の帝国主義化政策の中でプロレタリア感情をさらに空洞化し、市民・国民化しつつ抑圧民族としての日本民族として確立してゆくものと考えられる。

したがつて日本革命の過程とは即、ブルジョア化された労働者を革命主体たるプロレタリアートに改造する闘いでもあり、きわめて意識的に、思想方法・工作方法・作風(規律)をプロレタリア化することに努力しなければ日本革命に勝利することはできないということになる。

しかも世界革命の地平は、すでにプロレタリア文化大革命を経過し、プロレタリアート・被抑圧民族が、帝国主義を攻囲する。時代に入つているのであり、日本革命も当然ながら、この中に正しく位置付けなからず、革命は成功しない。即ち世界プロレタリア文化大革命の一部分として日本革命を闘い取らないかぎり、革命は成功

している。

(注二) 我々のこれまでの闘い方、革命観を見ておこう。

総じて主観的にどうあれ、客観的には非日常的な連続性のないカツコ付きの政治行動を「革命」行動と考えていた。反論があるだろうか？反論があれば結果を見給え！多くのかつての戦士が闘いを放棄してはいないか。もし、闘いの中で自分の思想が変革されているならば、あらゆる困難があるうともかならず矛盾を解決し、一番有効な闘いを行なっているはずである。われわれの闘いは思想方法・工作方法を變革する連続的闘いでなく、主に小ブル特有な、一時的、その場しのぎの「根性」主義にしか他ならず、「根性」を維持し、または「根性」を見せる(強制する)条件がなくなれば別人のように変質することが可能であるのだ。

また多くの人が今回の整風の中で「生活感情から生まれる闘い」「闘いの日常化」を唱えたがその実多くの人が「小ブル的生活」を革命化するのでなく、「生活の中に革命を没しめし」残つたのは風化した小ブル感情のみであつた現実をとくと見てきている。我々はこの敗北の教訓を生しく生かす時に来ていると考える。

(二) 思想方法・工作方法

とは何か

思想方法・工作方法とは何か、またそれをどのように理解しなければならぬのか。このことを整理しておこう。思想方法・工作方法

法とは根本的には認識論の問題である。認識論とは何か？それは弁証法的思考方法、実践の問題についての理解の問題である。

弁証法とは「物の分析法」「認識の方法」である。毛沢東は「分析」という方法は弁証法的な方法である。分析とは事物の矛盾を分析することである。生活をよく知らず論じている。矛盾を本当に理解していなければ当を得た分析をすることはできない」（中国共産党全国宣伝工作会議における講話）と言っている。

もう少し考えてみよう。事物には必ず矛盾がある。矛盾そのものは放置されれば何の変化も起さないが、それには外的要因が何らかの形で加えられれば必ず変化を起しながら、外因も加えて常に変化し、かつ発展をとげるのである。すなわち、この矛盾を見つけ出し、内因をさぐり、外因をさぐり止揚する手段が弁証法である。矛盾の止揚は一般に対立物の統一と言われており、毛沢東は「事物の矛盾の法則、すなわち対立面の統一の法則は自然および社会の根本法則であり、したがって思维の根本法則でもある」（矛盾論）といっている。思想方法の会得とはまさにこの弁証法的思想方法の確立のことであり、正しい工作方法とはこれの具体的応用のことである。弁証法的思考の確立（作風化）によつて初めて事物を固定的にみるのではなく、事物の特有の關係において思考することができ、あらゆる面にそれを活かすことができる。われわれは諸活動において、物事を分析し矛盾をつかみ、解決する時に次の事に注意しなければならぬ。それは主要な矛盾をつかみ、斗争の方向をどこまでも、しっかりと把握することであり、さまざまな副次的矛盾の爲に目をそらし斗争の大方向をそらしてはならないことである。毛沢東は「どのような過程を研究するにも、それが二つ以上の矛盾

の存在する複雑な過程であるならば全力をあげてその主要な矛盾を見出さなければならぬ。その主要矛盾をつかめば、すべての問題はたやすく解決できる。ところが何千何万という学問家や行動家は、この方法が理解できないために五里霧中に陥入り核心が見つからず、したがって矛盾を解決する方法も見つけられない」と言っている。主要矛盾を正しくつかみ取るよう注意を払わなければ、正しい活動はできないのである。

われわれは、あらゆる政策を執行するにあたって弁証法的思考方法をおこなわなければならず、この思想方法をもつて、われわれの工作方法を強固なものとしてゆかねばならない。そのためには「実践論」「矛盾論」を一般的・抽象的に学ぶのではなく、具体的活動と結合させ、その「活学活用」つまり「運用」に思い切り力を注ぎなければならぬと考える。われわれは以上のことを確認した上で、とりわけ、あえて「経験を真剣に正しく総括する必要性を提起する」ものである。われわれの闘いを前進させるためには、過去と現在の経験を総括し、その総括した視点に基づいて、われわれの活動を能動的に切り拓いてゆくという作風を確立しなければならぬ。多くの活動家の中には経験をうまく総括できないというよりも、それ以上に経験を総括するということの重要性がわかつてない。あるいは、理解しようとして誤った傾向が未だ色濃く存在していると考えられる。この誤った観点は、とりわけ現在が、われわれの闘いの次の新たな質の転化に向け準備している時期にあたり、決定的な誤りである。われわれは正しく経験を総括し、敵権力の弾圧から運動・組織を守り、発展させ、正しく革命の道すじを歩まねばならないと強く考

える。経験を総括するとは次のことを会得し、実行することである。つまり、「実践を通じて真理を発見し、さらに実践を通じて真理を裏返し、真理を発展させる。感性的認識から能動的に理性的認識に発展し、さらに理性的認識によつて能動的に革命的実践を指導し、主観的世界と客観的世界を改造する。実践・認識・再実践・再認識」という、この形態が循環往復して無限にくり返され、実践と認識の内容は、一循環ごとに、より一段と高い段階に進んでいく。これが弁証法的唯物論の全体であり、これが弁証法的唯物論の知と行の統一観である。（実践論）つまり、経験を総括するとは、実践を通じて、認識を豊富にし、理論を発展させ、路線と政策（戦略と戦術）を一層具体化し、現実化し、物質化することに他ならないのである。

(三) 正しい思想方法・工作方法を会得するためには、いかなる活動方法（工作方法）を用いばよいのか？

また常に活動上において注意し、頭に入れておかねばならないものは何か？

経験を総括するにはどのような点に注意し、総括すればよいのだろうか？

(指導方法の若干の問題について)一九四三年六月一日論文を必読されたし。

毛沢東はわれわれに「指導するには方針・政策を決めるだけでなく、正しい活動方法も決めなければならない。正しい方法・政策があつても活動方法をなおさりにすれば、やはり問題がおこる」と教えており、また「われわれは任務を提起するばかりでなく、任務を達成する方法をも解決しなければならない。われわれの任務が川を渡ることであれば、橋か船がないと渡ることができない。橋か船

の問題の問題を解決しない限り、川を渡ることが空念仏におつてしまふ。方法の問題を解決しない限り、任務もまたでまかせのおしやべりにすぎない」とも教えている。

何はともあれ工作は綿密にすべきである。綿密さが必要であつて粗雑であると往々にして間違いを起すものである。われわれはどんなことに注意を払わなければならないのだろうか？

以下、箇条書きに整理してみよう。

(A) 革命の総路線を点検するとき、及び全面的（本質的）総括が必要なときに適用し、革命家であろうとするならば、常に念頭に置いて活動することが必要な大前提的な項目について。

- (イ) マルクス・レーニン・毛沢東主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践とを結びつけるといふ思想を堅持していたか否か？
- (ロ) マルクス・レーニン・毛沢東主義の世界観を持っていたのか否か？
- (ハ) 正しい思想方法・工作方法を持っていたのか否か。
- (ニ) 武器と人との關係を処理するときには人の要因を第一に置くこと。
- (ホ) 政治工作とその他の各種の工作との關係を処理するときには政治工作を第一に置くこと。
- (ヘ) 政治工作の中の事務的工作と思想工作との關係を処理するときには思想工作を第一に置くこと。
- (ヘ) 思想工作の中の仕事からくみとつた思想と生きた思想を処理するときには生きた思想を第一に置くこと。

- (ニ) 正反面の歴史的経験の総括を追求していたのか否か？
- (ハ) 階級分析が科学的になされたのか否か？
- (ロ) 正反面の歴史的経験の総括を追求していたのか否か？

(B) 発展段階に即した正しい戦術(方針)が取られたのか否か?
(C) 学習する態度はどうであったのか?

- 一、大衆路線を堅持することができたのか否か?
- 二、おごり・たかぶりを戒しめることができたのか否か?
- 三、全面的でなければならず、一面的であつてはならないこと。
- 四、事物の正面(主要な側面)を見ると同時にその反面をもみるようにせねばならない。

(D) 現実の問題をみると同時に予測せねばならないこと。
五、民主集中制を堅持すること。

六、党内(革命派内)斗争を正しく行なうことができたか否か?
七、団結・批判・団結

八、人民の軍隊を創出する努力があつたのか否か?
九、プロレタリア国際主義を持つていたのか否か?

以上を八大項目と称している。

(B) 各個別単産の活動及び日常的活動における項目について。

一、指導的な人たちに對する思想工作をしつかりとつかむこと。

二、指導グループがマルクス・レーニン・毛沢東主義を活学活用し、思想方法・工作方法の革命化に努力せねばならないこと。

三、点(典型として選ばれた基層単位)をつかむこと。指導者は点をつかむことによつてナマの材料を手に入れ、運動を指導しなければならぬ。点と面を結合させ、面の問題を点に持ち込み、点の問題を面におしひろげるようにしなければならぬ。

四、両端をつかんで中間を導く指導方法を取る。どんな状況にも両端、すなわち先進と立ち遅れがあり、その中間状態が多数を占めるものである。両端をしつかりとつかんで中間を導く。

なくなる。新しい任務が押しよせてくれば、みんなの心は、どうやつて新しい任務を完成するかにほしるだろう。

(C) 紅(思想的に共産主義に徹すること)と専(専門的な知識と技術を身につけること)

政治と業務の関係は二つの対立面の統一である政治を問わない傾向は必ず批判しなければいけない。内実のともなわなからつばな政治家に反対するいつぼう、他方、方向を見失う実務屋にも反対しなければならぬ。政治と経済の統一、政治と技術の統一、これは少しの疑いもなく、永遠にそうである。これこそ、紅であり専でもあることである。

六、大衆と共に問題の解決にあたること。

大衆の意見に對しては、しんぼう強く終りまで聞き、それについて考えねばならず、自分の意見と別の意見を聞く、腹を立てたり、むきになつたりしてはならない。(徹底した討論をやリ、矛盾をつかみ、正しく解決するためである。)

七、指導者と大衆とが直接に接触することを忘れてはならないこと。

革命を真に希望する人々の生活感情を知り、共に解決する態度を堅持すること。現場の調査方法は「馬にのりながら花をみる」式と「馬からおりて花をみる」という二つの方法を取るべきである。

八、指導者(相対的なものである)は、いつでも罵倒される準備をしておかなければならない。人々の罵倒が正しければ、われわれは誤りを正さねばならない。罵倒がまちがつておれば、とくにそれが中傷であれば、必ずキ然とした態度を取り、しかる

これが弁証法的方法であり、両端をつかみ、先進と立ち遅れをつかむことである。(先進に依拠し、中間と団結し、立ち遅れを励ます指導方法のこと)

四、三分の一をつかむこと。

点から面へと、いつべんにひろげてはならず、全般的計画を立て、まづ三分の一をしつかりとつかみ、それからその他の部分にひろげてゆく活動形態をとること。

五、全体に考慮を払わねばならない。すべての活動は「人民に奉仕する」というプロレタリア戦略思想から出発しなければならず、この観点を持つてすべてを観察し、すべてを点検し、実行に移さねばならない。

(A) いかなる活動任務でも一般的・普遍的な呼びかけなければ、広範な大衆を立ち上らせることはできない。だがもし、一般的な呼びかけにとどまるだけで、指導者が自分の呼びかけた活動を具体的に解決することもしなければ、その呼びかけは無に帰する恐れがある。(方針の提起も普遍性と個別性の結合したものでなければならぬ。共産主義者の任務である。「なぜならば、共産主義者は労働者階級の直接当面する目的と利益とを達成するために闘うが、しかし現在の運動の中にあつて同時に運動の未来を代表する」からである。)

(B) 不断革命。われわれの革命は次から次へと続く。われわれの革命は戦争と同じで、一つの戦争で勝利を治めたのちは、ただちに新しい任務を提出しなければならぬ。このようにすれば、幹部と大衆が常にあふれる革命的情熱を抱き、おごりたかぶる気持がなくなり、おごるうにもおこつて居る暇が

のちに調査し、批判しなければならぬ。そうした状況のあとでは決して風まかせになびいてはならない。潮流に逆らう何ものをも恐れない勇気がなければならぬ。この点については、すでにわれわれはそれなりの試練を経ている。

九、マルクス・レーニン・毛沢東の著作を軸とした学習会を立案し、正しく運営すること。的があつて矢を放つように、問題意識をもつて学習会を運営しなければならぬこと。

一〇、経験交流会を開くこと。
いろいろな人がいろいろな活動をしているが、それらの経験から学びとる必要があり、自らも人々に経験を正しく(正・反面)伝えることが責務であること。こうした経験は具体的でしかも生き生きしており、一番説得力があるのである。

註：経験交流会は単なる報告会ではなく、思想方法・工作方法上の教訓として互いに学び合うことである！誤解なきよう。

一一、数を少なく、質を良くすること。
会議・文書・報告・統計等は大いに簡素化しなければならぬ。

(A) 会議を開く方法は、資料と観点の統一である。資料と観点を切りはなし、資料を語るときに観点がなく、観点に基づき語り方に資料がなくて資料と観点がバラバラというのは大変まずい方法である。山のような資料をもち出すだけで自分の観点をもち出さず、何に賛成し何に反対するかをはずきりいわない。こうした方法はなおさら悪い。資料を使つて自分の観点を明らかにすることを修得しなければならぬ。資料

がなくてはならない。しかし、必ず明確な観点があつて、これらの資料を支配しなければならぬ。資料は多くはいらない。問題を説明できればそれでよいのである。(一羽あるいは数羽の雀を解剖すればそれで充分で、そんなに沢山必要でない) 自分は豊富な資料を握っているべきであるが、会議では典型的なものだけをとり出すのが大切である。会議を開くのと大著をものするのではちがうことを理解すべきである。

(四) 一般的にいうと、数時間という短い時間内に、人々にもりだくさんの資料、もりだくさんの観点を受け入れさせようとすべきではない。しかも、これら資料と観点には、人々は日頃あまり接していないのである。一年に数回、機会を見つけて、日頃あまり本来の事務に接しない人々に本来の事務に接してもらい、必要にあつた原資料または未成品を与えるべきであつて、ある朝、突然に完成品を人の面前に並べるようなことはすべきでない。こぬか雨を降らせるべきであり、数時間内に数百ミリの大雨はいけない。「押しつけられて訓練を受ける」制度はできるだけ廃止せねばならず、「押しつけられてサインする」やり方もできるだけ減らさなければならぬ。お互いに共通の言葉を持つとすれば、まづ必要な情報知識がなければならぬ。

(五) 文章・文獻はいづれも確実性・明瞭性・生動性(生き生きしていること)の三つを備えるべきである。確実性は概念・判断・推理の問題に属し、これらはみな論理の問題であるとともに、ことば(詞章)の問題でもある。現在、多くの文獻の欠点は、第一に概念が不明確なこと、第二に判断が不適当

なこと、第三に概念と判断を用いて推理する際、論理的に欠けること、第四に、ことばを大切にしないことである。こうした文獻を読まなければならぬのは大変苦痛で、精神を消耗しながらも得るところがない。こうしたよくない風潮は必ずや改めねばならない。

一三、ゆとりを残すこと。

戦争をするには予備隊が必要であり、暮らしてゆくには備蓄が必要であると同様に活動にも必要なゆとりを残すようにしなければならない。ゆとりがないと受け身の立場に立たされるものである。

一四、実際の効果を重んじること。

地道に活動にうちこみ、計画をたて、手がたく成果のあるような系統的な活動にならねばならない。うわべだけを飾りだしたり、その場しのぎの活動をやつてはならない。

一五、是非とも整風を最後までやりぬき、正しい思想方法・工作法の会得に努力せねばならず、その(整風の)方法は「斗いながら整風をやる」ことであり、斗争をやりながら整頓すること、やれるだけでなく、非常にすばらしい効果が上がるのであり、常に整風を念頭におかなければならないと考える。

以上を十四注意項目とする。総称して、八大項目・十四注意項目というのであり、十分、念頭に入れてもらいたいと考える。

註：八大項目・十四注意項目の設定については、毛沢東同志の全著作(思想方法・工作方法の論文)と人民日報(一九六九年十一月五日付)の社説「活動方法に注意せ

よー」及び「工作方法六〇カ条」(一九五七年)を軸に検討し、われわれの活動の経験をもとにして決定したものである。

われわれは政治方針を工作するとき、常にこれらの項目を軸としつつ工作をし、経験を総括し、しだいにプロレタリア革命観を会得するよう努力するものである。

これら項目は決して新しいものでもなく、当然なるものを整理したものにしかならない。

われわれは地道に実践してみようということを唱えるものである。以上をもつて第二章を終える。

第三章 日本革命の性質を説明するにあたって

第三章は、我々の過去の総括から、即ち、非系統的なその場限りの運動ではなく、持久的な首尾一貫した活動をやりぬくために書くものである。そうであるが故に、我々の唱えている日本革命とはいつたような革命なのか、だれを打倒し、どのような権力を打ちたてようとしているのかを分析するために論じるものである。我々は敵を明らかにし、友を定め、同志と共に闘いぬくためには、当面する日本革命の性質を正しく分析しなければならぬ。第三章はその覚え書であり、今後の活動の中でより深くしてゆきたいと考える。

まず正しい観点を持つために毛沢東から学びとつてみよう。毛沢

—その覚え書第一稿かえて—

東は『中国革命と中国共産党』の中で次のように中国革命の基本問題を分析している。

(注) アルファベットの、(a・b等々)は毛沢東から学ぶべき点を整理したものである。

(a) 中国社会の性質の分析 ↓ 半植民地・半封建の社会 (抗日戦争中は植民地・半植民地・半封建の性質をもつ社会)

「中国革命の対象・中国革命の任務・中国革命の原動力・中国革命の性質・中国革命の前途と転化をはつきり理解するためには、中国社会の性質をはつきり理解する以外にない。したがって、中国社会の性質をはつきり理解すること、つまり、中国の

国情をばつきり理解することは、革命のすべての問題をばつきり理解する基本的なよりどころである。』(『中国革命と中国共産党』一九三九年一月二筆)

- (a) このことから次のことが明らかになる。革命の一切の問題を明らかにするには、社会の性質をばつきり理解することであり、唯物弁証法に基いて分析せねばならず、その分析に基いて、社会の性質↓革命の対象↓革命の任務↓革命の原動力↓革命の性質↓革命の前途の順序で明らかにされるのであること。ゆえに、「先進国↓社会主義革命」後進国↓人民主義革命の見解を具体的な分析なしに、機械的にあてはめることは、全く反マルクス主義である。(この代表的なトロツキズム、スターリン主義的思考を克服せねばならない。)
- (b) 中国革命の対象(主要な敵)↓帝国主義と封建主義(帝国主義ブルジョア階級と自国の地主階級)

「現在の中国社会の性質が植民地・半植民地・半封建的なものである以上、中国革命の現段階の主要な敵はいつたい誰であろうか。それはほかでもなく、帝国主義と封建主義、つまり帝国主義のブルジョア階級と自国の地主階級である。なぜなら、現段階の中国社会で中国社会の発展をおさえ、はばんでいる主要なもの他でもなく、この二つだからである。この二つは互いに結託して中国人民を抑圧しているが、帝国主義の民族的抑圧が最大の抑圧であり、従つて、帝国主義は中国人民の第一のそして最も凶悪な敵である。」(同上)

(c) 同様、先進資本主義の革命の対象↓自国のブルジョア階級、なる規定を唯一至上のものとして、機械的にあてはめる

こともまちがいである。それぞれの国には、それぞれの特殊性が必ずあるのであつて、それを具体的に分析せずにあてはめようとするのはやはり反マルクス・レーニン主義である。

- (c) 中国革命の任務↓民族革命と民主主義革命に勝利すること。
- 「現段階での中国革命の敵が主として帝国主義と封建的地主階級である以上、現段階での中国革命の任務とは何か。それは疑いもなく、主として二つの敵を打撃すること、すなわち、対外的には帝国主義の抑圧をくつがえす民族革命、対内的には封建的地主の抑圧をくつがえす民主主義革命であつて、そのもつとも主要な任務は帝国主義をうちたおす民族革命である。中国革命の二大任務は互いに関連している。帝国主義は封建的地主階級の主要な支持者であるから、もし帝国主義の支配をくつがえさなければ、封建的地主階級の支配をつぶすことはできない。反対に、また、封建的地主階級は、帝国主義の中国支配の主要な社会的基礎であり、農民は中国革命の主力軍であるから、もし農民をたすけて封建的地主階級をうちたおさなければ、中国革命の強大な隊列を組織して帝国主義の支配をくつがえすことはできない。したがつて、民族革命と民主主義革命という二つの基本的任務は、互いに区別されるとともに、互いに統一されている。中国の今日の民族革命の任務は、主として国土に侵入してきた日本帝国主義と斗うことであり、また民主主義革命の任務は、戦争の勝利をかちとるために完遂しなければならぬものであるから、この二つの革命の任務はすでに一つに結びついている。民族革命と民主主義革命とを全く異なるこの革命段階にわけるような観点は正しくない。」(同上)

- (c) 民族解放をかちとる革命、或いは民主主義をかちとる革命が即人民民主主義革命であるとは云えないこと。前者は革命の任務であり、後者は革命の性質である。現在、殆んどの人

がこれを全く同一視し、ゴツチャにする傾向があるが、これには明確な区別が必要である。

(d) 中国革命の原動力↓プロレタリア階級が指導階級、労働同盟中心、都市小ブルジョア階級、民族ブルジョア階級の一部分。

「現段階の中国社会の性質、中国革命の任務についての分析と規定によると、中国革命の原動力は何か。中国社会が植民地・半植民地・半封建の社会であり、中国革命の対象が主として中国における外国帝国主義の支配と国内の封建主義であり、中国革命の任務がこの二つの抑圧者をうちたおすことである以上、中国社会の各階級・各階層の中で、どんな階級、どんな階層が帝国主義及び封建主義と闘う力になりうるのか。これが現段階における中国革命の原動力の問題である。この革命の原動力の問題をはつきり認識することによって、初めて中国革命の基本戦術の問題を正しく解決することができる。中国のプロレタリア階級は次のことを理解しなければならぬ。すなわち、自分自身はもつとも高い意識ともつとも高い組織性をもつ階級であるが、自分の階級の力だけでは勝利することができない。勝利するには、さまざまな異なった状況のもとで結集できるすべての革命的な階級と階層を結集して、革命の統一戦線を組織しなければならぬ。中国社会の各階級のうち、農民は労働者階級のゆるぎない同盟軍であり、都市小ブルジョア階級も頼りになる同盟軍であり、民族ブルジョア階級は一定の程度での同

盟軍であること、これは、現代の中国革命の歴史がすでに証明している根本法則の一つである。(同上)

- (d) マルクス・レーニン主義に基づき、社会経済調査を正しくやり、だれが支配者階級で、だれが被支配者階級なのかを分析するところの各階級の分析を系統的にやることが必要である。統一戦線(=革命勢力)を正しく創出すること。
- (e) 中国革命の性質↓人民民主主義革命

「我々はすでに中国社会の性質、すなわち中国の特殊な国情を知ったが、これは中国革命のすべての問題を解決するもつとも基本的なよりどころである。我々はまた、中国革命の対象、中国革命の任務、中国革命の原動力を知ったが、これはみな、中国社会の特殊な性質、中国の特殊な国情から生まれた現段階の中国革命に関する基本問題である。これらすべての点をしたので我々は次の段階の中国革命のもう一つの基本問題、すなわち中国革命の性質がなんであるかを知ることができる。現段階の中国革命はいったいどんな性質の革命であろうか。ブルジョア民主主義革命であろうか。それともプロレタリア社会主義革命であろうか。あきらかに、後者ではなくて前者である。中国社会がまだ植民地・半植民地・半封建の社会である以上、中国革命の敵がまだ主として帝国主義と封建勢力である以上、中国革命の任務がこの二つの主要な敵をうちたおす民族革命と民主主義革命である以上、しかも、この二つの敵をうちたおす革命にはブルジョア階級が参加することもあつて、たとえ大ブルジョア階級が革命を裏切つて革命の敵になつたとしても革命のほこ先はやはり資本主義一般と資本主義的私有財産にむけられるので

はなくて、帝国主義と封建主義にむけられる以上、現段階の中国革命の性質はプロレタリア社会主義的なものではなくて、ブルジョア民主主義的なものである。だが、現在の中国のブルジョア民主主義革命は、もはや、時代遅れになった旧型の一般的なブルジョア民主主義革命ではなくて、新しい型の特異なブルジョア民主主義革命である。このような革命は、いま中国およびすべての植民地・半植民地諸国で発展しつつあるもので、我々はこのような革命を新民主主義革命とよんでいる。このような新民主主義革命は世界プロレタリア社会主義革命の一部分であり、帝国主義すなわち国際資本主義と断固闘争のものである。」

(e) 「革命の性質を決定する力は、主要な敵と主要な革命勢力の双方である。革命の「任務」を規定するのは「革命の対象」であり、したがって、先進国が後進国が革命の性質を決定すると云う俗論は正しくない。我々は革命闘争に参加するの、どうかを第一の理由として革命勢力（人民）の一員かどうかを判断するものである。」

(e) 自国の革命の性質は当然ながら世界階級闘争の発展の段

階に正しく規定されるものであり、自国が抑圧民族（帝国主義国）か被抑圧民族かで世界解放闘争との関係が大きくかわるものである。このことを正しく分析しないと、排外主義か一国主義的観点におちこみ、必然的に国際資本主義・反革命に利用され革命は失敗する。毛沢東は一九一七年十月革命後正しく「中国革命及び各民族解放闘争は世界プロレタリア社会主義革命の一部分」であると規定しており、それ故に正しく不断革命の道に付いたものであろう。今日においては、反帝国主義は更に強まれども、断じて弱めてはならないと考える。

(f) 中国革命の前途↓社会主義革命

「現段階の中国のブルジョア民主主義革命が一般の旧型のブルジョア民主主義革命ではなくて、特殊の新しい型の民主主義革命であり、新民主主義革命である以上、しかも中国革命が、二〇〇の三〇年代から四〇年代にかけての新しい国際環境、すなわち社会主義の高揚、資本主義の低落という国際環境におかれ、第二次世界大戦と革命の時代におかれている以上、中国革命の終極の前途も、資本主義的なものではなくて、社会主義的・共産主義的なものであることは疑問の余地がない。……中略……中国革命の結果全体としては、一面では資本主義的要素の発展をみせ、もう一面では社会主義的要素の発展をみせる。この社会主義的要素とはなにか。それは、全国の政治勢力の中で、プロレタリア階級と共産党の比重が増大することであり、農民、知識人、都市小ブルジョア階級がプロレタリア階級と共産党の指導権をすでに認めたと、或いはそれを認める可能性が

あることであり、民主共和国の国営経済と勤労人民の協同組合経済である。これらはすべて社会主義的要素である。そのうえ国際環境の有利なことが加われば、中国のブルジョア民主主義革命が終局において資本主義の前途をさげ、社会主義の前途を実現するという極めて大きな可能性がどうしても生れるようになる。」

「つまり中国革命は、ブルジョア民主主義的性質の革命、現在の段階の革命、現在の段階の革命と将来の段階の革命という二重の任務を持っている。この二重の革命の任務に対する指導は、いずれも中国のプロレタリア政党、中国共産党の双肩にかかっているものであり、中国共産党の指導なしには、どのような革命も成功をおさめることができない。」（『中国革命と中国共産党』）

(f) 人民民主主義革命を社会主義革命に「転化」する（すなわち人民民主主義独裁をプロレタリア独裁へと発展させる）には一貫したプロレタリアートの指導（共産党の指導）が必要であり、それなくして「転化」は不可能である。我々は過去の様な論争が存在し、それなりの未整理なものがあつた。それは「人民民主主義革命か社会主義革命か」の問である。

この問も本質的には、主要な敵と主要な革命勢力から正しく革命の性質を分析しない所であり、とりわけ革命勢力の統一戦線に参加する階級の分析から革命の性質を分析しないところに主に原因がある。人民民主主義独裁は本質的にはプロレタリア独裁である。これはまったくその通りであるが、「本質的に同じ」ということは「まったく同じ」ということではない。同一視していい場合もあるし、区別しなければな

らないこともあり、普遍と個別の関係である。プロレタリア独裁とは、プロレタリア階級内部では民主主義独裁を分ち合い（プロレタリア民主主義）、ブルジョア階級には独裁を強制することである。人民民主主義独裁とは革命的階級（統一戦線）内部では民主主義を分ち合い（人民民主主義）、反革命階級には独裁をしくことである。つまり、（プロレタリア）階級独裁なのか、連合独裁なのかを明らかに区別されるが、プロレタリアートの（共産党の）強力な指導という点ではまったく本質的に同じなのである。

(f) 統一戦線の共同綱領（共産党の最小限綱領と同じもの）

が、つまりは当面の革命の性質を表わすものである。党の最小限綱領には資本主義制（私有制）一般の否定ははげしいが、最大限綱領との弁証法的結合において社会主義へと転化するものである。「このことからわかるように、中国革命の敵は異常に強大なものである。中国革命の敵には、強大な帝国主義があるばかりでなく、強大な封建勢力があり、しかも一定の時期には、帝国主義・封建勢力と結託して人民に敵対するブルジョア階級の反動派もある。従って、中国の革命的人民の敵の力を軽視するような観点は正しくない。このような敵を前にしていることから、中国革命の長期性と残酷性がうまれてくる。我々の敵が異常に強大であるため革命勢力は長い期間をかけなければ最終的に敵にうち勝つだけの力を貯えることも、鍛えあげることもできない。また、中国革命に対する敵の弾圧が異常に残酷であるため、

＜表 1＞

州・地域	1967年		1968年		1969年		1970年	
	輸出	輸入	出	入	出	入	出	入
	額	額	額	額	額	額	額	額
総	3,758,966	4,198,761	4,669,798	4,675,407	5,756,405	5,408,413	6,954,367	6,797,221
了	1,279,908	1,289,589	1,589,551	1,441,545	1,947,401	1,644,088	2,171,840	1,999,254
ヨ	598,978	635,800	682,655	676,235	866,640	743,998	1,210,838	919,700
北	1,302,605	1,502,021	1,789,269	1,633,936	2,124,701	1,858,650	2,554,038	2,478,989
アメリカ合衆国	1,084,324	1,156,348	1,471,123	1,269,858	1,784,804	1,472,375	2,138,935	2,001,448
カナダ	98,705	227,999	124,686	237,707	173,177	240,986	202,776	334,292
オーストラリア	129,166	285,266	149,865	331,667	171,217	447,619	212,054	542,770
台湾	118,136	493,52	169,785	542,60	218,289	649,86	252,150	902,76
韓国	146,505	382,58	216,955	36,587	276,179	48,214	294,543	82,429
香港	125,629	19,236	168,331	19,448	221,245	24,530	252,103	330,49
インドネシア	5,5854	70,203	52,774	90,659	84,892	148,035	113,681	229,159
イラン	27,741	190,366	49,208	227,680	56,685	294,329	64,350	358,308
ドイツ連邦	77,389	180,994	103,463	144,205	141,433	160,302	198,054	222,117
共産圏	189,077	312,582	209,433	301,449	275,213	305,262	376,261	319,494
中華人民共和国	103,786	96,998	117,185	80,709	140,689	84,434	204,796	91,374
ソ連	56,768	163,410	64,446	166,864	96,569	166,163	122,736	173,174
東欧	2,5482	38,871	19340	39196	26,502	40,772	88,375	40,051

(単位=100万円)

米帝国主義に育成され、米帝に従属している帝国主義国であり、世界反革命同盟を米帝とともに支え、内外にわたる政策を帝国主義化し、急速度に膨張している帝国主義国である。

(A) 日本社会の性質の分析について

以上『中国革命と中国共産党』をもとにして、毛沢東の考え方を整理してみた。この観点に基づいて日本社会の性質↓日本革命の对象(主要な敵)↓日本革命の任務↓日本革命の原動力↓日本革命の性質↓日本革命の前途↓日本革命の主要な方法・主要な闘争(日本革命の特殊性について分析する)の順に分析していきたいと考える。

はここから創り出さねばならないこと。

*

一歩一歩着実に根をおろし、着実に闘いをすすめていかなければならず、わめきたたり、向こうみずにあたっていくようなやり方では決して成功するものではない。」「『中国革命と中国共産党』(g) 中国社会の性質を正しく分析し、主要な敵と革命の原動力の問題をはっきり認識するならば、中国革命の戦略・戦術を正しくつかみとることができること。(武装闘争・長期性・根拠地・農村と都市等々について。)武装闘争以外のさまざまな形態の闘争の呼応がなければ武装闘争は勝利せず、失敗する。また、向こうみずなやり方では決して闘争は成功しない。我々の原則はあくまで「自己を保存し、敵を消滅し、味方を拡大する」ことではなければならず、あらゆる闘いの戦術はここから創り出さねばならないこと。

革命勢力は自分の頑強性を鍛え、発揮しなければ、自分の陣地を堅持することも、敵の陣地を奪取することもできない。従って、中国の革命勢力がまたたくまに組織され、中国の革命闘争がたちまちのうちに勝利するというのができるといような観点は正しくない。このような敵を前にしていることから、中国革命の主要な方法、中国革命の主要な形態は平和的なものではなく、武力的なものでなければならぬことも決まってくる。なぜなら、我々の敵は中国人民に平和的に活動する可能性を与えず、中国人民にはいかなる政治的な自由の権利もないからである。スターリンは『中国では武装した革命が武装した反革命と闘っている。これらは中国革命の特徴の一つであり、その長所の一つでもある』と述べている。これは全く正しい規定である。従って、武装闘争を重視し革命戦争を重視し、遊撃戦争を軽視し、軍隊に関する活動を軽視するような観点は正しくない。・・・中略・・・だが、武装闘争に重点をおくことは他の形態の闘争を放棄してもよいということではない。反対に武装闘争以外のさまざまな形態の闘争の呼応がなければ、武装闘争は勝利を得ることはできない。また、農村根拠地での活動に重点をおくことは都市での活動や、また敵の支配下にある他の広大な農村での活動を放棄してもよいということではない。反対に都市での活動や他の農村での活動がなければ農村根拠地は孤立し、革命は失敗するのである・・・中略・・・敵に対する人民の闘争を指導する戦術としては、法律・命令・社会慣習のゆるす範囲の、公然とした合法的な、利用できるすべてのものを利用して、道理があり、有利であり、節度があるという観点から出発して、

表 V

援助国	経済援助			
	1965年	1968年	1969年	1970年
合計	9,804	12,181	12,705	約 14,700
日本	437	902	1,253	約 1,800
米 国	5,181	5,414	4,402	約 6,400
英 国	965	703	1,011	
独 国	643	1,476	1,735	約 1,214
仏 国	1,244	1,608	1,602	
伊 国	239	481	782	約 665
カナダ	171	305	364	約 580

(単位=100万\$)

(A)の結論を具体的に説明するために、米帝との関係を軸に、(1)経済面、(2)政治、軍事面、(3)対外政策(外交)の三方面にわたって日帝の動向を分析して見よう。

(1) 経済面について

日帝は一九六五年日韓条約を一つの転換点とし、一九六七年佐藤ベトナム訪問に代表されるように急速に六〇年代後半から帝國主義の本質を明らかにしており、それはまさに米帝のアジアか

<表II>

対米主要商品輸入額			☆対米主要商品別輸出額		
1970年 (対米価)			1970年 (対米価)		
総 額	6,797,221	2,001,448	総 額	6,954,367	2,138,335
食 料 品	926,680	292,375	織 維 同 製 品	866,709	214,771
金 属 原 料	970,664	155,126	衣 類	166,447	98,786
原 料 品 (その他)	1,086,368	408,637	金 属 同 製 品	1,369,921	466,669
木 材	565,949	186,405	鉄 鉱	1,023,733	323,653
鉱 物 性 燃 料	1,405,969	273,874	金 属 製 品	256,918	116,580
石 炭	363,641	224,284	機 械 機 器	3,218,356	1,022,931
化 学 製 品	360,174	144,328	ラ ジ オ 受 信 機	250,166	142,998
機 械 機 器	827,167	508,173	自 動 車	481,471	192,974
そ の 他	873,622	188,976	そ の 他	687,232	274,270

(単位=100万円)

らの敗退と反比例的に進行していると考えられる。

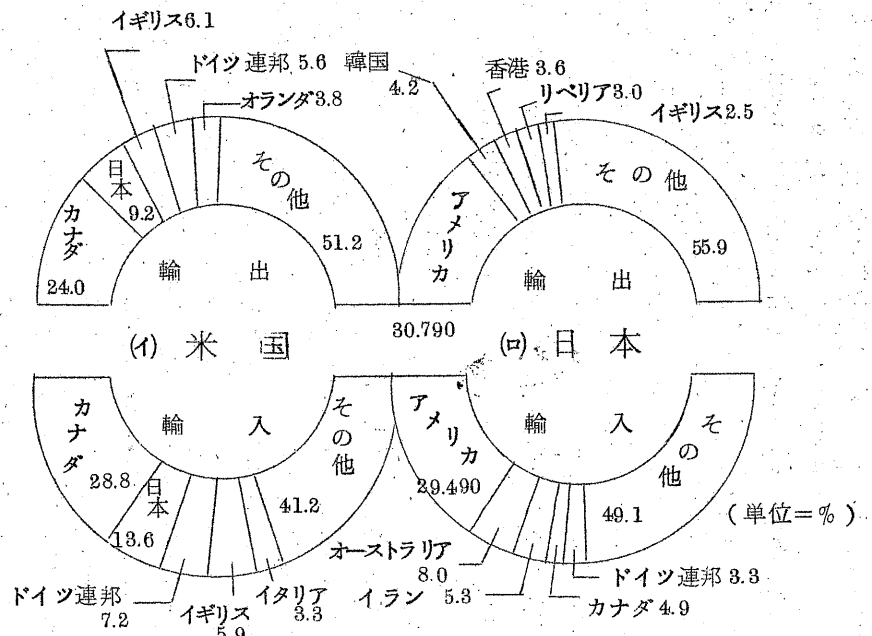
この政治動向はまさに経済面に裏打ちされており日帝は六八年を最後とし、六九年から貿易収支の黒字国に転化している。

以上のI-Vの表でわかることは、次のことである。日帝は急速に膨張しており、日帝の三大市場は米国・アジア・ヨーロッパであり、米国とアジアが最重要であるということである。それはまさに、アジアの危機は日帝の危機であり、米帝の退却は日帝の危機であるということがわかる。米帝との関係は表IVでわかるように、輸出で三〇%弱、輸入で一九%弱であり、日本の多くの製品が米国に輸出されており、米帝の景気の変動をもろにかぶる可能性があり、米帝の国際収支の大幅赤字に対して、日帝がドル安定のために積極的にならざるをえないのは当然である。又、輸入の面においても、食料及び原料を多く、米帝から取り入れているのは事実である。

しかし、以上の現象面をもって、日帝の経済の一切を米帝が支配しており、未だ日帝は戦後一貫して米帝に隷属しており、従って日本を帝國主義国であるということを確認することを恐れ、反米愛国または自主独立な民族主義的の革命観を展開することは、現象をみて、本質を見ないに等しいのである。

日帝は明確に一九六七〜六八年を転換点として、より一層日帝独自の勢力圏を作り出しており、韓・台を始め、アジア各国(帝國主義の側に組みする国々)においては、米帝との共同支配又は日帝の単独支配へとつき進んでいるのである。

そこで米帝との経済面における内容がどう戦後の中で変化してきたのかみなければならぬ。確かに現象的には日帝の輸出入と



表IV 1969年度日本・米国の

主要相手別輸出入

もに三〇%近くの比重を米帝は持っているが、その内容は、五〇年代又は六〇年代前半の軽工業中心から明確に重工業中心に移行し、決して後進的な内容ではなく、攻撃的な内容に変化しており、米帝においても表Ⅳ(イ)でわかるように、日帝に対する比重はさらに強まっているのである。この日帝の攻撃的な強さを示しているのは最近の現象をみれば明らかである。もし本当に五〇年代のように米帝に従属している内容・即ち、軽工業的であれば、日帝は米帝のドル防衛政策で即死するであろう。たしかにドル・ショックで打撃を受けたが、それは中小企業であり、重工業・大企業においては何ら影響がなく、景気調整策のために、逆に有利であったのである。

即ち、すでに日帝は米帝が輸入規制をしようとも堂々と輸出でき、否、米帝がすでに日帝の製品なくしては生存しにくいという局面にはいつているのである。あれだけニクソンが輸入規制を叫びながらも、効果なく、一九七一年においての対日収支は二五億ドル以上輸入超過なのであり、日帝の外貨準備高は雪崩れ式に増加し、一九七一年十二月には一五〇億ドルにも達しているのである。

また一方、米帝からの輸入の内容も変化してきている。即ち、五〇年代の重工業製品及び原料中心が次第に拡散し、平均化していることである。このことは同時に日帝がアジアを始めとし、原料市場を独自で開発しており、多角的な政策に基づいて資源獲得にあたっているからであり、オーストラリア・インドネシアを始め、積極的に独自資金で資源を開発する力を持ってきていることを示すものである。

て闘いぬくべく、革命的闘いの中で転化せしめねばならない。

(2) 政治・軍事の面について

まず最初に、安保条約を軸としてどのような関係が日米帝に存在するかをみてみよう。

米軍の駐留と自衛隊が米太平洋軍の指揮下にあることをみて、日帝は戦後一貫して、米帝によって世界反革命体制を担うプリンストンとして育成されてきたことを見ることが出来る。同時にその道は、日本独占ブルジョアジーの志す道でもあり、この期待を今日担っているのである。

六〇年の日米安保条約改訂後、日本における米軍の地位協定ができ、この協定に基づいて法律が作られたが、それは国内の米軍の特権を認めるものであった。第一に国有財産の管理についてであり、その項目の中で在日米軍は無償で国有財産を使用でき、日本政府は無条件にこれに同意しなければならないことが決められている。第二は土地家屋についての特別法があり、これによると米帝の必要に応じて日本政府は日本の土地家屋を無条件に米帝の使用に役立たせねばならない。第三に日本の漁船の作業範囲を制限しており、日本の漁船の作業は日本の海面での米軍の行動を妨げない範囲に限られており、又、課税の面でも日本に駐在する米軍、その家族は免税されており、税関での検査を免税されている。また日本の人民は理由もなく米軍基地にはいれば、一年以下、事情によって五年以下十年以下の刑に処せられる。以上のことは米帝が日本で治外法権を持っているということである。日本政府(日本独占資本の代理人)が与えたということである。

軍事面ではM S A協定があり、この協定に基づいて米帝は日本

以上のはことは、米帝との関係が数量的には戦後一貫しているように見えるが、内容的に変化していることをみてとらなないと極めて一面的になるということである。たとえば表Ⅳ(イ)における米帝を図ればカナダに対して輸出入平均二六%強依存しているが、この関係を米帝がカナダに従属しているとはいわないのである。その内容を分析するからである。

我々は米帝との関係を分析する時に一面的にならず(従属又は自立論的な思考ではなく)多面的に分析し、世界反革命体制における日米帝の役割の中で分析しない限り、反米愛国的路線か過去の新左翼的な単純な日帝自立論的な、こっちか、それともあちらか等の内容にしかならないということを、すでに総括しておかねばならないと考える。

日中国交回復問題に関連しつつ展開されている経済界の中国貿易に対する触手は、日帝の経済的強さを示すものである。即ち、米帝・韓・台等に対していろいろと考慮しつつも、独自で経済進出を判断してもあまりさしつかえないということの証左である。

日帝と米帝との関係は、主人と下僕としてあった五〇年代、親子の関係であった六〇年代、そして兄弟の関係にある七〇年代として見ておかねばならず、このことを経済面においても明確に示しているということを示さなければならぬ。日米帝は今後、経済面における矛盾、即ち不均等性を調整しつつ、世界反革命体制という政治を遂行するであろう。

我々は経済面における、日米帝の帝国主義的取引(繊維等の中小企業関係)を許さず、民族的反米闘争(帝國主義同士の利潤の分け前をめぐっての反米闘争)を米帝追撃・日帝打倒闘争とし

に軍事援助をしているが、それはあくまで米帝に有利であるという条件下でなされており(端的にはすでに旧くなり、使用価値としない兵器、とりわけ戦闘機を高く売りつける所を見よ)、そして自衛隊に対する指導・指揮権は実質的にも本質的にも米軍が持っている。例えば、国会でも問題になった米国のスパイ船がエプロ号が朝鮮を侵略した時、米軍司令官は在日米軍・自衛隊を第一級の警備態勢につかせたが、日本の防衛庁長官はもとより、名目上最高指令官になっている佐藤首相自身知らないものであり、このことはブルジョア的な主権さえも守られていないことが理解されると同時に、日本支配者階級がそのことを認めているということである。即ち、日米独占ブルジョア階級は、自己の階級的延命の為に反革命連合軍を建設しているという内容を持っているという証左であると考えられる。もう一つの問題は核の傘であり、日本はこの中にはいって寄り添っている。又、事前協議の事項があり、アメリカが日本で警備態勢にはいり、軍を移動させる時、第三国を攻撃する時、事前に協議することになっているが、しかし、すでにその本質は、一九六九年十一月日米共同声明後、佐藤が極東(アジア)の集団安全のために米帝の出した事前協議に前向きな態度をとると解答を与えている所からも明らかである。

以上のことよりわかることは、日帝は軍事面において米帝に強度に依存していることである。これはとりもなおさず、戦後の日帝の成長過程と密接不可分である。日帝は極力国内的な発展と経済力の発展にすべてを従属せしめる政策をとってきたがゆえに軍事面においては米帝に依存するという型をとったのである。しかしこのことは決して武装力を生産する能力がないのではなく、核

も含めていつでも持てる力を保持しているのである。今日、日帝にあって緊急な課題は戦後の平和と民主主義政治から世界反革命体制の軸として国内を帝国主義的に再編することであり、経済面における強大化と共に六〇年代後半から、この政策を全領域においてとっているのである。軍事面においても、一方で軍国主義思想教育政策をとり、一方では四次防・沖繩派兵等に見られるように、世界有数の軍勢力を保持してきており、更に強化する政策を遂行しているのである。

我々は政治・軍事面においても、経済面と同様に、日米帝の關係の内容の変化に眼をむけなければならぬ。帝国主義は必ず膨張に伴ない帝国主義化していくのである。日帝もやはりそうなのであり、五〇年代の憲法体制（空洞化させつつ）から六〇年代の安保体制へ、そして七〇年代の反革命侵略体制へと変化しているのである。一部の諸君に見られるように、軍事面のみを一面的にとりあげ、日本の対米従属を強調し、民族的な革命を提起するのは誤りであると考ええる。

民族の主権（ブルジョア的な主権）が米帝によって犯されておられ、親米売国政府を打倒することを革命の目的としたとしても、現実には日本の誰がそれを信じるのか？ いったいどこに親米独占打倒、買弁ブルジョア打倒を叫ぶ民族ブルジョアなどがあるのか？ 右翼の一部にはいるが、反米愛国を掲げる諸君は彼らと共闘もおしまないのか？ ことの本質をしっかりとつかまねばならない。革命の形を教条的にあてはめることは犯罪的である。現実的分析の中から政策を提起することを願うものである。また同時に、社会を分析する時に一國の見地ではなく、国際的な

れめであり、日帝が英帝・仏帝に比較して独自外交を展開できず、米帝に追随していたことは事実である。しかし、この外交面でも質の変化を分析しないで、現象的に米帝と同じ外交政策をとっているから、従って米帝に従属しているということを展開するのは誤りであると考ええる。

まず第一に、英帝・仏帝に比較して日帝がなぜ米帝と同様な外交政策を展開しているのかを分析するにはそれぞれの帝国主義の利害の共通があるのか、否かである。英帝・仏帝の市場はEECを中心とするヨーロッパであり、日米帝はアジアに多くの市場及び反革命前線基地を保持しており、日帝にとっては米帝のアジア政策の破産は同時に日帝そのものの市場を消失することを意味し、自らの利益のために極力米帝の反革命戦争を支援するのは当然であり、六〇年代後半からのアジア市場の拡大にともない、日帝がだれよりも米帝のアジア政策を支援するのは必然であること。

第二に、英帝・仏帝と比較して、戦後の日帝の復活過程にも規定される。つまり米帝に育成され、日本独占ブルジョアが発展せしめた帝国主義国であるということ。

第三に、現在の外交は、すでに世界プロレタリアート、被抑圧民族が帝国主義を攻囲する時代の反映もあって、好むと好まざるにかかわらず、革命側に有利か、反革命に有利なのかという選択をとらざるをえない。そうであるがゆえに、英帝・仏帝の退潮・老大国はすでに革命側と正面的に闘う力はなく、いかに今日の力を後退させず保持するかの政策であり、逆に日帝は急速な膨張帝国であり、若きプリンスであり、その基本姿勢はより帝国主義的であり攻撃的であるがゆえに反革命の盟主である米帝を一方で

見地をなければならぬ。帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利する時代においては、過去の歴史上考えられない形態、即ちブルジョア階級は自己の階級的延命のために、ブルジョア的な民族の主権を自ら否定し、世界反革命同盟をつくり、この体制の中において革命派に対応するのであり、このことをぬきにして反米愛国又は自主独立の民主連合政府を唱えても逆に帝国主義的抑圧、民族化、城内平和政策に加担するものに他ならず、プロレタリアート、被抑圧人民のためにならない。この間の官本修正派一派の役割を見るならば明らかである。たしかに未だ日帝は米帝を支配下においていない。帝国主義相互の關係は、絶対に平等互恵などありえず、必ず強國が他國を支配するのであり、日帝が米帝を支配下においていないことは、同時にその限りにおいて従属しており、その目的はベトナム・中国を始めとする革命派に対して共同の反革命体制をしくためである。帝国主義は自己の階級的延命のために強盜の分け前の分配をめぐる矛盾を持ちつつも、より一層国際反革命体制を強め、この体制の中に各帝国主義の独自性を切りひらきつつ、延命をはからんとしている点を分析しておかねばならない。我々は軍事面の米帝に対する従属性のみを一面的にとらえ、その変化を見ようとせず、反米を民族主義的に掲げることには反対し、論じているように反米帝闘争を反帝国主義の基に米帝追撃・日帝打倒へと結合せしめるプロレタリアート・被抑圧人民の階級的観点で闘いぬかねばならないことを主張する。

(3) 対外政策（外交面）について

独自外交をとるのか、従属外交をとるのかは確かに重要なわか

は助け、一方では強盜の分け前を更に加算しようとしているのであること。

以上の内容を明確に把握した上で、我々は兄弟の關係にある米帝と日帝は反革命体制の維持、強化のために共同の政策を持っており、その内実において今日米帝が盟主であると分析し、外交面においてもそのことが反映していると考える。六〇年代前半までは米帝に従属している内容が主であったが、今日にあっては世界反革命体制の中における自ら積極的な位置・政策を展開していると考ええる。

以上の様に日帝は一方では米帝に従属し、一方では被抑圧民族ととりわけアジア人民を攻撃的に侵略するという相矛盾した政策をとってきていることがわかる。これはとりわけ今日変わったことではなく、すでにレーニンも明らかにしている通りである。

(注一) 変化した所はさらにこれが強まり、帝国主義が世界反革命体制のために、即ち自己の階級的利益のために各国の特殊性を持ちつつも、必ず各国帝国主義はこの相矛盾した二側面を持つているということであり、この矛盾した政策が統一されるのは帝国主義の共同の任務、革命をどう停めるのか、即ち、世界反革命政策の中で統一されるということがより鮮明な所である。我々は日帝の相矛盾した二つの側面のうち、主要な側面（すなわち日本の性格を規定するもの）は六〇年代後半を持つて帝国主義的な攻撃的な側面が主要なものであると考える。

最後に以上の結論を系統的に整理しておこう。戦前の日本帝国主義は米帝に敗れ、中国人民を始めとする被抑圧民族に敗れ、ソ連邦に敗れた帝国主義国であり、米帝に占領され、独立はしつ

も、安保条約によって米軍は依然として日本に駐留しており、政治的にも経済的にも日本は米帝に依存関係にある。しかし、我々はこのことを固定化したり絶対化するのではなく、マルクス主義者であるならば、この米帝との矛盾の変化を認めないわけには何人といえどもいかなぬものと考え。とりわけ、我々は敗戦によって日本帝国主義が死滅したのではなく膨張期・限界期を通過し、衰退したに他ならず、決して死滅したのではないことを明確にしておかなければならない。なぜなら、恐慌や帝国主義戦争の敗北は帝国主義を死滅させ（プロレタリア）革命を勝利させる条件性となることができるが、それ自体では決して死滅もしないし、「帝国主義は自らすすんで歴史の舞台から退くものではない」のであり、死滅させるには「プロレタリア革命とプロレタリア独裁によってのみしかない」ということを明記しておかねばならない。マルクス主義者とは「階級闘争を承認し、同時にプロレタリア独裁を承認するもののみがその資格を有す」ことなのである。

戦後の革命的条件性を粉砕した日本支配者階級は新たな「平和憲法」という装いの中で再出発をしてきたのであり、我々は現在の日本帝国主義は急速な膨張期にあると考えている。日本の対米従属的矛盾は減少してきており、更に減少しつつあると考える。米軍は漸時削減され、沖縄の施政権が返還されており、いわゆる後進国に対する経済援助も米帝に代わって日帝が急速に肩代わりをしているのを見ても明らかである。又、日本の高度な経済成長によってもたらされる日米の経済対立は帝国主義間矛盾の顕在化であり、決して対米従属的矛盾ではない。現在、我々は被抑圧民族に対する日帝の帝国主義的矛盾は増加してきており、更に急

速に矛盾は激化するものと考え。未だ直接的軍事侵略までに至っていないが、日本独占ブルジョアジーの資本輸出とアジア諸地域に対する資源収奪はうなぎ登りに増加しており、日・韓・台軍事同盟化は日本帝国主義の本質を明らかにしており、四次防の確立・沖縄派兵は資本輸出の拡大（すでに米帝に次いで第二の資本援助国になっている。表V参照）にともなう将来的背景の為にしか他ならないのである。つまり、対米従属矛盾の相対的減少と帝国主義的矛盾の具体的増加がより明確になっている。国内的に見ても、(1)財閥による軍事・産業体制は復活しており、(2)自衛隊は加速度的に強化され、(3)自民党・官僚層には反動派が充満し、(4)警察力のファシズム化、(5)マスコミによる軍国主義的風潮をおおきく、(6)司法権の急速な反動化、(7)文教政策の愛国主義化、等々を見てもわかるように、日本帝国主義は膨張しており、被抑圧階級・被抑圧民族に対する帝国主義的矛盾は増加していることを確認せねばならず、この現実を曲節したり不当に無視してはならない。

日本帝国主義は、(一)被抑圧民族とりわけアジア各国人民との矛盾、(二)中国・朝鮮・ベトナムを軸とする社会主義国との矛盾、(三)強盗の分け前をめぐる帝国内部矛盾の三つの対外矛盾（第一章の国内情勢を参考）のしわ寄せを国内のプロレタリアート・被抑圧人民に転化して、より一層米帝を盟主とする世界反革命体制の維持と日帝の強化にむけ内外政策を帝国主義化している若き膨張帝国主義国である。

以上が日本社会の性質である。

(注一) レーニンは従属帝国主義についてどのような民族を持

っていたのかを見てみよう。

『帝国主義論』では従属帝国主義とは云っていないが、一九二〇年七月、レーニンがコミンテルン第二回大会で行なった報告では戦勝国・敗戦国等々の多数の国は「……だがこれらの国はみなアメリカに対して経済的な従属状態に陥り、戦争中はずっとアメリカに軍事的に従属していた……（アメリカは）あらゆる国を従属させ、もっとも富んでいる。」（レーニン全集三一巻）。

また、一九二〇年十二月六日『ロシア共産党(共)モスクワ組織の活動分子の会合での演説』で「……さらに第三の不和は協商国とドイツとの間にある。ドイツは敗戦し、ヴェルサイユ条約でおさえつけられているが、しかし、巨大な経済的可能性をもっている。経済的發展の度合いから云えば、アメリカを第一位とみなす場合、ドイツは世界第二位の国である。専門家は電気産業はドイツはアメリカにまさっているときえ云っている。ところで諸君の御存知の様に電気産業は絶対的な意義をもつものである。電気使用の範囲から云えばアメリカがまさっているが、技術的進歩という点からいえばドイツの方がまさっている。しかもこのような国に対して、同国が生存していけないようなヴェルサイユ条約が押しつけられているのである。ドイツはもっとも強大で、先進的な資本主義国の一つであってヴェルサイユ条約を耐えることができない。だからドイツはそれ自身帝国主義国でありながら圧迫されている国として世界帝国主義に対抗して同盟者を探し求めなければならぬ……」(レーニン全集三一巻)

(B) 日本革命の主要な対象（主要な敵）

日本帝国主義（日本軍国主義）、アメリカ帝国主義（日本独占ブルジョア階級及びその代理人とアメリカ帝国主義の独占ブルジョア階級）

現在の日本の社会の性質が米帝に従属する帝国主義国であり、米帝と結託して被抑圧民族・被抑圧階級を侵略・搾取していることがわかり、急速に帝国主義化しているものである以上、日本革命の現段階の主要な対象或いは主要な敵は、日米独占ブルジョア階級である。

では次にこの主要な敵をどのように打倒するのか？を考えてみよう。

現在の世界階級闘争の地平はインドシナ三国人民の民族解放社会主義革命にむけた抗米救国闘争が世界階級闘争を先導し、米帝を先頭とする世界反革命戦略を打ち破り、逆に被抑圧民族・被抑圧人民が帝国主義を攻囲する時代を切り拓いているのである。

この地平に到達したマルクス→レーニン→毛沢東の歴史的流れを世界プロレタリア革命の観点に基づいて整理してみよう。マルクスは百年前に「万国の労働者団結せよ」と呼びかけ、帝国主義を分析したレーニンは「万国の労働者と被抑圧民族団結せよ」と呼びかけた。毛沢東はレーニンの呼びかけにこたえて、植民地・半植民地諸国の反帝闘争はプロレタリア世界革命の一部分であり、真の民族解放・民主革命は社会主義革命へと発展する」と規定したのである。即ち、毛沢東は十月ロシア革命後の時代では、どんな植民地・半植

民地諸国におこった革命でも、もはや古いブルジョア革命ではなく、民族・民主革命は社会主義革命のための必要な準備であり、社会主義革命は民族・民主革命の発展の必然な成り行きであると云っており、十月社会主義革命の勝利は西方のプロレタリア社会主義革命と東方の植民地・半植民地諸国の民族・民主主義革命の間に橋をかけたのであり、中国革命は植民地・半植民地諸国において民族・民主革命をどのようにして社会主義革命につながるのかという問題を解決したのである。今や主要に問われているのはレーニンの呼びかけに対して帝国主義本国人がどう答えるのかである。

以上のことを念頭におき、帝国主義本国人たる日本における革命闘争の観点を整理しておく（即ち主要な敵をどのような観点でもって打倒するのかがである）。

(一)、現代においては、資本主義の打倒と人類を社会主義に導くことをめざす革命は、全ての国のプロレタリアートの闘争と植民地民族の反帝闘争とを共同の運動に結びつけることによってはじめて成功することができる。このことは帝国主義本国人たる日本における革命においては、被抑圧民族（とりわけアジア人民の）反帝闘争と正しく結びつき、世界階級闘争の領導者たる中国・インド・ナ三国人民の「人民戦争」を謀虚に学びとる思想を会得しぬかなければならないことを、緊急な課題として我々に教えてくれるものである。

すでに明記しているように、現在の世界階級闘争の地平は、被抑圧民族が（全世界人民の支援の中で）帝国主義を敗退させる時代であり、全世界的に社会主義が勝利にむかう時代にはいったことである。

は徹底的であればあるほどよい。……中国の状況はこれとはちがいが、中国は侵略されている国である。したがって、中国共産党員は愛国主義を国際主義と結びつけなければならない。我々は国際主義者であり、また愛国主義者でもある。祖国防衛のため侵略者と戦おう、というのが我々のスローガンである。……したがって、愛国主義とは民族解放戦争における国際主義の実践である。」

(『民族戦争における中国共産党の地位』)
我々は過去において、労働者階級を代表した党が国際主義の旗を降ろし、排外主義へ転落し、帝国主義戦争に協力した歴史の誤りを思い浮かべるべきである。ベルンシュタイン主義、カウツキキ主義に反対し、マルクス・レーニン主義に賛成し、現代修正主義に反対し、毛沢東主義に賛成しなければならない。帝国主義に反対し、帝国主義の掲げる帝国防衛主義に反対し、革命的祖国敗北主義の旗を掲げるべきである。これは帝国主義国内のプロレタリア階級とそれを指導する党の原則であり、マルクス・レーニン・毛沢東主義の普遍的原則である。

(二)、帝国主義者は、一方では自国の被抑圧人民の搾取と抑圧を始め、たとえブルジョア的なものにせよ全ての民主的自由を制限し（軍国主義化）、ふみにじりながら、もう一方では、米帝や国際的資本家組織（IMF・EEC・十ヶ国相会議等々）、超国家的侵略軍事ブロック（日米安保・SEATO・日台等々）を強化し、各帝国主義者は自己の階級的利害のためにより一層、国際反革命戦略を強め、帝国主義間矛盾をこの国際反革命同盟の中で調整し、延命をはかっている。即ち、帝国主義本国においてはブルジョア的な民族の主権さえも帝国主義独占ブルジョア階級の手によって

この時代において帝国主義本国人たる日本においてはより一層、国内の全領域における帝国主義的再編（軍国主義化）を強化してきており、従って、左翼（新旧）及び労働運動内部に日和見主義（「左」・右を含み）、排外主義が色濃く存在してきており、我々はこの帝国主義的思想潮流に対してより鮮明に反帝国主義の旗を掲げ、被抑圧民族と連帯できる具体的行動を断固実践しなければならぬこと。即ち被抑圧民族と抑圧民族の反帝闘争は同じものではない。帝国主義本国における反帝闘争は自国帝国主義を打倒すると同時に、自らの思想そのものを検証してプロレタリア国際主義の思想を闘いとする闘いでもある。抑圧民族はそのことを意識しようと思わぬまいと知らねばならず、そのことを忘れて自国帝国主義を打倒することはできない。

帝国主義本国においては、たとえあろうべきプロレタリアートの立場から主観的に愛国主義を掲げたとしてもそれはまちがいである。なぜならマルクス主義者は、現実から出発し、現実の諸矛盾をみるからである。あれやこれやの公式や主観的考えから出発するのではなく、実際から出発する必要があるからである。日本の現実には米帝と結託し帝国主義政策を發動しており、被抑圧民族の共同の敵であるということが現実である。対米従属矛盾は主要な矛盾ではなく、毛沢東は次の様にいっている。

「……日本侵略者やヒットラーのいわゆる愛国主義に対して共産党員は断固として反対しなければならない。日本の共産党員やドイツの共産党員はその国家が遂行する戦争においては敗北主義者である。あらゆる方法で日本侵略者やヒットラーの戦争を敗北に終わらせることが日本人やドイツ人民の利益であるし、敗北

ふみにじられているということである。このことは次のことを意味するのである。自国帝国主義打倒はとりもなおさず世界反革命体制に対する有効な闘いと結合しない限り成功しないということであり、同時に、自国帝国主義打倒は世界反革命体制に対する闘いでもある、言うことである。日本帝国主義は急速な膨張帝国主義として自己の帝国主義的利権の拡大のために日米同盟（安保体制）を軸としつつ、アジア各国の反共及びカイライ政権の維持のために経済援助の名目の下で強力な軍事援助を強め、被抑圧民族に対する搾取と反革命体制を強化するのである。我々は日帝の反革命性を有効に暴露し、日帝を打倒しなければならない。

(三)、我々が追求する革命とは何なのか？帝国主義を打倒したとしてもこのことがないかぎり、社会主義革命は成功しない。我々は社会帝国主義（口では社会主義を唱え、行動においては帝国主義を發動すること。）の道をゆくのか、それとも共産主義社会へと近づく道をゆくのか？我々は民族、民主の本当の姿を追求し、革命に成功しなければならず、このことはとりもなおさず、世界プロレタリア文化大革命の一環としての革命思想・組織・運動を追求することであらねばならない。

我々は、ソヴェト連邦を社会帝国主義であると規定する。一九六三年六月十四日の中共・中央による『国際共産主義運動についての提案』の時期においては「現代世界の基本矛盾は、社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾。資本主義国内部のプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾。被抑圧民族と帝国主義との矛盾。帝国主義国と帝国主義国、独占資本グループと独占資本グループの間の矛盾」であり、現代修正主義との矛盾は、未だ国産共産主義運

動内部の二つの路線であり、人民内部の矛盾であった。しかし、中ソ論争、プロレタリア文化大革命、インドシナ革命戦争を経る中で、四つの基本矛盾は次の様に転化した。「現代の世界には、被抑圧民族と帝国主義・社会帝国主義との間の矛盾。資本主義国・修正主義国内部のプロレタリア階級とブルジョア階級との間の矛盾。帝国主義国と社会帝国主義国との間、各国帝国主義国との間の矛盾。社会主義国と帝国主義・社会帝国主義との間矛盾という四つの大きな矛盾が存在している。」この世界の基本矛盾の変化は、世界階級闘争の発展を示している。階級闘争の発展は、米帝を頭とする帝国主義国の敗退、そして、中国・インドシナ三国を頂点とする社会主義、民族解放闘争の勝利をあらわし、その深の中で、現代修正主義との間の矛盾は、敵対矛盾に転化したのである。マルクス主義の歴史をふりかえって見るならば、まさに闘争の歴史である。一九世紀の九〇年代にはマルクス主義はすでにコトビア思想（空想社会主義）、ブルードン主義、バクーニン主義、プランキー主義等々の小ブルジョアのイデオロギーに対して無条件の勝利をえていたが、闘争は続いた。それは、マルクス主義内部にあってマルクス主義に敵対する潮流との闘いが始まったことを意味していた。なぜならば、もはやマルクス主義に反対するといふ看板を掲げては誰も相手にしてくれないので、マルクス主義者と自称しながらマルクス主義の学説に反対する道を選んだ。彼らは、マルクス主義の学説を「発展」させ、「修正」すると云う名目でマルクス主義の革命的眞隨を去勢し、マルクス主義を小ブルジョアの思想に変質させようと努力してきた。それは時には、ヘルンシュタイン主義、カウッキキ主義と呼ばれ、また日和見主義、改良主義

義、組合主義、議会主義等々と呼ばれたが、それらはことごとくレーニンによって粉砕された。こうしてロシア革命後は、革命的マルクス主義はマルクス・レーニン主義として存在するのである。しかし、新たな修正主義者は、マルクス・レーニン主義の仮面をかぶって、現代帝国主義の道をさがしはじめたのであり、フルシチョフ・ブレジネフがその道をさがしだし、中ソ論争がありつつも、彼らはますますマルクス・レーニン主義を修正し、あげくのはては、マルクス・レーニン主義そのものを放棄し、口では社会主義を唱え、行動において帝国主義であるところの社会帝国主義になりさがり、経済援助の名のもとに勢力圏を拡大してきたのである。そのみならず、社会主義の名のもとに他国の軍事侵略をも実行するに至っているのである。

被抑圧民族の搾取の方法を歴史的に見るならば、旧植民地政策と称せられる直接統治の方法が英国の後退、そのことはとりもなおさず被抑圧民族の民族解放闘争の勝利のためであり、第一次帝国主義戦争、第二次帝国主義戦争（被抑圧民族の民族解放闘争が存在し、中国・ヴェトナム・朝鮮革命の成功へと連続するところが第一次と大きく質を異にする）を経過する中で、米帝に代表される新植民地主義となり、形を変えた（経済援助の美名又は「平和と自由」の名分のもとにおける反革命政策）搾取政策をとったものである。しかし、その帝国主義の本質はいかなる衣を身にまとおうとも、人民の闘いの前には「衣」を剥ぎとられ、ヴェトナムにおける米帝の如く、後退をよぎなくされるのである。それはまさにレーニンが「帝国主義とはつまり戦争であり、帝国主義戦争は社会主義革命の前夜である」と論断している通りである。世

界人民の解放闘争の所に、旧植民地、新植民地政策という帝国主義の野望は打ち砕かれ、歴史上最強の米帝でさえも政策の手直しをよぎなくされたのであり、帝国主義は自己の延命のために必死であり、その策を考えている。我々はもう一方新たな帝国主義政策として口で社会主義を唱え、行動でもっと帝国主義を発動している社会帝国主義に対して眼を向けなければならぬ。米帝を軸とする国際帝国主義は明確に敗退しているが、口で社会主義を唱える「社会帝国主義」はいまだ世界人民の前にその本性をあらわしていないのであり、着々と社会帝国主義の世界戦略を作りあげつつあり、成功している。（西独不可侵条約・インド友好条約（II軍事同盟）、パングラデンヌ、最近のアジア政策（IIアジア安保構想）等々）我々は社会帝国主義を世界人民、とりわけ被抑圧民族の共同の敵であり、社会帝国主義に注意し、闘いを準備しなければならぬと考える。我々は戦後米帝を「解放軍」と規定し、味方と思ひこみ、闘いの準備をしておらず、米帝が本性をあらわしてからあわてても、何ら有効な闘いを組みえず、戦後革命の決定的時期を逸したことを教訓化しておく必要がある。矛盾が変化すればその解決方法も異なるのであり、矛盾の「転化」を明確に知って正しい解決をあらゆる領域において実行できるように思想方法・工作方法を会得せねばならず、準備しなければならぬ。世界階級闘争は急激に発展しており大きな質的転化がおこらんとしており、すでに底流においては、流れが更に変化していることを銘記しておく必要がある。なぜならばいかなる革命も真空中状態ではおこりえず、全世界の階級闘争を反映するものであり、とりわけ日本革命においてはその反映は直接的なものとなる。我々は帝国主義本國における排外主義思想潮流と闘い社共路線と闘いつつ（↓日本における社会帝国主義の思想的土壌としてあ

る）日帝を打倒する闘いを組まねばならない。以上の四点の内容をもって主要な敵（日米帝国主義）を打倒することが現在の敵の倒し方であると考える。

我々は反米帝闘争を次の点において闘いとるものである。（一）世界反帝闘争の一貫として闘い、帝国主義の盟主である米帝を包圍し、アメリカ人民の解放闘争と連帯すること。（二）世界人民、とりわけアジア人民の主要な敵である米帝を追撃する闘いは、世界帝国主義を打倒する具体的闘いであり、プロレタリア世界革命にむけての闘いと完全に一致し、とりわけ帝国主義本國における日本人民の闘いと、世界人民、とりわけインドシナ三国人民と共同の闘いを展開でき、より一層、被抑圧民族と団結できることであり、反帝国際主義の観点である。

（三）日本人民の主権が、日米独占ブルジョアジーの手によってふみにじられており、日本独占ブルジョアジーの世界反革命同盟における役割を暴露し、日米帝国主義同盟の反革命性を粉砕し、日本人民の主権を回復すること、それはとりもなおさず日本革命の最望の中にあることを提起すること。

我々はすでに対米従属矛盾を主要な側面として反米のスローガンを提起することは誤りであると考える。日帝打倒（反軍国主義闘争）のスローガズは明確に、自らが抑圧民族であり、自國が他民族の搾取によって成り立っている帝国主義であり、米帝と結託し、世界反革命の最先頭にたちつつあり、膨張期にある帝国主義国であることをはっきり自覚し、世界人民、とりわけアジア人民と連帯し、日帝（自國帝国主義）打倒の闘いを組織しなければならぬ。

我々の主要な敵は、日米帝国主義であり、第一の敵は自國帝国主義であると考える。日米帝国主義同盟（日米安保条約）は、すでに五〇〜六〇年代前半の対米従属的内容から、質的変化が起きていることを明記せねばならない。現在において日帝は、日米安

保を帝國主義政策の中に明確に位置付けているのである。日米帝國主義が（他國帝國主義と共に）明確に反革命世界戦略の中で政策を考えている以上、我々は、日米帝國主義打倒の闘いを、より一層世界革命の中から闘いぬかなければならず、第一の敵である日帝をプロレタリア國際主義の観点で打倒しない限り、日本革命を勝ちとることができないと考える。すでに日米帝國主義打倒の闘いは具体的であり、我々の地平は戦略的反抗を準備する段階にあると考える。

米帝追撃、日帝打倒闘争の中で社会帝國主義（日本における社会帝國主義の思想基盤は社民および宮本修正義一派である）を包圍する闘いであると考える。

(C) 日本革命の任務

社会主義革命に勝利すること。（同時に米帝との従属關係からも脱却する任務が含まれる）

現段階における日本革命の敵が主として日米帝國主義（日米独占ブルジョア階級である）である以上現段階での日本革命の任務は何か？それは疑いもなく二つの敵を打倒することであり、米帝追撃・日帝打倒が日本人民の任務である。

この二大任務は互いに關連しており、日本独占ブルジョア階級は、米帝の反革命世界戦略の主要な支持者であるのみならず、運命共同体的な統一行動をとっている。一方、米独占ブルジョア階級も日帝の支持者であり、戦後一貫して日本独占ブルジョア階級の育成・成長を手助けしてくれたと、兄弟の關係にある。

この二大任務の実行は、日米帝國主義がソ連社会帝國主義・西独帝國主義とあわせて四つの強大帝國主義の内二つであり、しかも現在の世界反革命体制の中心軸であることも考えるならば、すでにBで論じた内容において、全世界人民の反帝闘争と結合し、

(D) 日本革命の原動力

帝國主義の恩恵を主要に受けてない階級（労働者・貧農・中農・小ブルジョア階級）また革命の高揚期においては帝國主義の恩恵を主要にさすかっている階級が革命に従うのか（協力するのか）、反革命に走るのかの二極分解をおこなすであらう。

〔注・第四章 我々の敵はだれで、友はだれであり、同志はだれなのか―階級分析をこころみるにあたっての覚え書―を参考にしてください。ここでは深い分析は省略する。〕

すでに論じてきたようにこの問題は現在の日本社会の性質・日本革命の対象・日本革命の任務についての分析の規定によって、日本革命に、どの階級・階層が闘いに参加するかの問題である。

我々は帝國主義の恩恵を主要に受けてない人に対して、帝國主義の恩恵を主要に受ける条件性のない労働者、そして帝國主義の恩恵を拒否する労働者を指導階級とし、社会主義労働同盟を軸としつつ、広範な反帝國主義統一戦線の準備を開始しなければならないと考えている。

我々はこの闘いの（統一戦線を創り出す）具体的展開の中で多くの人民との結合の方法を会得し、主要矛盾を正しく見極めつつ、内部矛盾を正しく処理する中で団結してゆきたいと考える。

そしてこの闘いはとりもなおさず、目的意識的な武装闘争をさせ、発展せしめる人民の海を創出する闘いであり、そのことは同時に海を泳ぎきる武装した魚を形成しうるものであらねばならないと考える。

とりわけ被抑圧民族の民族解放・社会主義革命の闘いと合流し、國際反革命体制と対決するという世界性の中においてしか準備されず、日本人民の米帝追撃・日帝打倒という具体的役割は、日本社会主義革命に勝利するという方向の任務を鮮明に持たない限り実践できないと考える。

すでにあらゆる側面から論じているように、対米従属は日本の主要矛盾ではない。しかし、日帝の副次的側面として米帝に依存していることは真実であり、したがって日本人民と米帝との矛盾は存在しているが、この矛盾の解決は日本人民の手に一切の主権をとりかえすことであり、即ち、プロレタリアート、被抑圧人民が日本社会主義革命に向け、米帝をさらにアジア人民と共に追撃・敗退せしめ、日帝を打倒することなくして解決されないものである。

「帝國主義が全面的に崩壊にむかい、社会主義が全世界的に勝利にむかう時代」における従属帝國主義國における（英帝・仏帝・伊帝・独帝等々）反米帝闘争は階級的観点で闘いぬかねばならず、けっして民族的利害で闘ってはならないと言うことが、共產主義者の態度である。

〔注〕今日の帝國主義間の特殊な諸關係を具体的に分析せず、反革命同盟及び軍事機構を現象的に見て、しかもプロレタリア世界革命、即ち、プロレタリアート・被抑圧民族の革命的観点からみるのではなくして、安易に民族の見地から分析することは大きな誤りである。

中国・ベトナム人民は、被抑圧民族として闘い革命に成功したのであり、我々は抑圧民族として存在することを現実の闘いの中で実践的に否定することを通じないと、けっして革命的闘争はできないのである。

被抑圧民族にあっては、祖国を米帝から守り、民族を解放する闘い自体が革命的であり、抑圧民族にあっては、革命的祖国防衛主義であろうと、なのであると、民族の見地は犯罪的である。

(E) 日本革命の性質

社会主義革命（プロレタリアート独裁）

革命の性質を決定する力は、主要な敵と主要な革命勢力の双方である。当面する日本革命の主要な敵は日米帝國主義であり、米帝追撃・日帝打倒の闘いである。このことは現在のあらゆる矛盾の解決は日米独占ブルジョア階級を打倒する以外にないことを示しており、社会主義の生産様式を目ざすことが確認されているということである。

革命の原動力においても、プロレタリア階級を指導階級とし、広範な貧・中農及び都市勤労人民が結集することは明らかであり、彼らの主要な敵は日米独占ブルジョア階級なのである。

一部の諸君の中に「農民が革命の原動力に入るから、したがって社会主義革命ではない。なぜなら農民は私有制を守るのであり、けっして社会主義的ではない」と論じているがこれは農民を固定化したとらえ方でまちがっている。なぜなら、貧・中農は、勤労農民であり、彼らの主要な敵は日本（米國）独占ブルジョア階級であり、けっして中国革命時におけるように主要な敵が封建地主ではないのである。敵がかわれば当然ながら主体も変化するの当然である。

多くの貧・中農は、しだいに日帝の農業切りすて政策と対決し、社会主義体制においてしか農民の正しい発展が存在しないということを自覚しており、このことは社会主義國家建設の重要な軸が、農民の中に着々と生きついでていることの証左に他ならない。

又、我々は、日本革命の性質の中にはっきり、社会帝國主義の道

に反対し、プロレタリア文化大革命の道、世界プロレタリア革命に
結節する日本社会主義革命であることを明確にしておかねばなら
ない。

(F) 日本革命の前途

社会主義革命の発展、そのことは同時に日本人民を世界人民に
奉仕する、世界プロレタリア革命の主体としてならせしめ、共
産主義社会建設の主体として日本人民を革命(改造)すること。

現在の階級闘争の地平は「社会主義が全世界的に勝利に向かう時
代」であり、この時代において帝国主義本国の日本における社会主
義革命の勝利は、世界プロレタリアート、被抑圧民族に大きな光明を
与えるものと考えられる。

我々は、口で社会主義を唱え、行動において帝国主義を發揮する
社会帝国主義と常に闘い、日本人民を世界人民に奉仕せしめる、世
界革命の主体とならせしめるために、工業の發展してない、生産力
の弱い、国家の社会主義国家建設に死力をつくして援助・協力する
路線を實行しなければならぬ。

人民に奉仕する、世界革命路線の遂行の勝利の中を、共産主義社
会へと前進していくことである。

(G) 日本革命の主要な方法。主要な闘争形態

↓非公然活動における非合法・合法活動の弁証法的結合がなけ
ればならず、戦略的には武装闘争に転化されるであろうし、武

(三)政治の最高形態が戦争である以上、政治をしらずして戦争をや
ることはいったい何を意味するのか？ それは夢を見ているにしか
他ならないのである。毛沢東の戦争論・軍事論が他のいかなる天才
よりも教唆してくれているのはいかなる場合においても思想↓政治
を先行させているからに他ならない。毛沢東は軍事論以外に学ぶと
ころがないと云う人々があるとしたら、その人は初め
て共産主義思想↓共産主義政治にふれたことを言っているに他
ならず、そのことに本人が気がついていないだけなのである。
軍事を論じ、革命戦争を遂行せんとする人々であるならば、政治
を知らねばならない。今後いかなるであろうと指導者たらんと
欲し、人民に奉仕する革命観をもたんとする人ならば、革命戦争の
問題を除去することはできない。が、しかし、我々の戦争は唯武器
論的考えやブルジョアの職業軍人(私兵)を創り出すためにはない
ことを知っておかねばならない。古今東西、立派な政治家は即優れ
た將軍であったことを知らねばならず、一方、戦場の指揮ができて
も、それは即政治を推進できるとは限らないことを銘記しておかね
ばならない。我々は軍事の問題を教条的にあてはめる(中国革命の
方法を日本へ)ことは致命的であると考える。党軍、又は軍から
党ができる等々の観念論及び軍又はゲリラに対するロマンチズム的
心情では革命はできないのであり、革命とはもっとも現実的なもの
であり、もっとも激しく激しいものであり、その最高の表現形態が
「革命戦争」である。それはまさに現実的である。「自己を保存し、
敵を殺し、味方を拡大する」、この条件がない時はさっさと逃げる
のであり(後退しない)と殺されるがゆえに、自己を保存できなく
ても(死んでも)、味方(革命勢力)が拡大する及びその条件性が
ある時は死ぬのも辞さないのである(人民に奉仕する革命観は修養

装闘争を持久戦の中から創出せねばならない。

この場において武装闘争の形態等について多くを論じることはあ
らゆる面において困難である。この問題については、機会をあらた
めて『日本革命の戦略問題』と題して論じてゆきたい。しかし、基本
的問題だけは簡条書的に整理しておきたいと考える。

(一)日帝がいかに反動化しているといっても、日本は武装闘争を
実践しない限り、言論・行動の自由はある。このことは他国に比して
相対的事実である。我々は断固としてその特色を闘いに有利なよう
に転化しなければならぬ。いかなる理由であれ、合法活動はやれ
る時代に徹底的にやり、有効に政治暴露を組織しなければならぬ。
だが一方、この平和的利点が日本左翼総体に欠点、しかも致命的欠
陥をもたらしていることも事実である。それは合法至上主義議会議
主義である(社共のことのみでなくて)。このことを知っておかね
ばならない。それはまさに弁証的關係にある。利点は条件性(革命
主体の)いかにによって致命的欠陥に転化するのである。

(二)今後の革命組織は、非公然(権力に対して、及び人民に対して
も)でなければならぬ。なぜなら、非公然か否かは敵と革命派と
の力關係によって決定されるのであり、敵が圧倒的に強大である現
在は非公然であらねばならない。但し、一切の活動を合法主義とし
て考え、革命がブルジョア法内で實現できると考える、天才、の人
人は別である)。一切の活動は非公然・非合法活動か非公然・合法
活動に他ならないのであり、非公然か公然かの論争は革命をやるの
か、やらないのかの論争と同列のことを意味することに留意し、活
動家は組織の实体をもってオルグするのでなく、思想方法・工作方
法を持ってして革命戦線を創り出すことが問われているのである。

論でもなく、具体的に人民に奉仕する死生観と直結しているのだ
る。この世にこれ程弁証法的なものが存在するであろうか、これ程
具体的なものが存在するであろうか)。また、戦争の中で敵前逃亡
及びスパイとわかれれば処罰なのである。平和的な時は方針が出ない
と称して昼寝でもできるが、戦争では前進するのか、後退するのか、
とどまるのか、いかなる時であれ方針を出さねばならず、すみやか
に実践しなければならぬのだ。なぜなら敵に殺され革命に勝利で
きないからである。(注・これらの点については我々が論じる以上
に血の教訓をもって諸同志の意見を聞いた方が真実味があるの
でそうしてもらいたいと考える。)

(四)世界階級闘争の地平においては「戦争」が各地であり、革命戦
争を堅持・發展せしめた党の指導の革命は各地で勝利し、暴力革命
を放棄した党の指導する革命はさっさと失敗しているの
である。今さら武装闘争でもないが、しかし、我々は日本階級闘争の現
時点を革命戦争の準備期および端緒期と考えている。従って今後
は定着期及び昂揚期として全面的反抗期又は峰起期として作り出され
ていくと考えている。

(統戰戦は断固支持であるがあらゆる側面において多くの教訓は
一九七一年九月一六日三里塚東峰闘争について論じたところを参考
にしてもらいたい。)

(五)我々の主要な敵は日米帝国主義であるが、このことは、現在
世界で最も凶暴な侵略勢力である米帝、ソ連社会帝国主義、日本帝
国主義、西独帝国主義の四つのうちの二つであり(近い将来、社会
帝国主義との対決が具体的に政治過程にあがると考えられるが)極
めて強大であり、凶暴な敵であることを銘記しておかねばなら

ないと考える。

(六) 非合法闘争又は武装闘争をやる時には証拠を残さないようにするということである。(自己存在を宣伝するヘルメットをかぶって突撃したりすることはやらないということである。なぜなら敵に有利な証拠、情報を与え、我々にとって不利になり、致命的になるからである。)

最後に宮本修正主義一派に対する逆批判も含めて革命の平和的移行の可能性についてレーニン等々の学説を整理しておきたいと考える。(但し、これは専ら革命の平和的達成を夢見ている善者に対して、その不可能性を系統的に説明してあげるためである。)

「重ねて前提的に言っておくが、この可能性は極めて稀であり、限定された特殊な条件が必要であることを忘れてはならない。この「例外」を一般化することは科学を偽造することを意味するに他ならないのである。

(イ) 一八七〇年代のイギリスとアメリカの例(マルクスの認めた可能性)

「一九一七年の今日、帝国主義の時代には、マルクスのこの限定はなくなる。……イギリスもアメリカもあらゆるものを自分に従属させ、あらゆるものを抑圧する官僚軍事制度の全ヨーロッパ的な、けがらわしい血なまぐさい泥沼に完全にころげおちた。いまやイギリスでもアメリカでも「あらゆる真の人民革命の前提条件」はできないの国家機構(一九一四年から一九一七年にこれらの国では国家機構が一般帝国主義的水準に達するほどに完成された)を打ち砕き破壊することである」(レーニン全集25巻)

(ロ) 一九一七年二月二十七日から七月四日までのロシア革命における例

以上四点であるが、日本には全くこうした例外は一切存在しえないことは申すまでもないことであろう。
以上をもって第三章を終了する。

第四章 我々の敵はだれで、友はだれであり、同志はだれなのか

階級分析をこころみるにあたっての覚え書

なぜ我々は現在階級分析を試みようとするのか？ それは我々の闘いの総括に対する一つの実践的解答を準備するためである。我々は、本當の敵はだれで、だれが友で、同志はだれなのかという革命にとって一番重要な問題があまりにその場しのぎ的で、あまりに意識化されてなかつたのではないだろうか？ 強く考えている。そうであるがゆえに、今日、これまでの闘いの教訓を正しくえられず、無原則的な多方面における混乱を生じせしめているのではないだろうか？ 第四章は第三章の日本革命の性質を説明する論文で述べられていることをさらに深く追求することもふくめて述べていきたいと考えている。

我々が階級分析をやるのは、我々の敵と味方を調査分析し、日本革命の性質を規定し、日本革命の方法をさがし出すことである。したがってその任務を遂行するための調査分析にかかわる態度がきわめて重要である。その態度はあくまで「調査なくして発言権なし」「書物主義に反対する」という本質を一貫して堅持しないかぎりか

ならず誤りを犯すことになる。すなわち、「実際調査をはなれどかならず観念的な階級評価と観念論的な活動、指導がうまれ、その結果、日和見主義か妄動主義を生じせしめる」ことになる。我々は過去の活動スタイル、即ち小ブルジョア的、非系統的、その

当時のロシアはブルジョア政府とソヴィエト政府の二重権力状態にありソヴィエトは武装していたがブルジョア政府は武装していなかったために平和移行の可能性が生じた。

「武器が人民の手にあり、外部から人民に加えられる暴力がなかったこと——まさにこの点に問題の核心があった。全革命の平和的発展の道をひらき、また保証していたのは、まさにこのことであつた。」(レーニン全集第23巻)

(ハ) レーニンが「マルクス主義の戯画と」帝国主義的経済主義について論じている例

「……例外として、たとえば、すでに社会革命を遂行した大きな国家の隣のある小さな国家で、そのブルジョアジーが反抗しても無益だと確信し、首がつかぬ方をえらぶならば、彼らが権力をおだやかに譲り渡すこともあるのを我々は否定するわけにはいかない。だが勿論、それよりもはるかに予想されることは、こうした小さな国家においても内乱なしには社会主義が実現されないだろうということである。」(レーニン全集第23巻)

(ニ) スターリンが「レーニン主義の基礎」で述べている例

「勿論、速い将来においてプロレタリアートがもっとも重要な資本主義諸国において勝利し、現在の資本主義的包囲が社会主義的包囲にとつてかわる場合には、その国の資本家達が『不利な』国際情勢のために『自発的に』プロレタリアートに対して重大な譲歩をするを得策と考えるいくつかの資本主義国では『平和的発展』の道はまったく可能である。」「しかしこうした想定は速い将来に関することにすぎない。近い将来にとつてはこうした想定はなんらの、まったく根拠もないものである。」(スターリン全集第6巻)

日の気分で活動をやるという態度を克服し、「大衆を獲得して敵にうち勝つ」という任務につくならば、きわめて骨のおれるこの態度方法をとることが、実は一番近い正道であることにすでに気がつかねばならない。小ブルジョア主義を払拭し正しく主要矛盾をつかみ地道な持久戦を展開し、具体的成果に眼をむけるようにしなければならぬ。

社会経済調査をするのは、正しい階級評価を下して、正しい闘争戦術をうち出すためである。我々のあらゆる調査の対象となるのは社会の各階級であつて、さまざまな断片的な社会現象ではなく、主

なる目的は、各階級の政治・経済状況を明らかにすることである。

我々は各業種の状況を調査するだけでなく、特に各業種内部の階級状況を調査しなければならない（貧農・中農・労働貴族・下層労働者等のように）。我々は各業種の相互関係を調査するだけでなく、特に各階級の相互関係を調査しなければならない（支配階級か被支配階級かのよう）。以上のように我々の終極的目的は、各階級の相互関係を明らかにし、正しい階級評価を下したうえで、我々の正しい闘争戦術を打ち出し、どの階級が革命闘争の主力であるのか、どの階級が我々の打倒すべき対象であるのかを決定することである（注一）。

〔注一〕一九七〇年、入管闘争を媒介にしつつ、地区調査の必要性が唱えられ、部分的であれ実行した所があったが、地区調査の目的が鮮明でなかったのではないだろうか？ 単なる意識調査及び職業区分ぐらいなら、役所に資料は存在する。あくまで我々の調査は階級闘争の発展のためにのみやるのである。又、一方、我々の観点に基づいて十分役所等の資料を活用する能力も身につけなければならない。

〔注二〕毛沢東選集の「書物主義に反対する」「中国社会各階級の分析」「農村調査のはしがき」「農村の階級をいかに分析するのにか」、又は、レーニンの「ロシアにおける資本主義の発展」等々を読まれ、参考にされて、実践的な地区（工場・大学・地方）階級分析を実行してもらいたいと考えます。

中で、検証し、深化又は修正して行くものであることを明記しておくと同時に、まだ一九七〇年の国勢調査が系統的に発表されておらず、やむなく一九六五年の国勢調査等を軸としているため統計学的には、きわめて不十分なものであることを明らかにしておきたい。まず本論にはいる前に日本社会の構造を概略的に把握するために、以下（P.88-90）の統計表を表示しておく。

1. 帝国主義を推進し、積極的に協力している階級

日本の支配者階級であり、アメリカ帝国主義と結託し、アジアの憲兵を夢みつつ、人民の革命的闘いを圧殺し、米帝との帝国主義利害をめぐって、時に問題がこじれることがあっても日米帝国主義者の共同利益のために常に米帝に追随する政策を戦後一貫してとってきた階級であり国際階級闘争の発展で孤立しつつも、日本人民を圧殺し、国内体制を帝国主義的に強化し、米帝の同意のもとで、アジア政策をさらに侵略度を強め強行している独占資本家階級である。この階級は日本人民の目的と相容れず日本革命を絶対認めることのできない階級であり反革命派である。この階級の政治的代表的は自由民主党であり、方面軍として右翼政治集団がある（文化面にも支配者に奉仕する反革命集団がある）。この階級に属する集団は資本金一億以上法人企業の本家としてあるところの役員層約五万七千人プラス高級官僚（国家公務員の指定職を含み行政職二等以上、地方公務員は一般行政職一等以上、公営公企業高級管理者等）二万プラス政治家（社共を除く保守系）三千三百、計八万の層と少数ながら存在する大山林地主及び都市近郊の大地主層である。

〔日本社会各階級の分析について〕

階級分析は現実の階級闘争の方針に結合するものであり、革命闘争と結合するものである。そうであるが故に、階級分析をこころみるにあたってはマルクス・レーニン・毛沢東主義の普遍的階級真理を継承し、現在の世界階級闘争の歴史性と結合し、日本の個性性とが結合するものでなければならない。

したがって、我々は、帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利する時代、プロレタリアート・被抑圧民族が「帝国主義を攻囲する」時代における世界反革命同盟の中軸たる帝国主義本国人の任務を解明し分析する観点を提起しなければならないと考える。我々は次のような観点を提起する。

- (一) 帝国主義を推進し、積極的に協力している階級
- (二) 帝国主義の恩恵を主にささかっている階級
- (三) 帝国主義の恩恵を主に受けていない階級

以上の観点は自らを抑圧民族と規定し、プロレタリア国際主義の観点であり、帝国主義は、より一層富んだ一部の者とより貧困化する大多数の人々との差を明確にするという状況により一層適合している。我々は(三)の階級を革命の原動力とし、(一)の階級を打倒対象とし、(二)の階級を最後の革命の後尾につくのか、それとも反革命に尻尾を振るのかのどちらかに分解せしめる闘いを準備するものである。以上の観点を明らかにし、次に分析にはいつてゆくのであるが、その前に次のことを付記しておく。この分析は、すでに明らかにしているようにあくまで一つのこころみであり、今後の実践的活動の

この支配者階級の私兵たる軍人・警官等の武装集団五七七八千人は強固な反革命思想教育に支えられ、今の所十二分な私兵の役割をはたしている。だが、しかし彼らの出身階級を見るならば中産階級以下が主であり、多くの人が中・貧農出身であるところから、我々の今後の闘いいかんによっては分解も可能であり、反革命行動に対し、消極性又は抵抗をすることも可能性があろう。しかし一般に言われているほどかれらの反革命性は弱くない。なぜなら、そもそも治安部隊用に徹底した教育がなされているからであり、職業軍（徴兵でなく）であり、社会からシャ断されていることも重視せねばならない。

〔注一〕私兵は支配者階級ではなくあくまで道具である。今後深い分析を試みなければならない。

2. 帝国主義の恩恵を主にささかっている階級

この階級は資本主義体制を認め、その中で生活している。資本主義社会内における自由を主張し、資本主義的自由競争の中でこそ自由な発展があり、戦前のようなファシズムに反対し、口で戦争にも反対するが、一方、共産主義を認めることができず、多くの反共主義者が存在する。しかし帝国主義段階にはいると一部の大ブルジョア階級、即ち(1)の階級に一切の富と権力が集中し、次第にこの階級が自由に行動できる範囲がせばまり、独占資本に圧迫され、解体されるか、併合されるかの岐路に常に立たされており、体制内矛盾が発露する原因を持っており、行動においては二つの相矛盾する行動をとる。つまり、日米独占支配者階級から打撃や抑圧（ドル・ショック・大企業への圧迫等）を受けて苦勞を感じる時には、

〔表2〕 1969年衆院選挙集計

自 民 党	22,381,566	32.3
社 共	13,273,130	19.2
公 民	8,764,256	12.7
諸 派 棄 権	24,844,472	35.9
総 数	69,260,424	100%

〔表3〕 労働者の上、中、下層区分(就業構造基本調査)
(1968年 29,306千人中非農林業)

総 数	28,982 (千人)
上 層	2,528
中 層	13,712
下 層	12,742
下層内訳	
常時雇用者で40万以下の人	10,738
臨時雇用者	1,415
日雇労働者	589
山 谷 : 1万人	釜ヶ崎 1万5千人

〔表4〕 専業・兼業別農家数 (単位 千戸 農林省調査)

	総農家数	専業農家	兼業農家	第一種兼業農家	第二種兼業農家
1950	6176	3086	3090	1753	1337
1955	6076	3125	3050	2284	1665
1960	6057	2078	3979	2036	1942
1965	5665	1219	4446	2081	2365
1968	5351	1071	4279	1666	2613

〔表5〕 経営規模別農家数 (都道府県 農林省統計表)

	計(千戸)	05ha以下	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0以上
1955	5839	2306	1964	984	377	209
1960	5823	2275	1907	1002	404	237
1965	5466	2096	1762	945	407	255
1968	5181	1954	1609	906	415	297

〔表1〕 これは国勢調査報告を組替えたものであり「日本の階級構成」岩波新書を参考にしたものである。

階級別労働力人口構成	実 数 (単位 千人)			構 成 比 率 (%)		
	1955	1960	1965	1955	1960	1965
労働年令人口(15才以上)	59282	65324	73136	148.5	148.4	151.4
労働力人口(完全失業者含む)	39908	44009	48294	100.0	100.0	100.0
就業人口(休業中を含む)	39154	43691	47629	98.1	99.3	98.6
A) 資本家階級(=1)+2)+3)	807	1183	1756	2.0	2.7	3.6
1) 個人企業主	73	97	15	0.2	0.2	0.03
2) 会社役員と管理職員	630	991	1629	1.6	2.3	3.5
3) 管理的公務員	104	95	112	0.3	0.2	0.1
B) 4) 軍人・警官・保安サービス員	431	489	575	1.1	1.1	1.2
C) 自営業者層(=5)+6)	21251	20100	18501	53.2	45.7	38.3
5) 自営業者と家族従業者	20894	19675	17909	52.4	44.7	37.1
(a) 農林漁業従事者	15046	13484	11097	37.7	30.6	23.0
(b) 鉱工運通従事者	2463	2749	3017	6.2	6.2	6.2
(c) 販売従事者	2776	2739	2859	7.0	6.2	5.9
(d) サービス職業従事者	608	701	936	1.5	1.6	1.9
6) 専門的・技術的職業従事者	357	425	592	0.9	1.0	1.2
7) 上記のうち家族従業者	11975	10509	9222	30.0	23.9	19.1
D) 労働者階級(=8)+14)	17419	22237	27463	43.6	50.5	56.9
いわゆるサラリーマン層(=8)+9)	4977	6237	8225	12.5	14.2	17.0
8) 専門的技術的職業従事者	1634	1779	2240	4.1	4.0	4.0
9) 事務従事者	3343	4458	5985	8.4	10.1	12.4
生産的労働者層(=10)+11)	8956	12253	14089	22.4	27.8	29.2
10) 農林漁業従事者	798	765	576	2.0	1.7	1.2
11) 鉱工運通従事者	8158	11488	13513	20.4	26.1	28.0
不生産的労働者層(=12)+13)	2733	3429	4484	6.8	7.8	9.3
12) 販売従事者	1409	1790	2558	3.5	4.1	5.3
13) サービス職業従事者	1324	1639	1926	3.3	3.7	4.0
14) 完全失業者	754	318	665	1.9	0.7	1.4
非労働力人口	19373	21288	24841	48.5	48.4	51.4
14才以下人口	29992	23050	25140	75.2	63.8	52.1
総人口=労働人口+非労働力人口+14才以下人口	89273	93347	98275	223.7	212.3	203.5

〔表6〕 農家人口と農業 農外就業者(単位千人)

	農家人口数	16才以上	農業従事者	農業専従	兼業(農業主)
1965	29559	20446	15239	9859	2066
1966	28638	19970	14875	9120	1883
1967	27904	19761	?	?	?
1968	27212	19629	13993	8422	1711

兼業(兼業主)	兼業専従	非就業
3811	1847	3362
3872	1918	3177
?	?	?
3861	2214	3423

〔表7〕 経営耕地規模別戸数の増減(都道府県) (△減 単位千戸)

年次	増減戸数			増減率		
	1955~60	1960~65	1965~70	1955~60	1960~65	1965~70
総数	△15	△357	△288	△0.3	△6.1	△5.3
0.3ha以下	△13	△135	△44	△1.1	△10.6	△4.0
0.3~0.5	△22	△38	△54	△2.2	△3.8	△5.6
0.5~1	△58	△148	△158	△2.9	△7.6	△9.0
1.1~1.5	17	△56	△77	1.8	△5.6	△8.1
1.5~2	27	3	△3	7.2	0.8	△0.7
2~2.5	15	9	15	11.6	5.8	9.6
2.5~3	6	5	12	12.3	9.6	20.0
3ha以上	6	5	20	21.3	14.0	49.0
例外規定	6	5	1			

〔表8〕 北海道経営規模別農家数(単位 千戸) 農林省統計表による

	計	(ha) 1.0以下	1.0~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0~7.0	7.0~10.0	10以上
1950年	234	61	25	32	57	33	14	11
1965年	199	47	19	24	48	31	15	16
1968年	169	37	14	95	37	25	19	23

社会変革を夢みるが、しかし、その行動は常に(一)の階級、支配者階級に対して何らかの援助、ほどこしを要求するのに停まり、しわよせはプロレタリアートに転化(合理化)するのである。一方プロレタリアート・被抑圧人民の闘いが激化すると恐怖し、必死に反人民的策動に出る階級である。

この階級には、中小企業役員(五百万~一億)層三万八千人がはいる。しかしこの中でも上層階級(五千万~一億の役員層三万三千人)は支配者層への地位をさがし求め、一方、中・下層(三三万人)の資本家層は必死に自らの地位を守ることがやっとであり、常に小ブルジョア階級への転落を恐れている。彼らの政治的代表も基本的に自民党であるが自らの地位を守るためであれば自民党にこだわらないという例が大都会で出現しはじめている(中小の下層資本家が美濃部を応援したのも例)。

一方、農村では支配者階級の在村代理人としてある富農・中農上層の階級(二・五ha以上)がこれにあたる。しかし、富農といえども支配者階級の反動的な農業切り捨て政策のため常に不安定なものであり、支配者の政策を持って常にテコ入れしないかぎり自力で富農階級を維持できない。農村における主要な矛盾は独占資本の搾取と農民との矛盾であり、したがって富農層も我々の闘いいかんにかん、農民運動の高揚の中で少くとも彼らを中立化させることは大いに可能であり、一定の条件の下では日米帝国主義を打倒する闘争に参加させることもできると考える。

第三として、十万の管理的公務員層、上層インテリ(大学教授・作家)、上層の医師・弁護士の人々がこの階級にあたる。どちらにしてもこの階級はかならず分化して、或いは左に走って

革命派の後尾につき、或いは右へ走って反革命につくのであり、彼ら独自の方向を持つことがありえない。なぜなら、現在、日帝のかかえている矛盾は、資本主義の最高段階として存在する帝国主義階級における矛盾であり、この解決策は決して自由競争時代の資本主義に歴史の歯車を逆に逆転させることで解決されないのは明らかなのである。今日の矛盾の解決は、一部の政治(日帝)から全人民の政治体制へ、即ち、社会主義へとむかわないかぎり解決できないのである。

る 帝国主義の恩恵を主要に受けていない階級

これは上層としてある「小ブルジョア階級」と中層としての半プロレタリアートと下層としてのプロレタリアートに区分しなければならぬ。

(イ) 小ブルジョア階級の階級

まず中農(一・五~二・五ha)としてある41万戸の自作農が入る。次に資本金五百万以下の小零細企業の役員一、三〇〇万(一九六九年現在)が入る。その他、手工業、主に自営業者又は販売を自営している商店主として下層の知識層(学生・教員・下級公務員・下級事務員)の人々がこれに位置し、いわゆるサラリーマン層と称される八三〇万人の主要な数の人がこの階級に属すると考えられる(林・漁業関係の自営業者の一部がここに入る)。この階級は数の上でも階級性の上でも大いに注目する必要がある。彼らは三つに区分できる。第一の部分は金にも余裕があり、自分の生活をまかなえ、なんと

中産階級にあがるうとしており、その典型は小零細企業主であり、この人々はまだ勇氣がなく、役人もおそれ、頭も低い、革命闘争もおそれ、とりわけ自企業内では恐れる。総じて小ブル右派であり、少数ではあるが革命に対して懐疑的態度をとる。選挙においては自由民主党に入れる人も多くないが、それは決して政策を支持しているというのではなく、義理と人情、人間関係で投票すると考えられる。又、一方決して社会党・民主党を支持する人も少なくないと考えられる。

第二の部分は支配者階級を憎み、いくら働いても生活が苦しくなる一方であると感じており、革命に対してもおそれと参加しないが中立的な態度をとる。今のところこの多くの人々は支配者の世論に動かされておらず、社会に対してむなしく評論をする域を出ておらず。この少ない人が、政治に無関心であり、懐疑的な考えを持っており、不満を色々な形で解消している。投票においても、気分において、社共・自民党に入れ、棄権も多しと考えられる。

第三として、出身階級としては小ブルジョアでありながら、帝国主義政策に対する危機意識と併行しつつ、この間の新左翼運動を遂行してきた。学生革命派を軸とする人々が存在する。帝国主義の恩恵を受ける条件性はありながら、自ら帝国主義の恩恵を受ける立場にあることと闘い、拒否し、日本階級闘争を先導していった部分であり、小ブルジョア左派に位置する。そしてこの人々が本場に革命派になるのか、否かは、この70年代に大きく問われている。この小ブルジョア左派の中には、プロレタリアートの革命性を疑い、不信に思っている部分と革命をやるからには何がなんでもプロレタリアートと結合しなければならぬと考えている二つの大きな傾向

こうした情勢にあつて、日本革命を真剣に考えるのであるならば、どうしても農民と結合し、社会主義労働同盟を実現すべく、準備を開始せねばならないと考えており、貧農に依拠し、中農と団結し、富農を動揺させ、分解させるという戦術を実行しなければならぬと考える。未だ日本の農村には二、七〇〇万(一九六八年現在)の人々が生活しており、多くの人が必ず友となれる人であると考えられる。

(農村の階級分析については、とりわけ各地の中で具体的に検討しなければ観念的で終わる。山林の有無、農業以外の収入がどうか等の等々を十分調査した上でないと農民工作はできないと考える。)

(イ) プロレタリア階級

建設業の生産過程に従事する人が一、一三〇万人(一九六五年)おり、鉱山労働者が21万人、運輸通信労働者二〇〇万、農林漁労働者57万人、総計して一、四〇〇万余の人が主にこの階級に属する工場プロレタリアートである。その他の生産部門に属する人、商店員、販売員等々の人、約六〇〇万弱及び働きたくとも定職のない臨時労働者約二〇〇万、そして完全失業者に近い60万余の勤労労働者もこの中に属するものと考えられる。

我々はこの階級と結合する能力を持久的闘いで実現することを願いとると同時に次のことをはっきり確認しておかねばならない。すなわち、帝国主義本国におけるプロレタリアートは、たとえ革命的であったとしても、やはり何らかの形で帝国主義の色彩をおびているのであること。本常に帝国主義本国のプロレタリアートが革命を闘いとうらうと思うならば、必ず被抑圧民族の革命的闘いの洗いを

が存在する。小ブルジョアが革命的であり続けるには、プロレタリアートと結合し、日本階級闘争を闘いぬく道以外にないという真理が今日問われているのである。選挙においては多くの人が棄権するか、或いは社会党左派にいれるかであると考えられる。

我々はこの量的にも思想的にも幅広い、この多くの小ブルジョア階級をプロレタリアートと結合させ、プロレタリアートの指導に従い、革命闘争にまきこめる革命的な政治を創り出さなければ日本革命の展望はなく、この量的に多数な階級をめぐって支配者と革命派の攻防が常にあり、今のところ支配者は彼らを自分のまわりにおくか、又は中立をとらすことに圧倒的に成功している。

(ロ) 半プロレタリアートの階級

この階級は主要には貧農層(一・五ha(〇・三ha)である四四〇万戸の人々がこれに属し林業・水産・漁業の少ない部分が属するものと考えられる。

我々はすでに明らかにしているように、日本の貧・中農の主要な敵は独占資本家階級であり、貧・中農がかかえている矛盾は、すでに社会主義的農業化以外に解決の道がなく、少くない革命的農民がそのことを自覚し、地道に独占資本と闘い、農業問題を研究していることを知っている。そして帝国主義者の農業切り捨て政策はより一層加速度化し(そのことは同時にさらに日本の経済構造が侵略化・帝国主義化していることでもある)ここ五年間で現在の五百万戸の農家が有している五八〇万余ヘクタールの耕地を取り上げ、一〇〇万戸の富農育成を実行し、四百万戸の農家を追い出し、独占資本の低賃金労働に提供しようとしている。

進んで受けるようプロレタリア国際主義の思想を实践的に闘いとらねばならないこと。すなわち、我々は次のことを明確に意識化することが問われているのである。

支配者階級はアジア諸国の収奪の恩恵を労働者階級に与え、労働貴族を作り出す一方、労働組合官僚を労働管理の方面軍と配している今日、我々に主に問われていることは「そもそもプロレタリアートとは何を意味するのか」ということである。この解答の一つとして次のことを論じたい。ある人が労働者階級を代表できるかできないかを分けるにはなによりもまず、その人の思想、つまりその人が自覚的に毛沢東主義を活学活用し、マルクス・レーニン・毛沢東主義で自己のすべての行動を律しているかどうかをみなければならぬ。これは決定的かつ根本的なことである。階級所属はたしかに重要な条件ではあるが、しかし決定的条件ではなく、決定的条件はその人がプロレタリア階級の革命思想を持っているか(活学活用し、努力しているか否か)どうかということである。たしかに階級所属を重視しないものは唯物論者ではない(我々の過去の活動はえてしてそうであった)。だが所属だけに気を配って先進的な思想を軽視し、毛沢東哲学の巨大な能動的作用を軽視するならば、形而上学の泥沼におちこむであろう。自覚的にマルクス・レーニン・毛沢東の哲学で自らを武装してこそ、ひき続き革命をおこなうことができ、たえず前進でき、そして正しく世界を認識し、世界を改造する革命者の能動的作用を十分はたすことができるのである。重ねて論じておくが、決して労働者階級は自然発生的に先進的な思想を生みだすことはできない。これはマルクス主義の観点である。レーニンは早くからマルクス主義は労働者階級が自然発生的に生みだしたもので

なくて、革命的実践の中から総括された科学的理論であると指摘している。たしかに労働・農勤労人民は素朴なプロレタリア階級の感情を持っており、実践の中で素朴な唯物論と弁証法思想を多少もつことができるが、それは弁証法的唯物論や史的唯物論を把握することとはまだ大きなへだたりがある。それゆえに必らず真剣にマルクス・レーニン・毛沢東主義の学習をやり、活学活用しなければならぬ。思想方法・工作方法の重視とはとりもなおさずこのことを意識的に追求することである。決して「困難性」に頭を下げてはならない。

我々はプロレタリアートとは資本主義社会において一番収奪され、抑圧され、そして一番革命を希望し、自覚的に何らかの闘いをやらんとしている人々のことであると確信する。日本においては、いわゆる量的な労働者は多数存在しているが、しかし、プロレタリアートとして、対自化された労働者の闘いが未だ十分展開されていないと考える。

我々は「表三」で示されているような下層労働者即ち、山谷・釜ヶ崎や工場における臨時工・社外工等々に依拠した活動を展開し、組合そのものの体質を質変させねばならないと考える。千三百万近くの下層労働、即ち「帝国主義の恩恵を受ける条件性が主要にない層」に基盤を作り出し、「帝国主義の恩恵を拒否する労働者」の闘いと組織を構築することが必要であると考える。

階級分析とは、敵と友を明確にすることである。革命とは、一番抑圧されている人が一番欲し、自ら闘いとることである。

友・同志とは、帝国主義の恩恵を主要に受ける条件性がなく、帝国主義の恩恵を拒否し、闘いえることのできる人であり、その可能

性を作り出す中でできるものである。以上をもって、第四章を終了します。

第五章 われわれは何をなすべきなのか、何からはじめるべきなのか

—組織方針にかえて—

この章で論じることは、第一章から第四章までで論じてきたことを、我々はどうのように実行していくのかを明らかにすることである。我々はこの論文で論じたことが組織活動として展開されない限り、深化・発展せず、一つの論評にしか他ならないことを熟知している。

組織活動を展開するということは、とりもなおさず、現実の社会に対して、対決し、解体・止揚するという社会の変革・改造に歩を進めるといふことである。同時にそのことは、自らをも改造し、変革するということである。本論文の冒頭で述べているように、この理論も烈火の如き革命実践の中で、改造され、解体・止揚される運命にあり、我々自身もこの闘いの中でさらにゆるぎない革命主体へと高められるものと確信するものである。

現在我々の前に横たわっているのは、未曾有の混乱であり、革命的左翼の非系統的な分散である。我々はこの混乱した時代に生きており、又、この混乱を生じせしめた六〇年代後半からの、新左翼運動と総称される、日本階級闘争史上きわめて大衆的な、攻撃的な闘いを第一線で担った主体でもあり、我々は今日の混乱を自然成長性にまかせたりするのではなく、必ず日本階級闘争の本流へと到達せしめるべく、今日を「成長の病」と位置付け、革命的な潮流を獲ちとってゆくことを確信するものである。我々は多くの革命的同志、友人諸君とともに、革命的原則を堅持し、マルクス・レーニン・毛沢東主

義に代表される、世界プロレタリアート・被抑圧民族の闘いに学び、日本階級闘争の歴史的発展を担い、自己批判—相互批判、自己点検を、団結—批判—大団結の原則に基づいて革命主体へとうち鍛え、日本人民の共同の任務である、日本社会主義革命の達成にむけ、片時も大衆から遊離することなく、人民のために誠心誠意奉仕する革命路線会得に努力するものである。

次に解放委員会、協議会、独自の党建設の三本柱について論じておきたい（但し、この場においては概略にとどめる）。

(一) 解放委員会

—↓整風推進部隊である

各地区・各単産・各大学等において我々の思想を宣伝し、思想方法・工作方法を重視し、団結—批判—大団結の原則に基づいて、大衆運動を構築し、現在の混乱を止揚し、新しい潮流を作り出す任務を実践する組織形態である。即ち整風推進部隊である。委員会内部

には指導体制があり、全部（又は全国）の代表者会議も存在する組織内容をとる。我々の思想―方針に同意する人はできる限り、共に組織活動を展開し、矛盾を正しく内部矛盾として処理する中で、組織活動の発展を闘いとするものである。

解放委員会は党機関ではない。したがって、各地区・各単産・各大学において、それぞれの特殊性に依りて、解放委員会を創出し、各個人バラバラの工作活動を解体し、解放委員会として組織的に方針を検討し、組織活動の中で相互批判を実行し、系統性のある活動方法を実行せねばならない。

解放委員会の中心的活動任務は

(1)無原則的な内ゲバに代表される革命派内部の小ブルジョア的思想・活動方法を解体し、正しい思想方法・工作方法の会得にむけた活動態度を確立すること。

(2)プロレタリアートを信じ、多くの革命的農民、勤労者と団結―批判―大団結の原則の中で結合し、人民に奉仕する思想・工作方法を会得せしめること。

(3)権力に対して、常に警戒し、全生活を革命的警戒心の基で統括し、自らを階級形成せしめ、革命主体とならしめること。革命戦士としてあるまじき自供病的態度を一切、聞かない・見ない・言わないの三つの「ない」を実行せしめねばならない。

以上の三点に代表されることを正しく、自己の全生活領域において実践し、組織内で自己点検・相互点検を実行することである。

〔注〕後日、解放委員会内部においては、解放委員会工作ノート及び規律、組織生活要旨を配布する。

(二) 協議会

協議会は現在の全領域における自然発生的な混乱を目的意識的混乱に転化し、「成長の病」を正しく階級闘争の発展の源泉とするための機関である。

協議会には二つの質的に異なるものが存在する。

第一は党建設の重要な環としての協議会である。すでに第一章において明らかにしたように、日本の現状は、好むと好まざるにかかわらず、党建設を考え、実行している人々が多数存在しているというのが現実である。我々はこの現実の承認から出発し、我々と共に共同して革命という任務につける対象であるならば、互いに活動を点検し、政策を統一しつつ、すなわち大衆闘争の中で相互点検をし、党派闘争を文字通り成長の泉とするために、きわめて原則的な、プロレタリア思想に基づいて、討論する場を意識的に創出し、その機関を協議会とするのである。

日本における党建設は、同心円の拡大ではかちとれない。我々は一方では広範な統一戦線を創出するが、いま一方では党的相互止揚を意識的に展開する。なぜならば「八派会議」を総括しているからである。我々は同床異夢的な党派連合、即ち、相手のスキを見て背後から切り捨てる式の内ゲバを止揚しなければならぬと、真剣に考えており、その総括から協議会を提出し、実践するものである。いま一つは、大衆運動の構築（統一戦線）にむけての重要な環としての協議会である。地区・単産・大学等において革命的サークル団体・グループが存在する。我々はこのことなら解放委員会として組織活動に参加してもらい、その中で矛盾を正しく解決してゆき

たいと考えるが、現実はそのような可能性は無と見える状態であると考えており、この大衆的な各サークル等が、その地区・単産・大学等の大衆運動の発展のために具体的な活動の中で共同行動・共同工作をとり、相互点検を実行し、相互止揚をかちとるといふ任務を遂行する場としての〇〇地区協議会、〇〇大学協議会を提起するものである。

〔注〕この二つの質の異なる協議会建設については後日解放委員会内部において、協議会工作ノート及び規則・目的・任務概略を配布する予定である。

(三) 独自の党建設

我々の力量は、質量ともに未だ小さなものであるが、その主体的力量に依りて、党建設にむけた活動を開始してゆく考えである。

我々の党建設の道は「人民に奉仕する」といふ思想建設の実践的過程でもある。即ち、規律があり、マルクス・レーニン・毛沢東主義の理論で武装し、自己批判の方法をとる、人民大衆と結びついた党。このような党に指導される軍隊。このような党に指導される革命的階級・革命的諸党派の統一戦線。この三つは、我々が敵に打ち勝つ主要な武器でありこの三つの武器を作り得る過程そのものが党建設の過程であり、発展でもあるのである。我々はこの実践のたに、(1)理論と実践を結合する作風、(2)人民大衆と密接に結びつく作風、(3)自己批判・相互批判の作風を会得するために、第二章で論じているように、思想方法・工作方法を重視し、実践的に会得することに努力するものである。

我々は党の全政策を規定する綱領を準備するために、現実の運動

の中で、まず、それぞれの戦線（労働戦線・農民戦線・反弾圧戦線・生協等の流通関係・学生戦線・沖繩問題・部落解放運動等々）の綱領的政策を準備するために系統的な党員を配置を実行し、我々の力量をつける中で綱領的統一を多くの革命的人民となすものである。以上をもって第五章を終える。

最後に本論文のまとめとして次の文章を付記するものである。

日本革命の勝利にむけて闘いぬこう！

我々はより多くの人民と結合する為に、旅をしなければならぬ。旅をするとはとりもなおさず、具体的闘いを組織的に開始するということである。その闘いの中で過去の同志、友人と云われた人々と再会できることを強く希望するものである。

戦場でつちかった友情は、戦場を媒介にしない限り発展しないのである。我々は旧ML同盟の同志的關係が崩れたのは今日考えるに受け必然であったと考えている。いま問われているのは、同じ誤りを二度とくり返さないことである。このことはとりもなおさず、自己を階級戦士と位置付ける人、又は努力する人であるならば近い将来、必ず再会できるものと強く確信するものである。

戦場の中で！！ 闘いの中で！！

我々は自らの不十分性、革命主体としての弱さを卒直に自覚し、自らを前衛とせしめるべく努力するものであり、とりわけ人民の分断を策する帝国主義者を「ニクム」ものである。

帝国主義者がニクイ！！ 闘いを組織せよ！！

学生運動の進むべき道

「プロレタリアートは権力獲得のための闘争において、組織のほかにはどんな武器も持たない。」（レーニン）

一、歴史の転換を知り、これをしっかりと把握し、自らの任務を知らねばならぬ。

現実には生き運動する世界は、一九三〇年代よりの先進国革命の持続的敗北とその党の修正主義への転落の中で唯一「革命の中心任務と最高の形態は武力による政治権力の奪取であり、戦争による問題の解決である」（毛沢東）というマルクス・レーニン主義の普遍的真理を堅持し、民族解放社会主義革命の旗を押し立てて戦い抜いた中国・朝鮮・ベトナム人民総じてアジア人民の切り開いた「帝国主義が全面的崩壊にむかい、社会主義が全世界的に勝利にむかう」時代である。今やベトナム・インドシナ革命戦争はアメリカ帝国主義を盟主とし日本帝国主義を盟友とする世界反革命勢力を打破する質と拡がりをもった大進撃としてあり、世界革命の現実性を全世界プロレタリアート人民に示している。

それ故に追いつめられた帝国主義は強さの証しとしてではなく、崩壊しつゆくものの断末魔のあがきとして、全世界の反革命勢力とあらゆる皆殺しの生・化学兵器を動員し、ベトナムの全港湾を機

雷封鎖し、病院・学校・住宅地への無差別爆撃、ダム、堤防への意識的爆撃をくりかえし、皆殺し作戦を遂行しているのだ。革命の何物にも負けぬ断固たる前進、これへの逃げ場のない恐怖、だからこそ自らの延命のためありとあらゆるあがきをくり返すのである。

だがベトナム人民は不屈である。彼らが「私たちにとっては最悪の時期はすでに過去のものだ。将来に希望があるからこそ苦しくとも樂觀主義をもって戦うことができるのだ」（毎日グラフ）と語る時、我々は世界革命への彼らの前衛としての役割・貢献の偉大さと、なによりも今必要なのは帝国主義本国プロレタリアートの世界革命への個々の任務遂行なのだという責務を知るのである。それは、小ブル平和主義的反戦などではさらさらなく、帝国主義本国プロレタリアート人民がアジア人民に連続し、その最後の勝利に向っての現在の世界史的地平を理解し、帝国主義打倒を帝国主義心臓部で実現するという自らの任務を鮮明に自覚し実践することに他ならない。ベトナム・インドシナ革命戦争が切り開いた情況に依拠し、継承・発展させること、追いつめられた帝国主義を追撃し、帝国主義心臓部での死闘という世界革命の新段階を主体的に切り開くことが求められている。世界はまさしく激動し、歴史は人類本史へむかい転換

しており、その革命主体に帝国主義本国プロレタリアート人民がなることが要求されている。

そうだからこそ、帝国主義心臓部—日本における革命運動は、現在の混乱と混迷よりたち直り、自らの国際主義的任務をはっきり自覚し、運動の再生と再建を勝ちとらねばならない。日本階級闘争がより一層広く、深く、根本的になっていく中で、軍事を契機としてこれに応えんとした革命的左翼がむかえた危機、その「成長の病い」は放置しておくならば革命総体をも再起不能なまでにむしばんで行くだろう。「成長の病い」としての「指導の危機」はもう一歩もゆずれない所まで革命をおいこんでいる。だがこの中で再生の糧としての人民の戦いは日帝の帝国主義的再編に抗して、広く、根強く、工場・職場・農村・学園・社会等いたる所、あらゆる領域で形成され、いよいよ持続的大衆的に戦われている。それは、体制内化を完了し、修正主義政党として完成した社共、武装闘争に恐怖し、蜂起に敵対する合法マルクス主義へと一っそう純化する革マルはもとより、かつて革命派と呼ばれた諸派では牽引不可能な政治—軍事の根本的な広さと深さを内包したものであり、彼等の運動はそれに答えんとした革命的左翼の混迷の中で指導もなく戦われている。

それはうたがひもなく、革命的左翼の再生とそれによる指導を必要としているし、それなしには、自然成長性に埋もれたまま各個撃破されてしまう。これらを一本へまとめあげ、政治の全体性を附与すること、これは革命的左翼の再生による以外にない。だからこそ我々は敗北の中より立ちあがり、再生と再建をこれら実践への対応の中で開始し、求められている課題に戦いながら答えねばならない。実践に身をおき、その中で敗北の原因をさぐり、党建設の糸口をつ

を明らかにしたい。

パンフ「我ら不死鳥のごとくはばたこう」第三章で明記しているように日本革命の対象は日本帝国主義・アメリカ帝国主義であり、原動力は帝国主義の恩恵を主要に受けていない階級であり、任務は社会主義革命に勝利することであり、革命の性質は社会主義革命（プロレタリアート独裁）である。全学生戦線はその持てる力をこのためにこそ動員せねばならない。日本革命遂行の綱領的任務の中へしっかりと自己を位置づけ、自己の任務を確認し、敢然と実践すること、そこに全学生戦線を混迷より再生させる学生運動のすすむべき道がある。

我々は現地平を自らの革命への燃えあがるような情熱と意志で戦いとしてきた。だがすでに現地平は単なる意志と情熱、目前の闘争の全力遂行を軸とした戦術左翼。大衆運動主義的組織では一歩も前進しえないのだ。党の実践—革命の実践とは情熱と意志をブルジョア権力を打倒する当面の目的たる武装蜂起へと系統的・計画的に導く革命的戦術実現のために裏付けられた科学として証明するものである。綱領—組織—戦術という全体から規定される科学に導かれた大衆路線の方法をとる指導によって自然発生的闘争は目的意識的な闘争の源泉として運動の発展を勝ち取る。我々はこの全体性を獲得するために全力をつくさねばならないし、ML解体後の全作業はこのためにこそあった。我々はパンフ「我ら不死鳥のごとくはばたこう」をその思想的・組織的苦闘の主体的能動的実践と、その成果として提起し、実際の・実体的保証たる組織建設を「思想方法・工作方法に基く党建設」としておこなってきた。我々の路線は人民の怨念や心情に依拠し、奇兵隊等の類型を求め戦士の条件を夢想する

かむこと。我々のとるべき方法はこれのみである。大衆路線をもって我々は実践へ翔く。

二 学生運動の戦略的任務

大衆路線に基くこの実践への対応とその中より党建設の糸口をつかむことを、学生戦線においても追求せねばならない。とりわけ現日本階級闘争の発展段階においては学生MLは重要であり、現在の混迷より一刻も早く立ちあがらねばならない。日本階級闘争を現在にまで高め、その苦闘の中で革命派を体現してきたのは、全学連—全共闘と続く学生運動であった。五十八年、日共を革命的に否定する中で登場した革命派はその日共学生細胞に出生の秘密をもつという歴史的条件性と歴史的境界の中で敢然と実践の烈火の中に身をおき戦い抜いた。その実践の内容は系統性と計画性をもった党の実践—革命の実践としてはあまり未熟であったが、しかしまたその大衆運動への徹底した奉仕—実践は革命の実践をつちかうものであり、この実践性故に我々は六十年から七十年代へと続く、戦ったが故の苦闘と敗北、幾多の同志の血の犠牲の中より、真の革命主体と戦う党を建設する実体的基礎を得たのだ。学生運動はその歴史的任務を血まみれの実践として断固追及した。我々はこのことを承認せねばならない。そしてだからこそ、現在の革命的左翼を規定した主要な実践基盤たる学生運動を総括しぬき、その内にはらむ否定要因を抽出し、かつその狭い階層運動より規定された革命主体の政治の狭さを克服する術を追求することが求められている。それへの一方向からの追求として学生運動の階級闘争全体の中の位置と戦略的任務

「孤立した英雄」小ブルロマン主義のそれではなく、日本革命の性質と原動力をはっきり確認しており、社会主義を作る現実的基礎—その骨幹たるプロレタリア階級を信じそれと一体に進む科学である。我々の組織は、プロレタリア世界観の獲得に基き、堅忍不屈・堅忍不拔な基礎戦士の自発性・自覚に基く「汎ゆる側面から今すぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をただの一瞬間も忘れない」(レーニン)計画性・系統性を体現する途についている。

今や、この間の全成果を敢然と実践することが我々に求められている。革命の原動力たる帝国主義の恩恵を受けていない階級を呼びさまし、意識化させること、「革命戦争は大衆の戦争であり、戦争をするには大衆を動員する以外になく、戦争をするには大衆に依拠する以外にない」(毛沢東)ことを真に実践せねばならない。社会主義日本を建設するには、帝国主義の恩恵を主要に受ける条件のない労働者・拒否する労働者を広範に創出し、これを指導階級として広範な反帝統一戦線を結成し、この基盤にたち組織された暴力として武装せる支配者階級としてプロレタリアを階級形成する大衆闘争と武装闘争の結合として人民戦争で敵にたち向う以外ない。学生戦線はこのためにそのいっさいを駆けねばならない。原動力たる人民を動員し組織することによって帝国主義打倒を可能とするより、全活動をここにふりむけねばならない。

この間、学生運動が階級闘争の先頭的役割をはたしてきたこと、その血みどろの実践の中で犠牲をおそれず戦い抜いてきたこと、それこそが現地平を切り開いてきたこと、革命主体はここに依拠してきたこと、これは事実である。だがこれは固定して評価してはならず革命主体は運動の発展に共に、なにが主力軍であるのかを明確化

し、その依拠する部分を定かにせねばならない。現在の發展段階は、帝國主義心臓部でのプロレタリア権力樹立を目ざし、全国全戦線で蜂起の準備をする時代、蜂起の陣型を構築する時代である。その主力軍は、プロレタリア人民であり、学生運動は一方面軍である。このことを絶対忘れてはならない。方面軍のみで突撃することは、その主観的決意、その献身性はどのようにも高くともやはりまちがっている。それは革命の対象・原動力・任務・性質を無視した無政府主義・戦闘団主義におちいり、軍事ロマン主義として全面開花する。

戦争に勝利するためには、この間先頭部隊としての役割を果たして、戦争に勝利するためのには、この間先頭部隊としての役割を果たして、方面軍としての学生運動が、主力軍を真に決起させよう高度の質を堅持しつつ「敵の要塞の正規の攻囲」へ向って戦い抜くことである。

先頭部隊としてある方面軍として学生運動は今こそ「ある青年が革命のかどうかをみるには、何を基準とするか、何によってその人をみわけるか。基準はたった一つしかない。つまり、その人が広範な労働大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行するかということである」(毛沢東)ということを明記し、主力軍と方面軍の區別を解いた結合ではなく、方面軍を総体としてまとめあげ、その軍団としての戦闘の波及力をもって「したがって強力な部隊を形成するには全国の知識青年や学生はどうしても広範な労働大衆と結びつき彼らと一体にならなければならない」(毛沢東)ことを実践し、蜂起の陣型創りに貢献しなければならぬ。

そのためにはまず我々は学生運動の混乱と混乱・分散に終止符をつけ、革命的左翼の下に統一を勝ちとらねばならない。学生運動は先頭部隊であり、その位置は重要である。だからこそその役割をさ

らに効果あるものにするためにも、全国的統一を一刻もはやく勝ちとり、方面軍としての主力軍と一体になり「敵の要塞の正規の攻囲」へ向うため総突撃を開始せねばならない。これは我々の緊要の任務であり、「左」・右の日和見主義との全面的な激烈な組織戦である。全国の先進分子に現情勢を知らせ、固く団結し統一の必要性を認識させ、革命的左翼の指導の下、学生運動を構築しよう主力軍決起のために、「人民に奉仕する」学生運動を創出しよう。

三、戦略的任務を実現するために、現在の学生戦線の状況を知らねばならない。

全共闘運動は壮大であった。その闘いが人民大衆に与えた感動と共感、大衆運動に与えた「生きた運動体」としての影響は大きかった。それは一握りの青白いインテリ活動家の戦いではなく、具体的要求・具体的敵をもつ圧倒的労働大衆の戦いであり、色とりどりのヘルメットに象徴される数千の大衆的武装部隊をもつ戦いであった。その具体性は人民の限らない共感を生んだ。日常的に抑圧されている中で学問・自由・自治を取り返すという戦いは抽象化された原則性一般の押しつけとしての具体性をもってあり、それはポツダム自治会自身のものでしたの具体性をもってあり、それはポツダム自治会の否定としてブルジョア民主主義の実体を暴露していった。学生運動史上戦いがこれほど広く戦われ、これほど暴力的に持続的に戦われたことはかつてなかった。

それはブルジョア民主主義とは帝國主義者の基本的支配秩序であ

り、敵の武器であることを学問・自由・自治の要求という個別課題の追求の中で暴露していった。個別的矛盾を具体的に戦う中で現実的・实际的に敵を認識したことは、自己が正しく敵と闘う方法を示したものである。この認識の方法は極めて実践論的であり、書物・書斎の中の「プロレタリア的人間の論理」とは全く違う正しい方法である。これこそが「実践の側から、実践とのかかわりにおいて、実践との統一として我がものになった思想」(毛沢東)として「生きた思想」の獲得方法なのである。実践過程の上での「自己否定運動」は正しいものであり、自己の小ブル性を克服せんとする表われである。このように具体性・現実性において矛盾を認識し、具体的に自己と対象の対立の契機を鮮明に定め戦うことは敵と戦ううえで「生きた思想」を自己に血肉化することであり、それ故運動は持続的・永続的に戦われ、「生きた思想」はその日常的戦いの中で更に「革命」されるのである。このことは、革命が被岸のものから現実のものになるにすぎない、戦いは日常的なものになること、我々の生活領域までも変革されねばならないことを知らしめもした。

以上、全共闘運動は、学生という階層の革命への自然発生的な要求であり、自己を革命主体へと打ち鍛えんとした感性的表現であった。このようにいうのは、結局、全共闘運動は当時の大学がおかれていた条件、学生という階層の条件によって可能だったものであり、それ故、権力の弾圧の強加の中でバリケードが撤去され白色テロが荒れ狂い、条件が奪われるとその運動もあれほど大衆性・暴力性・持続性・自己否定をも提起していた運動であるにもかかわらず解体してしまっただけからである。

全共闘運動は日本階級闘争の中に画期を示し、偉大なひらめきを

示しながらも、学生運動を一步も出さずものではなかった。戦いは、ブルジョア民主主義は帝國主義支配秩序であることを学問・自由・自治というポツダム自治会の範囲で暴きつつも、それはブルジョア民主主義總体を打倒する質をえることはできなかった。帝國主義個別支配秩序との戦いとして国家権力と激烈に戦った。帝國主義個別支配秩序の質を思想的・組織的に勝ちとることはできなかった。自己否定も学生存在の否定・精神労働と肉体労働の差別的克服を語りつつも、それを実現するための立場、すなわち、プロレタリアの階級的立場、階級関係・階級闘争という立場からの把え返しには至らなかった。その暴力もその限りでの暴力であって「帝大解体・二重権力」というスローガンに象徴された権力論としての「学生権力」や「個別権力闘争」論は、小ブルロマン主義の表現であり、ここにすでに階級闘争の一面面での有効性を固定化し、革命の対象・原動力・任務・性質を無視し、はてはプロレタリアへの不信、マルクス主義への不信から人民の怨念や心情に依拠し、奇兵隊等に組織の類型を求め、戦さの条件を夢想する無政府主義・戦闘団主義・軍事ロマン主義の萌芽があると言える。

全共闘大衆の多くは再び帝國主義支配秩序の下に戻った。また戦いを継続した部分も一方では「現実の階級関係を抜きにした共同体・コミュニティ」的傾向、自己の階級的基盤に無自覚であり、全体の階級闘争の發展を考えない安易な自己批判・告発運動に流れる傾向、すでに労働者階級と結合する時代であると称して学生運動の革命的役割を認めず現実の戦いを放棄する傾向、全体の階級関係を分析せず階級矛盾を差別一般に流し反前衛主義、戦術のエスカレートのみに興味をおぼえ、観念的な戦士の条件を論ずる傾向である。総じて

プロレタリアートに対しての不信をもち、眞の階級関係を分析せず、何から始めるべきなのかの問いを提起しない傾向」(「我ら不死鳥の如くはばたこう」)に陥っている。これは日本階級闘争に大きな足跡を示しながらも学生運動を一步も出ることができなかった全共闘運動の内にはらむブルジョア的の全面開花である。我々はこの小ブル性と徹底して戦わねばならない。この小ブル性が革命の我身をほろぼすまでに成長してきていることに気づいたならば、思想・政治・組織・運動・態度全体にわたって戦い、「思想方法・工作方法」の正しさをもって徹底して克服しなければならぬ。これを克服するのは指導の問題であり、革命的左翼の責務である。我々はこれら小ブル性の克服を「学生運動の戦略的任務」で明らかにしてきたように、方面軍と主力軍の結合、すなわちプロレタリア大衆と結びつく中で、革命の全体性の中で、革命の方向の一致をかちとる中でなしとげなければならぬ。「まだ大衆の革命闘争と一体にならず、まだ大衆の利益に奉仕し、大衆と結びつく決意を固めないうちはとか主観主義と個人主義の傾向をおび、かれらの思想はとかく空虚で行動もとかく動揺的である」(毛沢東)。学生運動がその構成する階層、その出身階級のブルジョアの残滓を残したまま戦うことは小ブル性が我身をほろぼすまでに成長した今日、許されないことである。革命が根本的時代を迎える前に、その前段階としての「蜂起の陣型」を構築する時代だからこそ、必死の努力で一刻も早く何としても小ブル性を打倒しよう／＼学生運動を革命の根本的に向へ導くために一刻も早く革命的左翼の学生運動を創出しよう／＼

鮮明にし、革命的実践へと運動を媒介することを開始せねばならぬ。共産主義を大衆の生活領域から具体性の中から湧き上る意識の発展を基礎に結合させ、系統的・計画的に指導すること。帝国主義支配秩序の下の戦いが、大衆の意識を自然成長性の前に押しとどめる作用をもつことをはっきりと認識するなら、指導方法は抽象的政治のあてはめ、単なる革命原則の無媒介的押しつけとしておこなってはならず、自己と対象との対立の契機を弱めるような、かつての全共闘運動はなやかし頃の党派の指導はくり返してはならない。それは大衆の自立化それ自身が党派の指導不足への挑戦であり、あれほどの大衆性・暴力性が突はもっぱら自己の確立とその立脚点を階級関係の全体性の中でとらえるのでなく、急進主義を党派性とした戦術左翼反対派の体質を色濃くもった革命的左翼の狭い政治から、もっともっともっと大衆の中へ、下へ、そしてより深く活動の基礎と政治をもち、当面の目的たる蜂起へとあらゆる領域、あらゆる場所から系統性と計画性をもって大衆に謙虚に学ぶ中で進む「綱領―組織―戦術」の全体から検証される組織の必要性と政治―軍事指導を求めていたことに無自覚だった。革命が被岸のものから現実のものになる中で、政治も原則一般の抽象的なものから大衆それ自身のものに、彼らが主人公となることを予告するように具体的生活領域にまで接近して行くのかかわらず、我々は自己の狭さ故に、ノンセクト大衆にはバトウを、具体性には抽象性を対置し、決起した大衆を党派のセクト主義と政治主義のもとに細分するのみであった。この狭さが、まさしく指導の危機こそが、大学闘争における敗北を、そのみならず人民の奮激はより一層全国の工場・職場・農村・社会等でまきおこっているにもかかわらずそれを自然成

四 革命的左翼の学生運動を構築するために、どこからどのようなようにはじめるべきか。

国家独占資本主義体制下、帝国主義的再編の末端までの貫徹は、日常的要求・経済的要求・民主主義的要求であっても帝国主義支配秩序と即対決となり、その限りで即国家権力と衝突する。そのことは戦い部分の集中や共感を呼びおこし、国家権力の存在を急速に意識化するという条件性をもちつつも、逆に運動を自然成長性におしとどめるようにも作用するひとつの斗争、階層別の闘争がその個別の枠をとびこえ眞の全人民的政治闘争へと発展するのを押しとどめる。だからとていかに戦闘的に、大衆的に戦われようと、その戦術が異なる「破壊の思想」であつたりするならば、その権力との衝突はプロレタリア階級の立場、人民の階級の立場とは疎遠なものである。我々は厳密にプロレタリア的立場から党の実践―革命的实践へと運動を導かねばならず、見せかけの戦闘性に拝跪してはならない。それでは全人民的政治闘争にはなりえないのである。

我々は大衆の生活次元からわき上る奮激をも、その自然発生的な闘争をブルジョア権力打倒へと向けてより意識的に導かねばならない。ただ大衆闘争、大衆実践の先頭に位置する丈でなく、ただ情熱と意志だけでなく、全ゆるる領域、全ゆるる場所からの自然発生的戦いに対し、その具体性の中で自己の中で自己と対象との対立の契機を長性にまかせてしまっているのである。

自然発生的な闘争は革命闘争の源泉である。大衆闘争の野放図な暴力的發展はよいことであり、我々はこの中で運動に自然発生的に組織され、組織し、大衆運動の波とその成長を同じくするよう大衆運動主義的党建設ではなく、明確に究極目的たる共産主義社会実現の結節環たる当面の目的―蜂起へ向け、「蜂起を組織する党のための戦い」を独自に系統的におこなう中で、その党の必要不可欠な能力たる自然発生的性を目的意識性へと転化する系統性と計画性を發揮すれば、更なる物質的貫徹力として機能する。自然発生的な人民の生活次元の戦いを机上の理論でバトウすることはやさしい。だが我々は突出したいと思うなら、より広く、もっと下へ、もっと深く入り、あらゆる領域あらゆる場所の運動の芽を目的意識化し、自然成長性を克服し、自らの戦術を物質化する死にも狂いの工作が必要なのだという「戦争の弁証法」を知らねばならない。戦いの力学を知らず、大衆が社会の主人公となる事件としての革命を忘れ人民の生活の場・実践の場より召還すれば犯罪的である。とりわけ現在にあって運動の自然成長性と戦い、指導の危機を克服するため、我々には実践の混乱と戦うという実践への対応の中で、その具体性より政治を作りあげ、革命の実践へと打ち鍛えねばならない。学生戦線において我々ははじめにたしかえること、一歩からやり直すことを恐れてはならない。我々はかつて全国学生運動中、最強の軍団を作りあげた経験をもっている。そしてその栄光と悲惨の中より敢然と再生し、パンフ第三章に基づくように、綱領的認識の統一において、具体的に打倒すべき権力、それへの原動力、樹立すべき権力を意識化し、それへむけての全ゆるる戦いを系統的に作りあげ、

学生戦線の統一とその方面軍としての全国的確立をかってをはるかに凌駕する量と質でかちとらねばならないし、必ずなしとげるであらう。そのための第一の組織的任務は、全国各大学に細胞を創出し、全国的結合を勝ちとることであり、この任務をなしとげ、かつ政治指導を責任をもってやりきるためにも、各単産・単位は自らの特殊性に応じた組織形態をもつ中で早急に指導部形成・幹部政策・ヘゲモニー工作を定め、大量のオルグを創出せねばならない。この配置に基づき、学友を「当面する目的とを利益とを達成するために闘うが、しかし現在の運動の中であって同時に運動の未来を代表する」(マルクス)ように鍛えるべく、自らを学生戦線を戦線配置の場として活動する共産主義者として確立し、学生の中へ恐れず共産主義を広めることを目的として、どこかのボックスの中で左翼かぜをふかせ、「自分では革命に対して功労があると思ひこみ、古顔かぜをふかせ大きな事はやれないのに小さなことはやらず、仕事はだらしがなく、学習はずぼらである」(毛沢東)というような政治ゴロの手から運動をとりもどし、学生大衆の「指導」に対する信頼を回復せねばならない。全ゆる運動を拡大し、全ゆる領域、全ゆる場より、具体的・現実的なもの(クラス・サークル・自治会・ゼミ・民主的権利等)を意識的に追求する中で、共産主義との結合を血肉化させ、大衆がより具体的に自己と対象との対立の契機を鮮明にし、そのような大衆の意識の発展を軸に運動を展開すること。運動の遂行にあっては、運動の高揚期・退潮期を問わず(特に、高揚期にこそ次にくる冬の時代に備え)、独自に「武装蜂起を組織する党のための戦い」を組織することを必ず行い、これこそが運動構築の主体的条件であることを理解するならば、意識的に組織路線として非公然プラ

の中には直接的な階級矛盾は反映していきからであり、又、自己の階級性そのものに対して無自覚に陥るからである。

五 今秋期を日本階級闘争の再生と解放委員会の組織的前進のため死力を尽し、死活をかけて戦い抜こう

ここにおいて「学生運動の進むべき道」を主体的に切り拓く解放委員会の戦いが今秋期いかに展開されるべきかを「ペン」の許す範囲で述べておきた。

「8・5 インドシナ革命戦争支援集会」をもって我々は日本階級闘争に公然とその姿を現わした。それはほんのささやかな一歩であり、解放委員会はきわめて若く組織としては「幼年期」である。我がこのことを「謙虚」に認めなければならぬ。その上でこの一歩がいかに重要な深い意味を持っているのかも知らねばならない。

8・5 集会は日本階級闘争の再生へ向かう歴史的必然を具現化する契機であり、革命的左翼を混迷と分裂と内ゲバの陰うつな時代から団結の時代・人民の健康な力に依拠して戦う時代へと止揚する契機である。偉大な時代の幕明けなのだ。我々はこのことを強く認識し、自らに課せられた歴史的任務の重さを再認識せねばならない。この重責を荷うことを敢然と決意せねばならぬ。

解放委員会はきわめて若く、組織としては「幼年期」である。だが、このことはなんの否定的条件ではない。解放委員会の若さは、六十年代を革命派の最先頭で常に戦い抜き、権力闘争の時代へと一

クに指導された合法拠点として、クラス・サークル・自治会等合法的大衆の機関、また各大学闘争機関にも組織員を配置しなければならぬ。各大学闘争機関は必ず大衆の戦意意志に立脚し、我々のメンバーを中核とした指導部を形成し広範なる大衆との結合を決して失わないようにし、指導の正しさと大衆の積極性との結合による高度なものへの発展を大衆路線として行うことが必要である。

以上の組織的準備と共に発動される我々の政治と今後の学生運動の基本的方向性をまとめあげれば、パンフ「我ら不死鳥の如くはばたこう」にあるように、

① 一切の活動を小ブルジョア主義の克服・自己を革命主体として成長させることに位置する事。

② 階級闘争の発展過程における学生の役割、又は闘争形態を美化したり、固定化するのでなく持久的な階級闘争にたえうる主体形成、すなわち自己を共産主義者として高めあげる系統的な闘い、能力を準備し、組織的に実行すること。

③ プロレタリアートを信頼し、プロレタリアートと結合することを目指す、同時に現実の階級関係を分析するならば、極めて学生革命派の任務が重いことを自覚しなければならぬ。

④ 学生大衆のあらゆる場所(サークル・クラス等)にはいり、政治教育をしなければならず、地道な活動を保障し、大衆闘争と武装闘争を結合しなければならぬ。

⑤ 学生に対する政治活動は全ゆる条件を利用し徹底化させなければならぬ。なぜなら現実の階級矛盾・抑圧を実体的に教育する一番よい方法だからである。

学生を学園におしとどめてはならない、なぜなら学園そのもの

層の飛躍を七十年代へ託して倒れた反同盟と多くの兄弟戦士の血の教訓を基礎に、その栄光と悲惨を真に血肉化し、マルクス主義の日本の確立の中で、「武装蜂起を組織する党」を思想方法・工作方法に基づき建設し、人民の戦争、人民の軍隊を創出せんとする地平の若さである。体制内化を完了し、修正主義政党として完成した日共内官本修正主義一派、武装蜂起に敵対し合法マルクス主義へと純化する革マル派、反スタ観念論の裏証的破産の連続の中でさらなる内部空洞の危機を政治技術で、小ブル的告発―自己批判運動と暴動で乗り切らんとする中核派等の「七十年代における六十年代型党派」の「老成」とは位相が異なる若さである。だからこそ我々は、この若さを日本階級闘争を再生し止揚する任務をはたす唯一の方法として現下の諸実践の凄まじいまでの混乱に身を置く中で打ち鍛えねばならない。解放委員会にとって困難こそ「成長の糧」であり苦難こそ成長のための「泉」である。敢然と烈火に身を置き「実践の側から実践とのかかわりにおいて実践との統一として我がものになった思想」(毛沢東)を獲得し、決して武装闘争から召還することなく戦うこと、ここにこそ我々が進むべき道がある。

では、今秋期の実践過程とは何なのか。それはすでに「8・5 集会」・相模原米軍戦車撤出入阻止闘争としてあり、基調で明らかなくごく全般的概略は、真の国際主義の立場にたち、ベトナムーインドシナ革命戦争を断固支援し、帝国主義本国プロレタリア人民の世界革命における個々の任務としての帝国主義心臓部での革命の烈火をぶちあげること、そのために日帝の侵略反革命体制と断固対決し、それを実現しうる組織的能力をもつ政治潮流を創りだし「武装蜂起を組織する党」建設へ向け一歩を踏み出すことである。我々は実行

委員会に結集する兄弟と団結！批判！大団結の路線をもって真に固く団結し一体となって歩まねばならない。それは相模原米軍戦車搬出阻止闘争を戦い抜く中で政治基調をより鮮明にし、組織的に強化されるだろうし、これを軸に「9・16」を「三里塚」一般に流し「支援」と「農民に学び」に運動を押しとどめんとする中核政治等に対し、明確に「三里塚東峰十字路機動隊殲滅一周年」として三里塚闘争が示した偉大な閃き、「生きた思想」を持った革命主体を建設する正しい方法、大衆闘争と武装闘争の結合という革命的左翼再生の端緒を正しく把握し、「9・16機動隊殲滅を生んだ三里塚闘争」として我が血路の記念碑として刻みこみ、更なる発展へ向け勤労農民と結合し社会主義労農同盟へと組織しなければならぬ。我が潮流の正しさは明らかである。革命的左翼の混迷の中で不死鳥の如き健康な力が正しくたくましく育っていることを人民は知るであろう。さらに進め！

我々は10・21の間の苦闘の全成果を集約しきり、政治的・思想的・組織的に固く意志統一された政治潮流として登場しきり、大胆な進撃を派兵阻止闘争へと開始しなければならぬ。この10・21までに解放委員店が実行委に結集する兄弟と共に死力を尽した組織戦を貫徹し、質量共に組織的前進をとげることは至上の任務である。10・21に全左翼戦線に衝撃力をもった、すなわち組織的内実をもった政治潮流として登場しきるためには、10・21に至る期間に死力を尽さねばならない。この組織的内実があつてのみ、派兵阻止闘争からの怒濤の進撃は可能となる。「組織せよ。組織せよ。死力を尽して組織せよ」(レーニン)。この組織戦こそが、我政治潮流の死活をきめることを明記し、敢然と戦い、組織戦に勝利しよう！

今秋期は日本階級斗争の面期となる。六十九年後半より幾多の追求と敗北の中で模索された飛躍に込められた蜂起の陣型構築へ向け

た戦線配置は整うであろう。我が解放委員会と我が政治潮流の前途に偉大な戦いがまつている。しかしまたこれは平坦な道ではありえない。政治警察との昼夜を分かたぬ闘争と「左」・右の日和見主義との死活をかけた組織戦に我々が勝利するか、否か。我が政治潮流の登場は、これが根本的なものであり根源的故に増加する弾圧と攻撃にみまわれるであろう。だが解放委員会はML解放体とその言語に絶する困難の中で、その地獄のような困難を産湯として生まれた鬼子であり、その成長の糧は唯一敵との死闘、組織戦である。この攻撃の中で敢然と闘い組織すること、死活をかけて打ちぬくこと、このことのみが前進をかちとる。「われわれは自己の内部にある全ゆる軟弱無能な思想を一掃すべきである。敵の力を過大に評価し、人民の力を過小に評価するあらゆる見方は誤りである。」(毛沢東)。しかし。人民に依拠し、その最先頭で戦うこと。ここに解放委員会の組織的前進はあり、我が潮流の進むべき道はある。「革命は強力な革命を作り出すことによって前進する」(マルクス)。

今秋期を死活をかけて戦い抜き日本階級闘争の再生をかちとろう！
烈火の試練で更に解放委員会をうち鍛え、圧倒的に組織的前進を勝ちとろう！

(注)

この小文は我々の学生運動における戦略的任務を一般的に述べたものであり、個別課題にまで至っていない。また組織建設の具体的・特殊の・個別的方法にはふれていない。それは我々の現段階の実践の量と質が規定するものであるからだ。この小文にその部分を加

わる時、それは我潮流が日本階級闘争に歴然と覇をなし、人民の健康のなかに依拠した進撃を貫徹している時であろう。

烈火の時代のために、その日のために、進め、人民の信頼のもとに革命的左翼の学生運動を創出し、その全国的統一を勝ちとり、その全活動を主力軍の決起のためにつき込み、徹底的に人民に奉仕しよう！

農業—農民問題を 戦略的に組織せよ！

解放委員会農業フラク

前提的認識の統一のために

一九六七年十月八日を起点とした六〇年代後半から七〇年に至るまでの激闘を経て、今日、日本階級闘争は新たな質を呈示すること獲得することが要求されている。新たな獲得するべき質とは、すなわち、社会の基層から共産主義を組織し、表現するところのトータル性としての政治である。政治とは思想である。我々は、激闘の四年間をその最先頭で終始一貫して闘い抜いてきた者として、この激闘のもつ意味を革命と共産主義の世界性の見地から、一年有余にわたってこの期間に、とりもなおさず、政治党派としてのM.L.同盟が整風M.を提起し、その中で自派を崩壊させることすらをも含める大きな起伏を生みだしつつ、なおかつ整風M.が展開されてきた期間といえる一総括してきた。そして、我々は、政治というものが（ブルジョア階級にとっては当然とはしても）新左翼をも含むところの、いわゆる左翼総体によって歪められていたことに注目せざるを得なかった（この総括の全体的内容は「我ら不死鳥のごとくはばたこう」に展開されているので省略し、ここではその象徴的観点を示すことにした。）

階級社会にあっては政治（権力）とは、社会の在り方、方向性を決定する生命線である。それは、人民、民族、国家の人類史の本史へ向って発展させることもできるし、民族、人民、国家を無謀な侵略戦争にかりたてて消耗させ、歴史の発展を押し止めることもできるものである。ところで、我々は政治権力の奪取を遠いある日のこ

とと考えることはできない。我々のブルジョア階級、帝国主義、反動派—世界反革命支配に対する闘いは、その闘いの一步一步の中に政治権力の奪取を孕むものである。このように考える以上、我々はブルジョア階級の政治に対するプロレタリア階級の政治を広く日本の人民を構成する全階級—階層に呈示しなければならぬ。政治とは社会の全てである。ブルジョア階級は、自らの姿、存在の仕方似せて政治を發動する。ブルジョア階級は、社会主義が全世界的に勝利し、帝国主義が全面的に崩壊していく時代におけるブルジョア階級は、自らの政治権力を維持するために世界的に結びつつ全勢力を傾けているのである。その結果、ブルジョア階級は、世界的には後退しつつも各国的には、自国の修正主義党及び世界に悪魔の手をさしのべている社会帝国主義の助力を得て勝利をおさめている。我々の日本は、その国内的—国内的に勝利をわがものにしていく少数の帝国主義の一つである。その政治権力の発動は、深く、広く全面的であり、そのあらわれ方は、狡猾で、陰険で、強引である。ブルジョアマスコミを媒介としての世論操作（連合赤軍へのキャンペーンを見よ）、日中国交回復M.における変り身の早さとその行動の幅広さ等を例にとるだけで、日本ブルジョア階級の政治の内容と質がわがかりやうなものである。

敵階級によって、このように政治（権力）が発動されているとき、それに対するべき我々の側からの政治はどうであったのか？それは、反対派、しかも左翼反対派としてのそれではなかったか。日共—官本修正主義一派がブルジョア階級の政治にガンジガラメに金しばりされているのと、新左翼であった我々が、この点について全く異質であると言いきることはできない。それは、整風運動の中で自己

崩壊せざるを得なかったM.L.同盟の七〇年以降の姿を見るだけでもわかることであろう。人民の死活を制する政治を發動するべき党が崩壊（解体ではないのだ）することなどあり得ようはずがない。我（すなわち、総体としての新左翼）が、運動的に、組織的に崩壊し得たのは、我々の発動してきた、従って我々の体現してきた政治が一面的であり、プロレタリア階級の政治の小さな一部分を表現（実力闘争一つとっても、この小さな一部分は、日本階級闘争自体にとつては過小評価されるべきではないが）していたにすぎなかったからなのではないだろうか。だからこそ、我々がかつての新左翼に位置した自分達の組織と運動を総括して、わずか一年有余で再生することができるのである。何故なら、日本階級闘争は諸政治党派をこえて社会に根を張っている人民によって担われており、それは、我々に再生するための物質的基盤を与えてくれているのである。我は、このような基盤を再生における内的原動力としてきたのである。只、次のことを忘れてはならない。再生とは単なる復活ではないということ。そして、一度目は悲劇たりえても、二番目は茶番であり、喜劇でしかないということも。我々の再生を、新左翼（運動）を復活させるためにあるのではなく、止揚するためなのである。くりかえして主張するが、政治とは思想なのである。ブルジョア階級の世界観（政治権力を媒介して表現される）に桔桕する。プロレタリア階級の世界観（政治権力）を表現し、獲得しよう。それは、人民を社会主義社会建設にむけて組織するための、戦闘的組織と運動にとつての最大の武器である。

農業―農民問題の戦略的重要性 についての我々の見解

前段でも述べたように、我々はプロレタリア階級の政治（権力）を、あたかもモザイク状にして表現することはできないし、また、そうしてはならないと考えている。勿論、だからと言ってあることないこと大言壮語せよ、と言っているのではないし、また、そうするつもりもない。只、我々は、どんなに微力を現在の存在であつても、ことがプロレタリア階級の政治―思想に触れる限りは、ブルジョア階級はもろろのこと他のいかなる階級、階層に対しても、寸土もゆずらず対応しなければならぬと言っているのである。この小論例外ではない。そんな大したことを言うのではない。ここでは、我々の一年有余の総括作業によって獲得された観点、すなわち、農業―農民問題が日本社会主義革命にとって戦略的重要性を有していたのであるという観点にもとづいて提起されるのである。

「日本におけるプロレタリア階級の政治（権力）にとって、農業―農民問題を欠落させたり、避けて通ることはできない。」このことに気がついたから、我々は、どういふふうに気がついたかを初歩的に示す次第である。

それでは本題に入ろう。我々の綱領的論文「我ら不死鳥のごとくはばたこう」の第一章において、三里塚闘争（第一章）、「三」の「ロ」、パンフレットP16以後）についての若干の総括を提起してゐる。ここにおいて、我々は次のように述べている。すなわち、1

ないのである。それでは、我々は、初歩的分析の結果として何を待たのであろうか。くりかえして言うが我々のこの方面において得た成果は原初的である。しかし、例えそれがいかに原初的であつたとしても、一粒の種が、その内部にやがてうつつそつとした葉を茂らせ、花を咲かせ、結実するための全ての内因を有しているように、我々の原初的な成果も、やがて革命闘争の高揚に貢献し、社会主義的労働同盟を結果させ、日本社会主義革命の勝利に至るための、ほぼ大部分の成分（敢えて全とは言わないことにする―我々が生命を注いでなそうとしていることは一粒の種に對比されるほど単純ではないから…）を含んでいるのである。従つて、我々は、提起される問題を軽視する様ないかなる態度、思想にも反対する。

ところで、我々が農業―農民問題を戦略的に重要視するのは以下のよう理由―観点からなのである。すなわち、

(一) 労働者、農民が社会主義革命に向けて同盟をくめること、

(二) 農業は国家の基礎であり、社会主義革命後においても自力更生を確立しなければならぬこと、

(三) 都市下層労働者と結合するということは、農民問題を不可分の要件としてゐること（農村出身の下層労働者、社外工、季節工―臨時工が少なくないのである）、

(四) ブルジョア権力の私兵（自衛隊、機動隊等）は、概して貧・中農出身が多く、彼らを解体し、中立化し、革命派に工作することは農民問題について取り組むことを不可分の要件としてゐること。

(五) 新全国総合開発計画（田中の日本列島改造論も同一の階級性を有している）に代表される日帝の帝国主義的土地利用に対して

我々は農民、農民の持久的な革命的闘争に対してあまりに無自覚であつた。あまりに本當の農民の姿に対して無知でありすぎた。」

2、「三里塚闘争は、まさに持久的に闘いぬかれ、日本階級闘争史上に、誰ひとりと言えども否定しえない金字塔を創り上げた。とりわけ、一九六九年十一月決戦以後、大きな戦略的拠点として闘いぬかれぬものである。我々は、三里塚闘争が中農を中心とする土地防衛・不売闘争としてあつたものが、七〇年に入り、とりわけ七一年第一次強制収用闘争を結節環としつつ、土地所有者としての自己を解体・止揚して、革命主体として、その後の闘いを展開していることを見る事ができる。（現象的には、共同経営、少年行動隊の登場、青年行動隊の闘争の全面への突出等々）。この地平こそ、戦後すべての基地闘争、土地防衛闘争、すなわち「平和と民主主義」闘争がいつに突破できず、帝国主義者に屈服せざるを得なかつた歴史を突破した地平なのである。」と述べているのである。1は、とりもなおさず、農民問題に無自覚、無知であつた自己（その組織と運動）に対する自己批判の立場にたつたが、農民問題について再考する立場が必要であることにつながる。2は、反帝闘争としての巨大な意義の存在と、その運動主体、およびその運動主体が革命的に転化していく過程と、そこに見られる階級の意味を再認識するべきことを把握した立場を示しているのである。まさに、「我ら不死鳥のごとくはばたこう」において述べているように、我々は、自己のかつての無知を卒直に認めねばならない。と同時に、プロレタリア階級の一員として、例え初歩的であり、原初的ではしかないとしても、農業―農民問題が今後の日本階級闘争において有する意味について分析を開始し、得られた成果の水準から行動を開始しなければなら

闘いを組むためには、農民との結合ぬきには不可能であり、反「公害」闘争もまたしかりであること、

(六) 農民との結合を媒介としつつ漁民（日本は半漁半農が多い）との結合を考えねばならないこと、

(七) 全日本農民組合の下部の活動家と学びながら結合し、社会党を下から解体・止揚するための道につく必要があること、

(八) 地方自治に対しても、農村工作の中からかわつていかねばならぬこと、

の八点が、それである。既にこのスローガン化された八つの観点だけでも、新しい日本階級闘争の夜明けを創出せんとしている人々、及び抑圧と搾取の最も過酷な条件下にある人々は、それなりに我々の意図しているところの主な意味は理解できであろうと考える。しかし更に若干のことを八点夫々に對して述べてみることにする。即ち(一)と(二)は、世界性を与えられた、(三)については若干の帝国主義国で例外は有り得るが…規定である。ロシア十月革命以降（ボルシェヴィキと左翼S・Rとの戦争も含めて）、中国革命を経過して、プロレタリア階級は増々農民の存在を軽視することはできないことが鮮明になってきているし、このことが良く解からない部分（及び党派）は現在の世界革命の推進部隊が、被抑圧民族による民族解放闘争にあることが理解できず、先進国革命主義を主張してかえって人民の認識を混乱させていることにすら役立っている。そして、このような観点(一)・(二)から把握されなされた帝国主義心臓部での革命をいかにするのかという問題意識とも、これ等の部分は無縁である。国際共産主義運動―世界革命に於いては、帝国主義本国の労働者、人民と被抑圧民族とを対立させる（その結果、排外

主義を拘えこむものであるが、立場を客観的にはとることを意味し、日本階級闘争に於いては、帝國主義本國日本の労働者階級と農民及び小ブルの各階級とを対立させて、日本の人民分断支配に手を貸すことを意味するような立場を我々は取らないようにしなければならぬ、というこの真の意味を我々は(一)から見い出せるだろう。(二)については、社会帝國主義、修正主義党がハレンチにも声高に主張している。社会主義的(？)分業論を承認しない人々ならすぐに理解できるだろう。革命発展段階論を実行しつつ、不断革命・共産主義社会への前進を追求する全ての人々は分業論を承認することなど出来ないことは、既に自明の理である。(三)内迄は、プロレタリア階級の政治(権力)を發動しようとする部分、現下に於いて考慮せざるを得ないことである。昨日迄クワを持っていた手が、ハンマーを持つようになったら、農民ではなく労働者だなどとしたら、その人(党派)は、言葉の世界を飛び回る魑魅魍魎である。同時にブルジョア政治権力の実体への考察を欠いたプロレタリア階級の政治(権力)を組織・表現する人(党派)は砂上の楼閣に住む度し難い善人(反革命への道を善意でしき詰めるような人々)であるし、帝國主義的土地利用、資源利用、生産手段利用に於ける日本帝國主義の特別な関心を見抜けない人々(党派)は、田中の「日本列島改造論実行委」のブレインとなってしまうだろうし、あらゆる種類のしかも極めて多様な質を持つ排外主義、差別(公害企業)の労働組合がどんなものか少し考えてみてくれれば良い)に対して無力であろう。(四)は、夫々について若干の差はあるが、今後の我々の組織的獲得目標にあたるものである。社会党(広ければ日共内宮本修正主義一派に対しても)の政治的影響力と我々のそれは、既に多方面、

多側面に亘って相容れなくなってきており、我々が新たな政治(権力)を發動するならば同一基盤を社会党と食い合うことになるということは疑いの余地がない。勿論統一戦線以下の共同行動については、まだ当面社会党とも共に出来ることは言う迄もない。しかしいずれにせよ、上からのではなく下から、即ちその基盤に於いて社会党を解体止揚することは、自己の政治内容が人民階級、各階層に波及するに従って急務となってくるのは目に見えている。従ってこれは、その時々を待つ種類の問題ではなく、現下から意識的に追求すべきことなのである。そうすることが、矛盾の処理を正しくしていくことにもつながるのである。以上によって、ほぼ我々のこの項に於ける主な見解は明らかにした。

このようにを観点、あるいはこれに類似した観点で既に多くの人々及び組織が、農業・農民問題にかかわりはじめていることを、否既にかかわっていることを我々は知っている。我々はこのように真摯な人々(組織)と共に、問題意識と分析視点を共有することを媒介として、結びついていかなければならぬであろうと考えている。

尚、我々は以下のものを展開内容として今後さらに実践のなかで追求していくことを付記する。

- 現段階に於ける農業・農民問題に対する試論的分析
- 農村を注視せよ
- 調査視点の確立へ向けて

1 以上 1

闘争報告

釜ヶ崎 夏期合宿報告

釜ヶ崎の暑い夏

☆七月三〇日(日)晴 ××大学建築現場 A組

起床六時 片付け仕事 マンボ二六〇〇円+八五円(交通費)

八時半から四時四五分(休憩一〇時、三時から四〇〇五分)

昼メシ一日の丸弁当・サバ缶

ポスト(円柱のささえ鉄棒)や鋼管バター(角柱)・角バター(木材の角柱)やベニヤ板や雑材(木ぎれ)などを片付ける仕事であった。日曜だったのでほとんど人がいなく割合静かだった。田宮寅彦の本を持ったおもしろいオッチャンがいて色々話をしてくれた。

オッチャン曰く「××大はおとなしいところや、京大はうるさいけど、あそこはインテリが多いな。」「大学なんて金持のボンボンがいくところや。高校までいったらええ。」釜の労働者には大学生は一樣に金持ちのボンボンに見えるのだろう。又、彼らは大学などおよびもつかないほどの貧乏なのだ。

毛沢東は『湖南省農民運動の視察報告』の中で農民は自分達が誰にどれだけ抑圧されているかよく知っている、と述べているが釜の労働者もわかりである。「鈴木組は悪い。あれはヤーク(ヤクザ)や。わし、いったことあるけど角材もってて『早よ働かんか』いう

てドツキ(なぐり)よる。ちょっとでもサボったら天引きよる。あんなひどいとこないわ」まさに鈴木組は悪徳手配師の代名詞である。

このように釜の労働者は最も良く敵と味方を見分けることのできるプロレタリア階級である。又、彼らは権利意識が非常に強くこのA組も最初二五〇〇円で、帰りは送らないし(釜まで送るのが慣例で、そうでない場合は交通費が出る)、交通費も出なかったそうだが、労働者達が要求して二六〇〇円と交通費をかつたそうだと素晴らしいではないか。

☆八月四日(金)曇 ××大学建築現場 A組

起床五時四五分 片付け マンボ二六〇〇円+八五円

八時半~四時四五分(休憩一〇時、三時から四〇〇五分)

昼メシ一弁当(梅干・塩焼魚・ゴボ天)

五日ぶりにA組へ行った。この間のオッチャンもきていた。彼はなかなか話好きで色々話をしてくれる。

今日の話の重点はこうである。彼は暑くて寝つかれない日はよく天王寺公園でアオカンするそうだ。仕事を休んだ時も昼寝をしているそうだ。昼寝をしていると手配師がきて起こして仕事に誘って行くそうだ。最近では夏休みのバイトで学生が手配師をやっているらしい。

い。つまりいくらかで手配師に雇われて天王寺公園なんかをうろつき、(釜の)労働者とみたら仕事に誘ってやるのである。しかし、こういう手配師にひっかかるとんでもない目にあうのが常である。そうだ。僕はこの話を聞いて学生にはとんでもないヤツがいて、そういった労働者を喰い物にして遊興費をかせいでいることに腹立たしさと恥しさを感じた。これは主に学生生活家の問題であって誰の為に闘争をするのかさえ不明確にして、又現実の最も抑圧・搾取をうけている労働者のことを無視して(口では語りながら)ひとつも結びつこうとはしない。もっぱらプチブル層に依拠することで増々観念的になっていくのである。それは最も先進的な部分ですら釜のメイトだとか闘争があるとするが、釜の労働者に依拠しようとか学ぼうという気はさらさらという現実||差別の反映であろう。

☆八月一日(釜)雨のち曇 冷蔵庫(神戸港) B 運輸
起床五時四〇分 冷凍食品運搬 マンボ二八〇〇円

八時(五時)休憩ナシ
昼メシ(魚フライ・梅干・ウインナソーセイ・ココ)

土方と本船はだいたい経験したので今度は冷蔵庫を経験しようといってみた。倉庫が冷凍室になっていてマイナス二〇〜二五度というオソロシイところであった。仕事は冷凍食品を冷凍室から出したり入れたりすることであった。ネコ車を使って冷凍室へ運びこむのであるが最初入ってみてあまりの寒さに身が縮まった。むこうから暖房服はかしてくれただがとも間に合わない。はじめ腹具合がおかしくなってきたに足が地下足袋を通してジンジンしてくる。しまいには手の関節がいたんでくるという始末であった。仕事がつらいのではなく寒さがこたえるのである。とくに夏場は外気との温度差が

五〇度近くあるので体の具合が悪くなるのは当然だ。こんなところでも釜の労働者はアブレまいと行くのである。こういうところでは雨の日でも仕事があるからだ。逆に言えば雨天の日はこういうところしかないのである。僕は仕事が終わってから頭がいたくセキが出て仕事になかった。労働者達は「こんなエライとはは残業せんほうがええ。定時で帰ったほうがええ。エライケタオチャ。」と言っていた。もう二度と行きたくないようなところだった。

西巻 浩

▽血、汗、そして怒り

▽序 文△

ギラギラと、真夏の太陽が、スモッグで汚染された大都會の頭上から、ほこりっぽい人間社会に、その現実世界を嘲笑するかのごとく、一直線に、そして、三角錐を描きながら、連続的に人々の胸をさして行く。ある人は真直ぐに早足で横断歩道を通りぬけ、またある人は、昼食の準備で買い物にきていたり、またある人は、暇な時間をつぶすかのように、梅田付近をぶらぶらしている……。

俺は社会の現実にまともに接した事がなく、ただ大学という一定の枠からのみ、いかにも現実を知っているかのように、これまでの活動を行ってきた。俺が知っていた現実、とりわけ自分の認識過程は、駅付近で見かけるような「社会」の光景であり、もう一つには、本等の教条的な引用であった。つまり、俺自身がその「社会」に存在する一種の「大学」という世界の一構成員だったのである。一般的に表現すれば、「小ブル」ということになるのが、そういう我々

が、いったいどのような位置にあるのか、また、どういう人に依拠するべきなのか、また、自己の小ブル性とはどのようにすれば克服できるのか——という立場に立たねばならないのか。それらの問題提起の上に、釜ヶ崎の労働者と共に仕事をする中から、資本主義社会の矛盾が最も集中している現実に触れ、自己の思想点検に踏み切ることにした。

釜ヶ崎労働日記

八月七日 —くもり—

A・M 六・〇〇 起床

④仕事内容 — もたもた(土方と積荷を兼ねる)

⑤中郵組 ⑥賃金 — 二、七〇〇円

⑦八・〇〇〜一七・〇〇 休憩一〇・〇〇

一五・〇〇

⑧昼食 — 飯場AおかずVたら干物、ソーセイ

今日初めての仕事をしたが、かなり疲れた。内容としては、薬で珍らしい方らしいけれども、俺の能力・経験からは今までで最高である。

仕事が終わって、いっしょに働いていた釜のおっちゃん、車の運転手のムチャクチャ運転により、手首を深々と切った。しかし、現場には薬も用意してないという、全く頭にくる現実に触れたのである。釜の労働者にとって、手首は重要なところなのに、向こうの方では、「明日もう一日こい。楽な仕事にまわしてやる。」などと、全くぶざけた態度である。まともなことを信じてみることもできないし、感謝料も出すわけでもない、小がらなおっちゃんもカンカ

八月八日 —くもり—

A・M 五・二五 起床

④本船 — 船での荷役(黒鉛)

⑤三、六〇〇円 ⑥八・〇〇〜一六・三〇

休憩 屋一時間だけ

⑦日の丸弁当AおかずV魚天ぶら・大和煮・塩っぺ

昨日は初級中の初級の仕事だったが、今日は中級の仕事をやった。何と表現すればよいのか——ただ、疲れた。の一言に尽きる。仕事、何度「死ぬんじゃないか?」と思ったことか——しかし、釜の労働者たちは、「この仕事は、同種では楽なほうや。……」と。四〇キロの袋に入った黒鉛の粉を網のようなものに積むのである。重いだけではなく、体中は真黒になる。船底だから風も全く来ないのである。何度もさぼろうと考えて、仕事を休んでいると、釜のおっちゃんにどやされた。「みんな疲れとんや。おまえらだけ疲れとんやないで、汚ねえまねするな」と。この一言は非常に考えさせられた。釜の労働者は、何も好きでやっているとんやない……しかし、さぼることは当然で決して悪いことではないのである。どうしてこう、どやされたのか?——複雑な気持ちで頭がいっぱい

になったが、とにかく釜のおっちゃんの一言もあったので、今日は仕事をまじめにやった。話に聞くと、釜の労働者の多くは、いか

にしてさばるか。という考え方が正しい。このような矛盾の解決方法を見つけて出すためにも、これからもっともっと綿密な調査活動を行うことが重要であろう。

八月一日 一雨のちくもり

A・M 五・三〇 起床

④冷蔵庫 ⑤坂部運輸 ⑥二、八〇〇円

⑦八・〇〇〇〜一七・〇〇 休憩 昼のみ

⑧日の丸弁当人おかずV魚フライ・ウィンナー・塩こぶ

零下二二度という温度の中で、一五〇キロ前後の荷物をネコにせて運ぶ。品物は冷凍食品(魚・かつおぶし等)であるが、そんなに重くは感じなかったし、汗もほとんど出なかった。しかし、凍えつくような寒さのため、土方等の汗水流す太陽の下での仕事になつてしまった次第である。足はメタメタに冷え込むし、うす着をしていて自分にとっては、背中の冷え込みが低賃金でこき使われることに、いっそう怒りを覚えるのである。そういうわけで適当にさぼりながらやった。さぼっている時、釜の兄ちゃんが話しかけてきた。「自宅から来たんか?」「いや、友だちの所にいそうらうや。」「ええな。俺も広い所に住みたいわ。俺の住んでる所は一畳やもな。たまには広い所で寝泊まりしたいわ。」「うん………」というような対話をかわしたけど、どや、に住んだことのない俺にとっては、何と答えてよいかわからなかった。こういう労働者の怒りを少しでも知ろうと思ったら、俺もどや、に入り込むべきである。

釜ヶ崎労働合宿参加にあたり

「知識人は、労働大衆に奉仕しようとするからには、まず、労働者農民のことがわかり、かれらの生活・仕事・思想をよく知らなければならぬ。……もしも、労働者や農民としようがい顔をあわせないとことなら、それはひじょうによくない」(毛沢東)

私は学生であり、それも学生運動をやっている人間であり、日々「党一軍一統一戦線の三つの宝とは……」とか「労働者階級に依拠しなければならぬ」などと口にしてはいる者である。ところがこのように「労働者階級……」を語る場合、生きている、具体的な労働者というものが脳裡をかすめもしなかったばかりか、時には「消耗した」と口走ることもある。心の中で「日和ってしまおう」などと考えだす仕末である。自分にとって「革命」「労働者階級」が観念の中でかたちづくられてきた以上、いくら激越な調子でわめきたてていても、再び、観念の中でそれを捨象してしまえば今まで何もなかったかのような顔をして歩くこともできるわけで、これが小ブルジョア知識人の脆弱性なのである。だが自分の存在をこのように超客観的にあれこれ分析してみても仕方がないのだ。すでに小ブル知識人が主観的に静的に存在しようとしても、もともと世界と歴史はそれを許さない。去るも地獄、残るも地獄となってきた。この世の中で我々小ブルたち、特に存在的には小ブルジョアでありながら真剣に社会の事物を把握、自分の場所から客観的世界の改造に着手しようと、あるいはしているものはどういう方向の中で何をなすべきなのか。

そこで我々は次のことを無前提に認めなければならない。「この

労働合宿の経験の総括はまたのちに。

東 方
ひがしがた
まもる 守

世は階級社会であり、現象するのと否とにかかわらず、すべての社会的現象に階級の烙印を押されてないものはない」ことを、「プロレタリアの世界観でなければブルジョアの世界観である」ということを。つまり、あれか、これかの問題であり、中間的なゴウモリ的な立場はありえないであろう。

ここまでくればあとはなにをなすべきか。それは自分の思想的、実践的立場をはっきりさせることである。だが、部屋の中で一人端座して目をつぶり、マルクス・レーニン・毛沢東等の字句を想い浮かべれば、自然に形成されるなどというものではない。自己改造とは自分を徹底的にプロレタリアートの立場、プロレタリアートの世界観に不断に身を置くための一つの階級闘争である。なぜならば、困難性ももたながら断固としてやらなければならない自己改造はブルジョアとプロレタリアートの階級闘争、路線闘争の内的反映であるからである。そしてこの自己改造は実践の場で行うことはできない。

そのような問題意識を持ちつつ、その実践の方法として「馬に乗って花見をする」式ではあるが、資本主義制度からもっとも収奪され抑圧され、「市民社会」でさえも抑圧の一翼であり、労働からの疎外の権化のような釜ヶ崎日雇労働者の実際に入っていく、彼らの生活・仕事・思想をよく知ろうと思う。だが「知る」だけにとどまるのであれば学者先生の調査研究と何ら変わるところがない。釜ヶ崎労働者の立場から出発しなければならぬ。

五月二十八日からの釜のアンコたちの暴力手配師、ポリ公たちとの果敢な闘争の質を自分のものとするべく自分の観点、立場を変えていくつもりである。

△ 『解放通信』創刊号を解放委員会政治理論機関誌として発刊します。すでに、同主旨の論文等は別にパンフとして発行されておりますが、多くの同志、友人諸君の目にふれるのはこれが最初であります。今後、財政の可能な限り、次号も早めに出す予定であります。

△ 本号の内容は未だ不十分であります。すでに我々は公然と解放委員会として登場しており、実践上、どうしても我々の基本的な総括視点を提起することが内外ともに要求されてきていることから、緊急に発刊しました。そのため、きわめて不十分な所がありますが、今後我々の実践を通して随時、訂正、又はより分析を深め内実化して多くの人々の期待に応えうるものへと充実させていきたいと考えています。

△ 多くの同志、友人諸君、とりわけ旧ML同盟と何らかの関係にあった諸兄からの連絡を強く願うものであります。

△ 解放委員会の活動は、8・25インドシナ革命戦争支援集会を皮切りに、相模原M48戦車搬出入阻止闘争、9・16三里塚機動隊殲滅一周年集会等々としてきわめて微力ながらも出発してきています。

今後、さらに多くの友人諸君と共に闘いぬいていくものであり、早急に組織的整備を終え、階級闘争の第一線における不動の潮流へと前進していく決意であります。友人、読者諸兄の力強い御協力をお願いします。

解放通信 創刊号

発行日 1972年9月16日

編集 解放委員会「解放通信」編集委員会

連絡所 東京都豊島区北大塚2-11-10 パワー大塚205号

紅灯社発行 TEL (03)915-6225

定価 280円